

東関東自動車道(木更津・富津線) 埋蔵文化財調査報告書 10

—君津市山高原二町横穴群・宝泉寺横穴群・大山野横畑横穴・姥田遺跡—

平成19年3月

東日本高速道路株式会社
財団法人 千葉県教育振興財団

東関東自動車道(木更津・富津線) 埋蔵文化財調査報告書 10

きみつ やまたかはらふたまち ほうせんじ おおやまのよこばたけ うばた
—君津市山高原二町横穴群・宝泉寺横穴群・大山野横畑横穴・姥田遺跡—

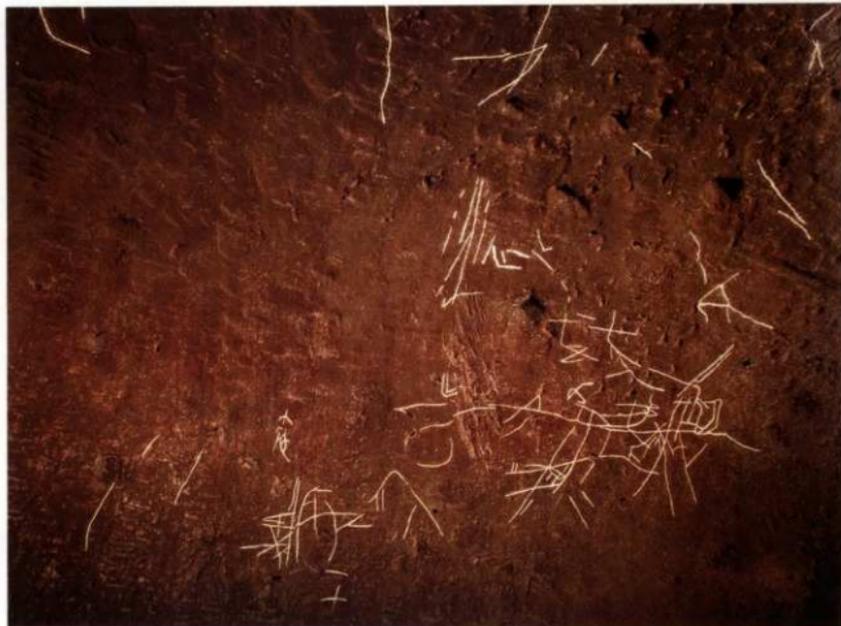


▶線刻
全景



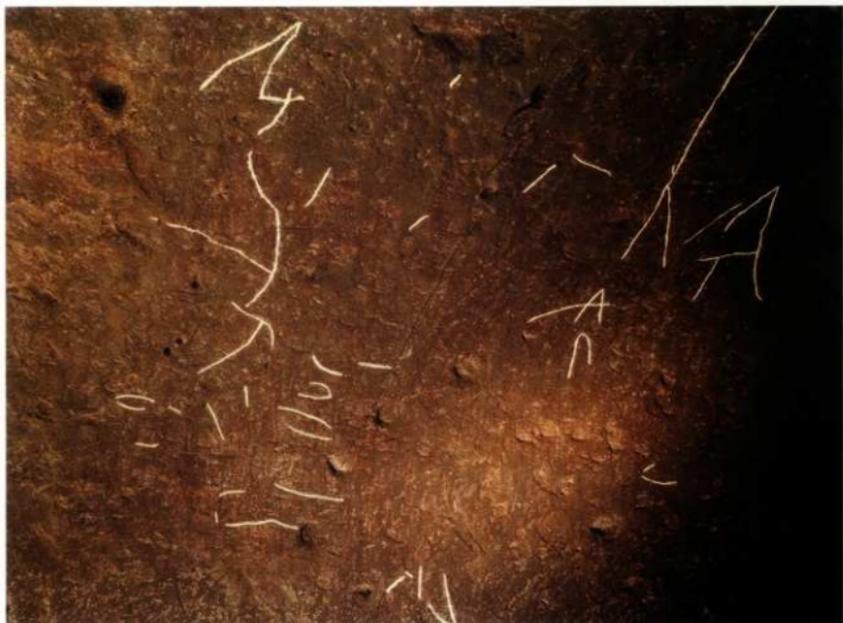
▶右側壁
線刻

※線刻自体は
浅く写真で
は不明瞭と
なるので、
白色粘土を
充填した。

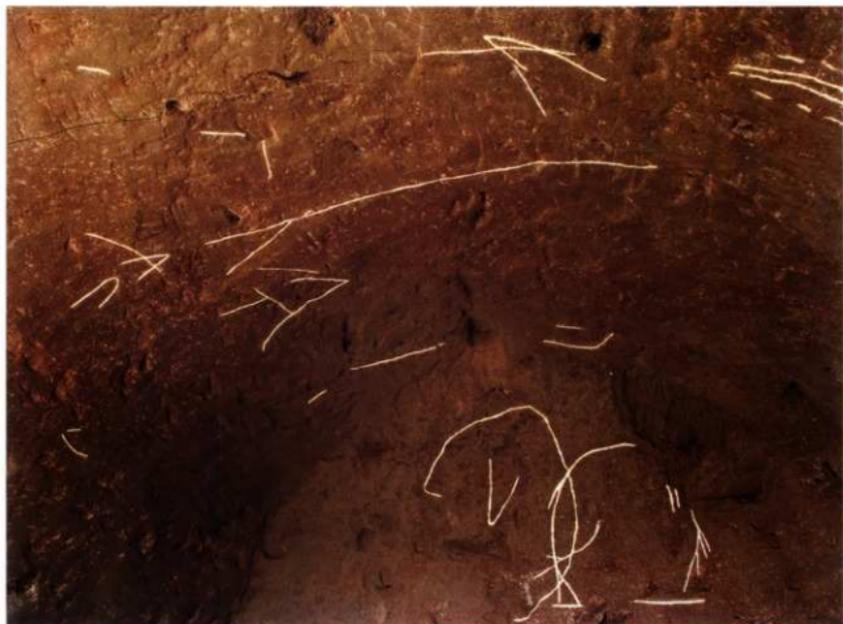


山高原二町横穴群ST001線刻画（全景、右側壁）

▶ 左側壁
線刻



▶ 天井・奥壁
線刻



山高原二町横穴群ST001線刻画（左側壁、天井・奥壁）

▶ B区
空中写真



▶ B区
溝群近景



姥田遺跡 溝群

序 文

財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第578集として、東日本高速道路株式会社の東関東自動車道（木更津・富津線）建設事業に伴って実施した君津市山高原二町横穴群ほかの発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、線刻画を有する古墳時代後期の横穴墓が発見されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成19年3月

財団法人 千葉県教育振興財団
理事長 岡野孝之

凡 例

1 本書は、東日本高速道路株式会社による東関東自動車道（木更津・富津線）建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書（第10冊目）である。

2 本書に収録した遺跡は、次の通りである。

| 遺 跡 名 | 遺跡コード | 所在地 |
|----------|---------|---------------------|
| 姥田遺跡 | 225-011 | 千葉県君津市六手字沖田379ほか |
| 宝泉寺横穴群 | 225-028 | 千葉県君津市大山野字本越704-6 |
| 山高原二町横穴群 | 225-029 | 千葉県君津市大山野字若祭588-4ほか |
| 大山野横畑横穴 | 225-030 | 千葉県君津市大山野字横畑218 |

3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、東日本高速道路株式会社の委託を受け、財団法人千葉県教育振興財団が実施した。

4 発掘調査及び整理事業の組織、担当者及び実施期間は、第1章に記載した。

5 本書の執筆・編集は、上席研究員 小高春雄が担当した。

6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、東日本高速道路株式会社、君津市教育委員会、財団法人君津都市文化財センター、塚越 節氏ほかの方々から御指導、御協力を得た。

7 本書で使用した地形図は次の通りである。

第1図・第17図 国土地理院平成13年発行 1:25,000地形図「鹿野山」(NI-54-26-1-1) (原寸)
第18図～第20図・第35図 君津市平成8年発行 1:2,500地形図 (原寸または縮小)

8 周辺空中写真は、京葉測量株式会社による昭和46年（図版19）、同49年（図版1）撮影のものを拡大して使用した。

9 本書で使用した座標は、すべて日本測地系にもとづく平面直角座標であり、図面の方位は座標北である。

10 遺物実測図断面の黒塗りは須恵器を表す。

11 横穴墓の説明のうち、右側また左側については向かって右左とした。

12 使用したスクリーントーンの説明は挿図中に示した。

本文目次

| | |
|--------------------------|----|
| 第1章 はじめに | 1 |
| 第1節 調査に至る経緯 | 1 |
| 第2節 調査概要及び調査組織等 | 1 |
| 1 調査概要 | 1 |
| 2 調査組織等 | 2 |
| 第3節 遺跡の位置と周辺の歴史的環境 | 3 |
| 第2章 山高原二町横穴群 | 6 |
| 第1節 調査の概要 | 6 |
| 1 調査の方法 | 6 |
| 2 調査の経過 | 6 |
| 第2節 遺構と遺物 | 6 |
| 1 ST001 | 6 |
| 2 ST002 | 11 |
| 3 ST003 | 14 |
| 第3章 宝泉寺横穴群 | 17 |
| 第1節 調査の概要 | 17 |
| 1 調査の方法 | 17 |
| 2 調査の経過 | 19 |
| 第2節 遺構と遺物 | 19 |
| ST006 | 19 |
| 第4章 大山野横畑横穴 | 20 |
| 第1節 調査の概要 | 20 |
| 1 調査の方法 | 20 |
| 2 調査の経過 | 20 |
| 第2節 遺構と遺物 | 20 |
| 1 ST001 | 20 |
| 2 SK001 | 27 |
| 3 SK002 | 28 |
| 第5章 姥田遺跡 | 29 |

| | |
|--------------------------|----|
| 第1節 遺跡の位置と周辺の歴史的環境 | 29 |
| 第2節 調査の概要 | 31 |
| 1 調査の方法 | 31 |
| 2 調査の経過 | 31 |
| 第3節 遺構と遺物 | 31 |
| 1 A地区 | 31 |
| 2 B地区 | 37 |
| 第4節 遺構に伴わない遺物 | 46 |
| | |
| 第6章 まとめ | 53 |
| 第1節 横穴墓について | 53 |
| 第2節 山高原二町横穴群ST001線刻画について | 53 |
| 第3節 中・近世の横穴・岩窟遺構について | 55 |
| 第4節 姥田遺跡とその周辺 | 56 |
| | |
| 報告書抄録 | 巻末 |

挿図目次

| | | | |
|-------------------------|----|------------------------|----|
| 第1図 周辺の横穴墓等の分布 | 4 | (網線内は本調査範囲) | 32 |
| 第2図 山高原二町横穴群の位置と分布 | 7 | 第19図 北側調査区確認トレンチ・本調査範囲 | 33 |
| 第3図 山高原二町横穴群ST001(1) | 8 | 第20図 南側調査区確認トレンチ・本調査範囲 | 34 |
| 第4図 山高原二町横穴群ST001(2) | 9 | 第21図 北側本調査A区全体図 | 35 |
| 第5図 山高原二町横穴群ST001線刻画 | 10 | 第22図 SE001 | 36 |
| 第6図 山高原二町横穴群ST002 | 12 | 第23図 南側本調査B区全体図 | 38 |
| 第7図 山高原二町横穴群ST002 | | 第24図 B区北側 | |
| 遺物出土状況・出土遺物 | 13 | (網線内は第25図～第27図に対応) | 39 |
| 第8図 山高原二町横穴群ST003 | 15 | 第25図 溝群詳細図(1) | 40 |
| 第9図 宝泉寺横穴群ST006の位置 | 17 | 第26図 溝群詳細図(2) | 41 |
| 第10図 宝泉寺横穴群ST006 | 18 | 第27図 溝群詳細図(3) | 42 |
| 第11図 大山野横畑横穴の位置 | 21 | 第28図 B区南側(網線内は第29図に対応) | 43 |
| 第12図 大山野横畑横穴ST001(1) | 22 | 第29図 溝群詳細図(4) | 44 |
| 第13図 大山野横畑横穴ST001(2) | 24 | 第30図 確認トレンチ時期別出土遺物及び | |
| 第14図 大山野横畑横穴ST001(3) | 25 | 基本土層 | 45 |
| 第15図 大山野横畑横穴ST001 | | 第31図 純田遺跡出土遺物(1) | 47 |
| 覆土セクション・出土遺物 | 26 | 第32図 純田遺跡出土遺物(2) | 48 |
| 第16図 大山野横畑横穴SK001・SK002 | 27 | 第33図 純田遺跡出土遺物(3) | 50 |
| 第17図 純田遺跡と周辺の遺跡 | 29 | 第34図 純田遺跡出土遺物(4) | 52 |
| 第18図 純田遺跡調査範囲 | | 第35図 純田遺跡とその周辺 | 57 |

図版目次

| | |
|---------------------------------------|---------------------------------------|
| 巻頭図版1 山高原二町横穴群ST001線刻画 (全景、右側壁) | 図版5 山高原二町横穴群ST001線刻画(奥壁) |
| 巻頭図版2 山高原二町横穴群ST001線刻画 (左側壁、天井・奥壁) | 図版6 山高原二町横穴群ST001線刻画(左側壁) |
| 巻頭図版3 純田遺跡溝群 | 図版7 山高原二町横穴群ST001線刻画(天井) |
| 図版1 遺跡周辺空中写真 | 図版8 山高原二町横穴群ST001壁面および前面 の谷 |
| 図版2 山高原二町横穴群ST001遠景・近景 | 図版9 山高原二町横穴群ST002・ST003近景、 ST002全景 |
| 図版3 山高原二町横穴群ST001線刻画全景・奥 壁近景 | 図版10 山高原二町横穴群ST002セクション・壁 面ほか |
| 図版4 山高原二町横穴群ST001線刻画(右側壁) | 図版11 山高原二町横穴群ST003全景ほか |
| | 図版12 宝泉寺横穴群ST006全景・壁面ほか |

- | | | | |
|------|------------------------------|------|--------------------------|
| 図版13 | 大山野横畑横穴ST001遠景・全景 | 図版21 | 姥田遺跡A区溝群各景 |
| 図版14 | 大山野横畑横穴ST001近景・墓前域ほか | 図版22 | 姥田遺跡SE001・SK001・SK002各全景 |
| 図版15 | 大山野横畑横穴ST001左右・奥壁 | 図版23 | 姥田遺跡B区空中写真全景 |
| 図版16 | 大山野横畑横穴ST001羨道セクション・遺物出土状況ほか | 図版24 | 姥田遺跡B区空中写真各景 |
| 図版17 | 大山野横畑横穴SK001・SK002 | 図版25 | 姥田遺跡B区溝群各景(1) |
| 図版18 | 山高原二町横穴群・大山野横畑横穴出土遺物 | 図版26 | 姥田遺跡B区溝群各景(2) |
| 図版19 | 姥田遺跡周辺空中写真 | 図版27 | 姥田遺跡出土遺物(1) |
| 図版20 | 姥田遺跡確認トレンチ各景 | 図版28 | 姥田遺跡出土遺物(2) |
| | | 図版29 | 姥田遺跡出土遺物(3) |
| | | 図版30 | 姥田遺跡出土遺物(4) |

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

東関東自動車道千葉富津線（路線名：館山自動車道）は、平成7年度に千葉市から木更津南インターチェンジまでの約35kmの区間が開通した。次いで、木更津南ジャンクションから君津市を経て富津竹岡インターチェンジに至る約21kmの区間が東関東自動車道（木更津～富津）として事業化され、現在建設中である。

建設用地内には多くの遺跡が所在しており、その取扱いについて千葉県教育委員会と東日本高速道路株式会社（旧日本道路公団）とで協議が進められたが、その結果、現状保存が困難な部分については発掘調査による記録保存の措置を講ずることとなり、財団法人千葉県教育振興財団が発掘調査を実施することとなった。

姥田遺跡の発掘調査は、平成10年度に実施し、平成18年度に整理作業を行った。一方、山高原二町ほかの横穴群については、平成18年度の工事に伴い新たに発見された遺跡であり、その取扱いについては、既に工事が進捗していることもあって、計5基を記録保存とすることで協議が整い、平成17年度から18年度に渡って千葉県教育振興財団が発掘調査を行うこととなった。また、整理作業は平成18年度に行った。

なお、路線内の既知の遺跡については既に発掘調査が終了し（当財団実施）、報告書も順次発行されている。

第2節 調査概要および調査組織等

1 調査概要

木更津南ジャンクションから富津竹岡インターチェンジに至る区間のうち、調査対象となった遺跡は計29か所であり、当報告書では君津市姥田遺跡他計4遺跡を報告する。

姥田遺跡は小糸川中～下流右岸の沖積段丘面を広く括った遺跡であり、今回の調査区は地形と直交するように走る路線幅（幅60m～80m）を対象としたものである。調査の結果、並行する古墳時代の溝跡群が段丘面北寄りと中央部の2か所で、また、北側では中世の井戸や土坑も検出された。

一方、山高原二町横穴群は新発見の遺跡であることから、その字名の一部を採って遺跡名とした。南側の1基は既にその一部が開口していたこともあってか、特記すべき遺物は出土しなかった。しかし、壁の3面に線刻画が認められ、こちらが調査の中心となった。一方、北側の2基は調査の進捗に伴い横穴墓より下る中・近世の横穴および岩窟遺構と判断された。その性格については「やぐら」というより、当地特有の岩盤よりなる丘陵崖面を活用した信仰ないし生活空間と推測される。

宝泉寺横穴群は民家の裏手崖面に当たり、その一部は民有地であったが、地権者（塚越 節氏）の了解を得て調査を行った。調査の結果は山高原二町横穴群の北側の群と同様の性格を有するものと考えられる。なお、宝泉寺横穴群自体は既知の横穴群で、南東尾根伝いの丘陵南面には5基の横穴が所在する。

大山野横穴群は新発見の遺跡であり、これも小字名を採って遺跡名とした。当初玄室部のみかと判断されたが、前面のテラス部分を掘り下げた結果、玄室に比べて規模の大きな羨道・墓前域が良好に遺存していることが確認された。このテラス部は、近代初め頃の畑地化による削平・土盛りの結果であると判断

されたので、機械力も導入して土盛りした層を排除し、その全域を把握することに努めた。その結果、ほぼ完全に羨道・墓前域を検出し、併せて墓前域を切るかたちで設けられた中・近世の土坑墓2基も確認・調査した。

2 調査組織等

(1) 発掘調査

平成10年度

姥田遺跡

期 間 平成10年4月1日～平成10年9月30日
組 織 調査部長 沼澤 豊 南部調査事務所長 高田 博
担当職員 副所長 柴田龍司 研究員 鈴木良征
対 象 確認調査 2,615㎡/52,300㎡ 本調査 4,619㎡

平成17年度

山高原二町横穴群

期 間 平成17年9月29日～平成17年10月31日
組 織 調査部長 矢戸三男 南部調査事務所長 高田 博
担当職員 上席研究員 小高春雄 沖松信隆
対 象 本調査 横穴墓3基

宝泉寺横穴群

期 間 平成17年10月20日～平成17年10月31日
組 織 調査部長 矢戸三男 南部調査事務所長 高田 博
担当職員 上席研究員 沖松信隆
対 象 本調査 横穴墓1基

平成18年度

大山野横畑横穴

期 間 平成18年4月6日～平成18年4月27日
組 織 調査研究部長 矢戸三男 南部調査事務所長 高田 博
担当職員 上席研究員 小高春雄
対 象 本調査 横穴墓1基

(2) 整理作業

平成18年度

期 間 平成18年6月1日～平成18年7月31日、平成19年1月1日～平成19年3月31日
組 織 調査研究部長 矢戸三男 南部調査事務所長 高田 博
担当職員 上席研究員 小高春雄
内 容 山高原二町横穴群（水洗・注記～刊行）、宝泉寺横穴群（水洗・注記～刊行）
大山野横畑横穴（水洗・注記～刊行）、姥田遺跡（水洗・注記～刊行）

第3節 遺跡の位置と周辺の歴史的環境

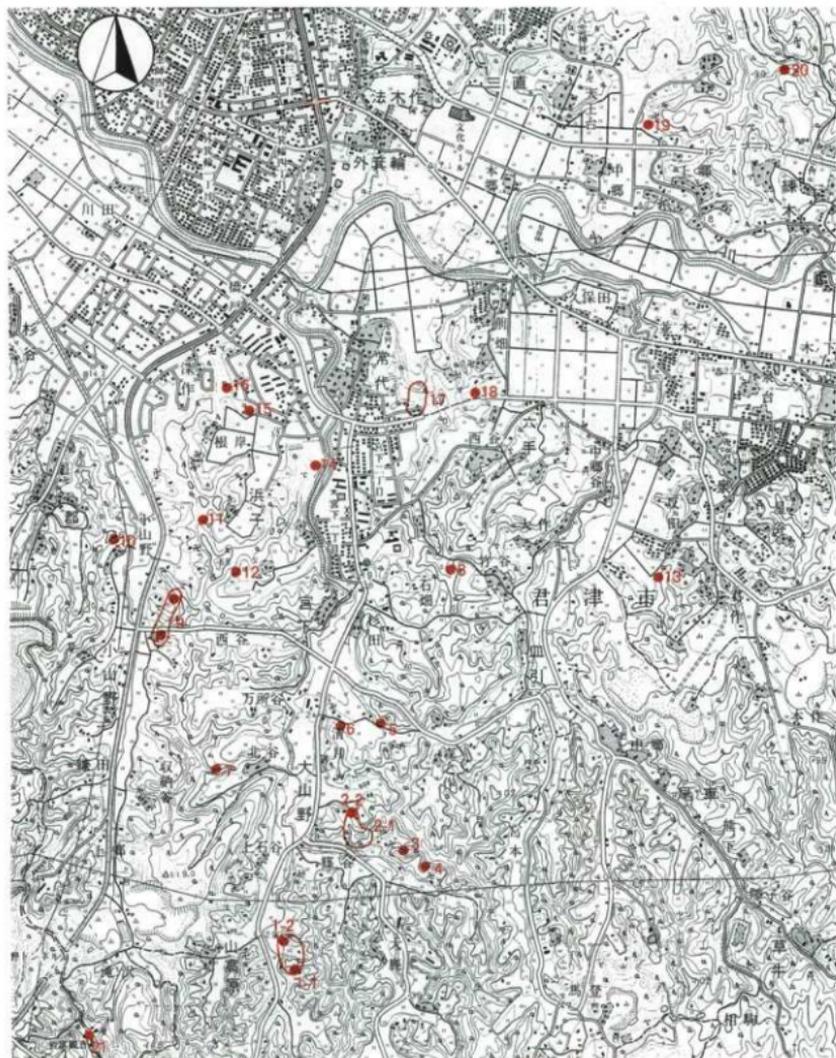
今回報告する遺跡は小糸川谷底平野に所在する埴田遺跡を除けば富津市寄りの山間地にある複数の横穴群、中・近世の横穴および岩窟遺構である。それゆえ、総花的に周囲の遺跡を紹介することは避け、君津市～富津市にかけての横穴群に的を絞って概説し、埴田遺跡については第6章内に別に節を設けることとした。

小糸川左岸それも中流域の横穴墓については従来これといった報告例はなく、僅かに分布調査によって位置及び基数が確認されているにすぎない。

<周辺横穴（群）一覧¹⁾（やぐら含む）>

| 番号 | 名称 | 所在地 | 基数 | 備考 |
|-----|---------------|--------|----|--------------------------------------|
| 1-1 | 山高原二町横穴群ST001 | 君津市山高原 | 1 | |
| 1-2 | " ST002-003 | " " | 2 | 中・近世の横穴・岩窟遺構 2 |
| 2-1 | 宝泉寺横穴群 | " 大山野 | 5 | |
| 2-2 | " ST006 | " " | 1 | 中・近世の横穴 1 |
| 3 | " やぐら群 | " " | 2 | やぐら 2 |
| 4 | 大山野横畑横穴 | " " | 1 | |
| 5 | 万願寺横穴 | " " | 1 | 註1-①文献では「窪地と判明」とする。 |
| 6 | 五霊やぐら群 | " " | 7 | やぐら 7 |
| 7 | 折越谷横穴 | " " | 1 | |
| 8 | 小坪横穴 | " 六手 | 1 | |
| 9 | 小山野横穴群 | " 小山野 | 26 | 君津市指定史跡 |
| 10 | 不二田横穴群 | " 小山野 | 2 | |
| 11 | 胡摩伝横穴群 | " 浜子 | 5 | |
| 12 | 宮下横穴 | " 宮下 | 1 | |
| 13 | 君ヶ作横穴群 | " 泉 | 2 | |
| 14 | 日影山横穴 | " 小山野 | 1 | 1994年調査・1996年報告 ²⁾ |
| 15 | 浜子横穴 | " 浜子 | 5 | 中谷B支群（別称）やぐら含む |
| 16 | 浜子中谷横穴群 | " " | 5 | 中谷A支群（別称） |
| 17 | 常代谷田横穴群 | " 常代 | 6 | 谷田横穴群（別称） |
| 18 | 六手中谷横穴群 | " 六手 | 3 | 奥中谷横穴群（別称） |
| 19 | 奥谷横穴 | " 三直 | 1 | |
| 20 | 桶田谷横穴 | " 練木 | 1 | |
| 21 | 岩富寺（城跡） | " 亀沢 | 3 | やぐら 3 2003年度調査・2005年報告 ³⁾ |

一瞥してわかるとおり、当地域の横穴墓は西上総の岩瀬川、湊川流域など、横穴墓の盛行地域と比較すれば遺跡数はともかく、その基数は明らかに少ない。要するに、単独ないしわずかな基数で存在するので



第1図 周辺の横穴墓の分布(国土地理院1:25,000鹿野山)

1-1山高原二町横穴群ST001 1-2山高原二町横穴群ST002・003 2-1宝泉寺横穴群 2-2宝泉寺横穴群ST006
 3宝泉寺やぐら群 4五堂やぐら群 5大山野横畑横穴 6万願寺横穴 7折越谷横穴 8小平横穴 9小山野横穴
 10不二田横穴群 11胡摩伝横穴群 12宮下横穴 13君ヶ作横穴群 14日影山横穴 15浜子横穴 16浜子中
 谷横穴群 17常代谷田横穴群 18六手中谷横穴群 19奥谷横穴 20桶田谷横穴 21岩富寺(古代~中世寺院跡、
 中世城跡)

ある。さらに、小糸川右岸地域となると横穴墓は河口付近⁴⁾を除きほとんど築かれていない。一般的に横穴の造営は地質条件、つまり、泥岩等横穴の構築に適した地域で盛行する。また、古墳築造に適した平地の有無も大きく影響する。その点からすれば、周南層（砂層）に相当し、なだらかな丘陵の分布する左岸地域でも横穴墓の入り込む余地は少ないと言わねばならない。なお、この点については、当地における地質条件—砂層と軟質泥岩層との互層—が影響している可能性が高い。

その絶対数については、横穴墓の特性からして把握された数がすべてではないだろう。しかし、稠密地域のように何十基という集合性は考えにくく、単独ないし小規模の群構成が一般的かと推測される。そのことは、図らずも今回の調査経緯が示している如く、未発見の横穴も多いことと思われる。

中・近世のやぐらないし岩窟遺構については、山を越えた西側の富津市域で比較的類例があり、一部調査例も見られる。数基単位で存在する例が多いものの、富津市鶴岡の古船やぐら群のように群集する場合もある⁵⁾。しかし、当地では横穴との区別は必ずしも明瞭ではなく、再利用のケースもしばしば見られる。また、岩富寺跡のように調査したものの結局その時代や性格について断定し得ない場合もある⁶⁾。要するに一概にやぐらとして規定できない岩窟も少なからず存在するとみただけが適切ではなからうか。なお、この点は上総南部に多少共通する要素でもある。

注

1 次の2文献を元に今回の成果（3遺跡）を加えた。

①財団法人千葉県文化財センター 2003『千葉県所在河穴遺跡・横穴墓詳細分布調査報告書』

②財団法人千葉県文化財センター 2000『千葉県埋蔵文化財分布地図』（4）

2 甲斐博幸・矢野淳一 1996『常代遺跡群』第4分冊 財団法人君津郡市文化財センター

3 松本 勝 2005『岩富城跡発掘調査報告書』財団法人君津郡市文化財センター

4 久保納戸山・寺山横穴群、花里山横穴群等である。

①君津市 1978『千葉県君津郡君津町誌 後編』

②野中 徹ほか 1972『君津市花里山横穴群 発掘調査概報』君津市教育委員会

5 古船やぐら群については、分布調査報告書に簡単な紹介がある。

千葉県 1996『千葉県やぐら分布調査報告書』

6 注3文献に同じ。

第2章 山高原二町横穴群

第1節 調査の概要

1 調査の方法

山高原二町横穴群は既述したように工事中に発見されたものである。丘陵全体に重機による地形の改変がなされていたのを始めとして、南側の1基（ST001）は既に羨道部が通路の開削により大きく損なわれ、北側の2基（ST002、ST003）も背後の工事等、既に旧状が大きく変更されたような状況であった。また、後世の山道や耕地の造成、谷間の宅地化などに伴う地形の改変も既に相当進んでいたようである。それゆえ、横穴周辺の地形測量はST002以外は省略した。

調査区の設定は、横穴の縦軸に沿って中心線を設定し、玄室の中心部付近に直交線を求め、これを基本として発掘・実測した。しかし、既述した条件などから北側の2基については実状に即して実施した。また、調査範囲や内容等、個別の遺存状況に応じて対処した。なお、公共座標との整合については、北側、南側の各横穴近くに設けた座標杭から算出した。

2 調査の経過

南側調査区の1基をST001、北側調査区の2基を東側からそれぞれST002、ST003とした。丘陵地で尚かつ横穴墓の調査ということもあり、通路や周囲崖面の安全対策を講じたいうえ同時併行で調査に着手した。

ST002、ST003ともに天井部が一部崩壊ないしは人為的に崩されたことと予想されたことから、前面の羨道部に主眼を置いて調査を実施した。その結果、羨道に相当する遺構は確認されず、遺物も古墳時代に遡るものはみられなかった。

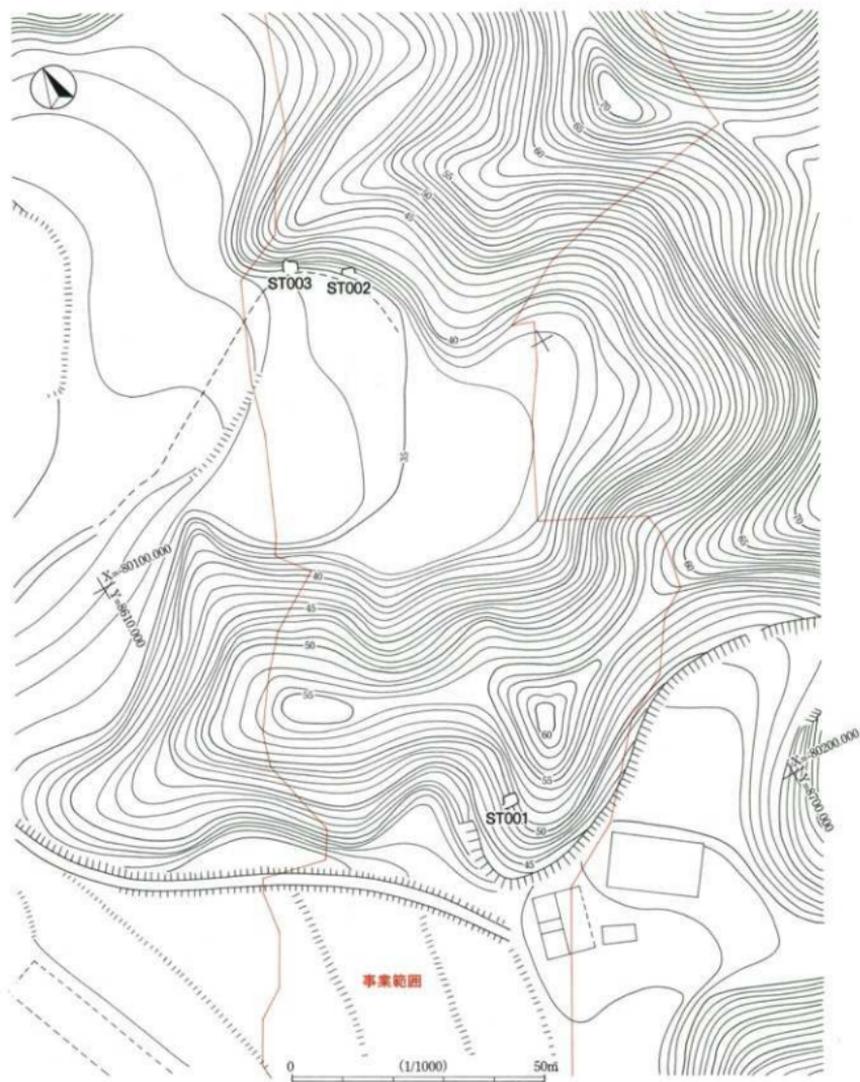
一方、ST001は工事に伴う流入を除いて玄室内の土砂の堆積はほとんどなく、遺物も精査した結果、僅か1点の土師器片が出土したのみであった。それゆえ、遺構の実測とりわけ線刻画の確認が作業の大きなウェイトを占めた。この線刻であるが、金属状の工具先端で付けたような浅い溝であり、そのままでは写真でも識別困難というほかに、白色粘土によって溝を充填する手法を採り、撮影・記録した。

第2節 遺構と遺物

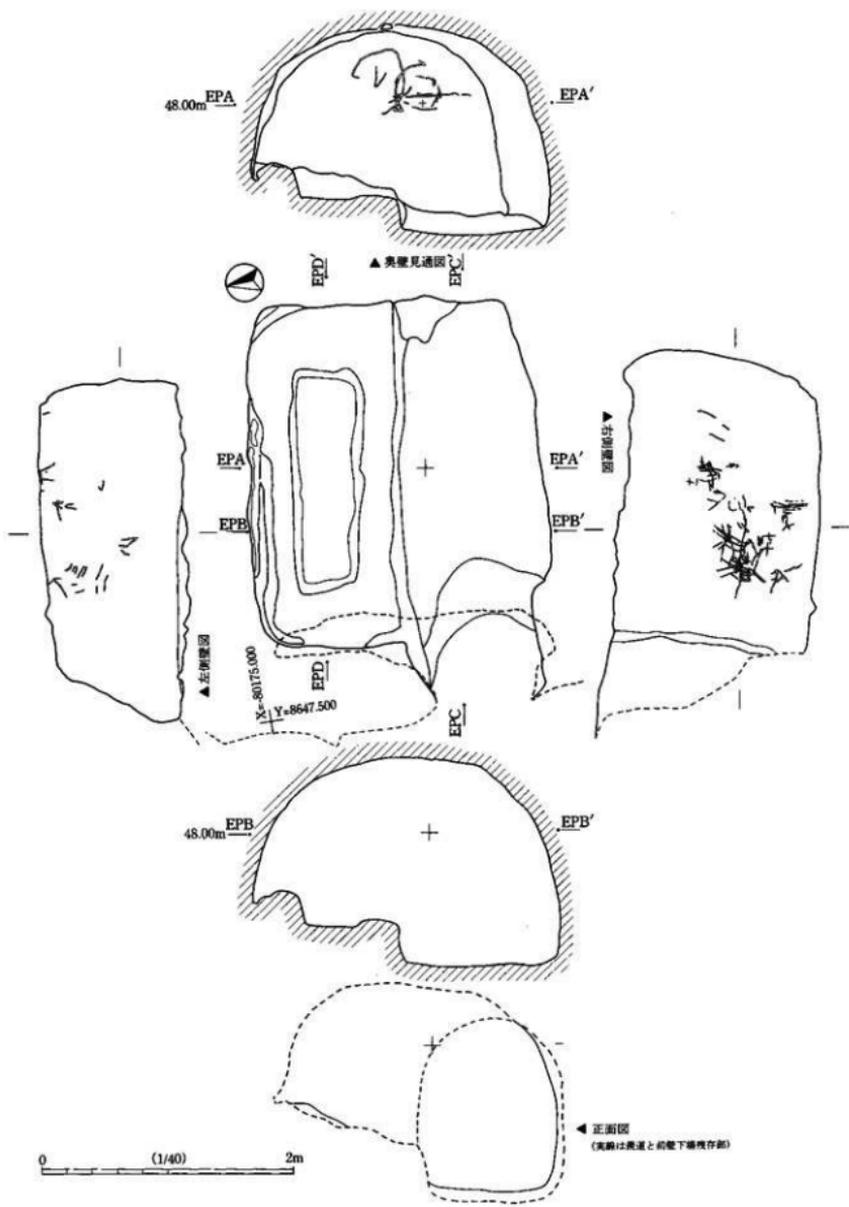
1 ST001（第2～5図、巻頭図版1・2、図版2～8）

立地 ST001は宮下川上流の狭い谷底低地に臨む丘陵（標高61m）の南西斜面に立地する。横穴辺りの標高は大体48mで、且つ山麓付近は38m前後であるから、その比高差は10m程である。地質はシルトないし砂であるが、横穴の位置する高さは4m～5mの厚みで軟質泥岩層が分布し、恐らくこの地質条件が横穴構築の一つの要因になったと思われる。

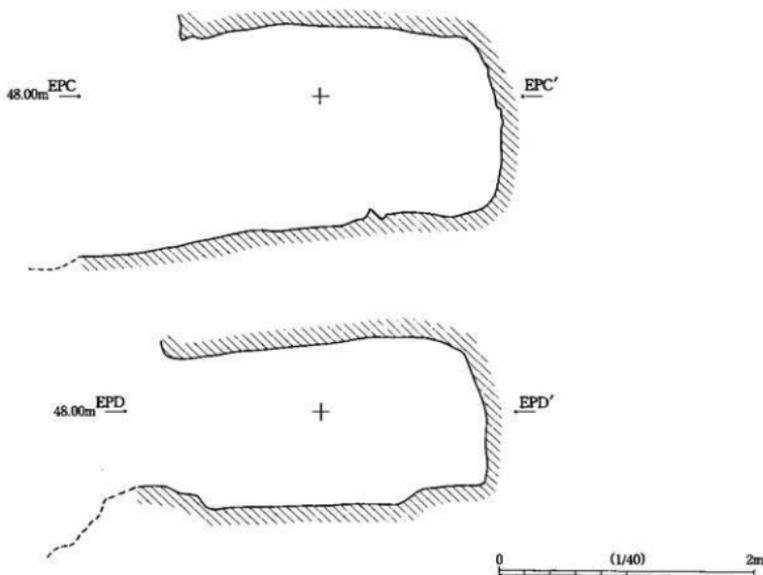
旧状と遺構確認状況 既述したように、羨道部は既に工事に伴って多少削られ、また、横穴周囲とりわけ玄室天井部の真上に当たる丘陵面も大きく削平された状況であった。しかし、地元住人の話によれば羨道に当たる部分がかつて斜面と併行して南北に通る山道に相当し、その傍らに穴が開いた状態であったという。ただし、穴の大きさは現在より小さかったことは確実なので、斜面の傾斜の程度を考慮すれば削った厚みは1m程、つまり、工事前は残存部から約1m程度の羨道部が遺存していたことになろう。



第2図 山高原二町横穴群の位置と分布



第3図 山高原二町横穴群ST001(1)



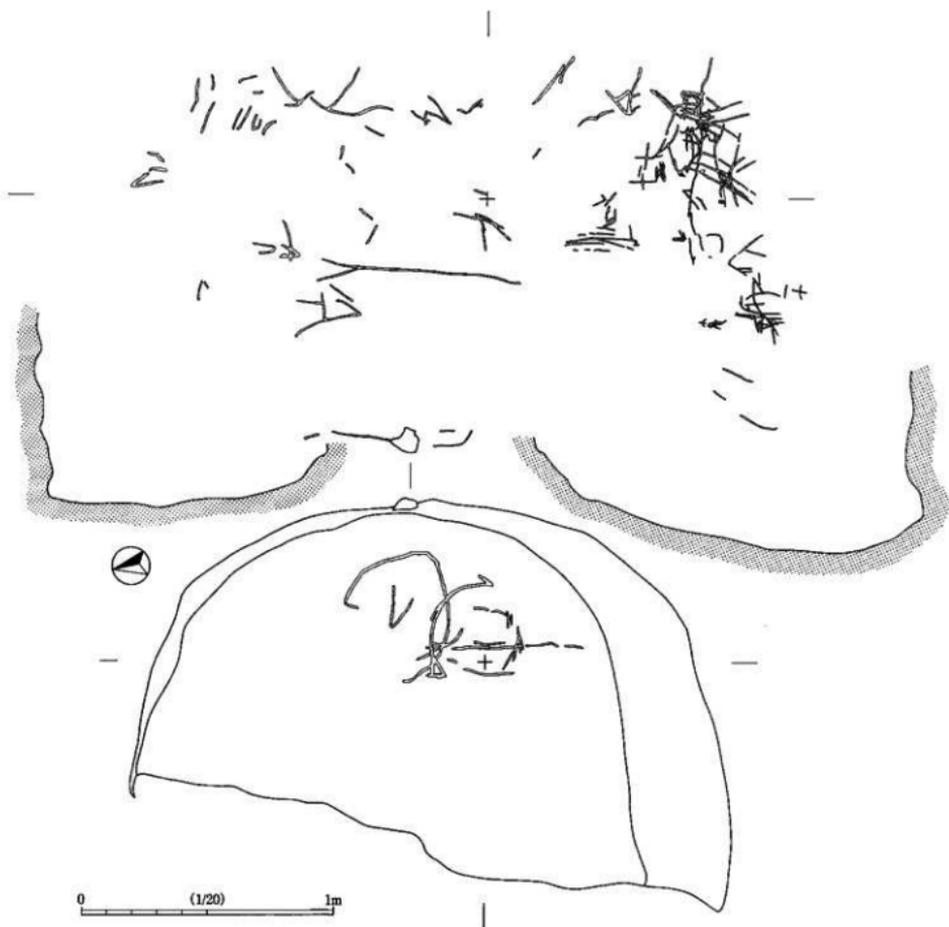
第4図 山高原二町横穴群ST001(2)

この羨道部がどこまで延びていたかであるが、玄室との境界から約3m外で崖となることから、墓前域を含めた遺構もその範囲で考える必要がある。なお、前面の崖については、開田等後世の人為的影響は考えにくいので、その後の崩壊を考慮しても現状とそう大きな違いはないものと思われる。

埋積状況 既に羨道が開口していたわりには土砂の堆積は無いに等しい状況であった。これは壁面の遺存状況が極めて良好であったことと附合するのだろうが、羨道部が玄室より低く且つ下り傾斜となっていることにも起因するであろう。また、横穴墓の場合、近世以降の遺物がしばしば出土するがここでは皆無であった。横穴墓自体が小さいのに加え、山間地ということもあり、結果として後世の人が利用することもなかったであろう。

構造 玄室の規模は縦2.7m×横2.3m×高さ1.5m、形態は多少縦長の長方形である。棺台は一段高く左側に配するのみの片袖構造であり、その段差は25cm～30cm程である。周溝はこの棺台、それも壁に接する部分の北側～西側の一部にかけて廻っていた。天井部の形態は縦アーチ形であり、奥壁の頂部には棟の木口を思わせる彫りこみが見られる。羨道は一部遺存し、推定ながら間口1m、高さ1.5m程のアーチ形になろうかと思われる。なお、羨道部自体は前面の地形からしてせいぜい長さ1m～1.5m程度と推測され、幾分下り傾斜で外と通じていたようである。

壁面には両側面と奥壁に線刻画が存在した。構造からして棺座手前の壁面にもあった可能性があるが、これは壁そのものが消滅していたので確認の仕様がな。線刻の幅は1mm～数mm、深さは1mm～2mm程度である。断面形状や壁面の堅さからして金属の先端かと思われるものの、断定はしえない。なお、各面の



第5図 山高原二町横穴群ST001線刻画

概要は次の通りである。

〔右側（南側）壁面〕壁の中央やや上位で1m程度の楕円形の範囲内に集中して認められる。右側は高床建物とも思われるが、それにしては柱が外反気味で、屋根の形状も不自然である。あるいは、屋根を後ろ向きに船と見て、舟に乗せた殯屋ともとれようか。その左側には建物から延びた線の先端と、その下部、また、それに隣接するかたちで線刻のブロックがある。その一部には漢字とも何らかの表象ともつかぬものがあるが、特定しえない。

建物の右肩と左上にも線刻のブロックがある。同様、その表すものは掴みがたいが、右肩のアルファ

ベットのAのようなものは次の左側側面にも類似するものがある。何らかの表象であろうか。一方、左上の場合はその方向（アーチに併行）からしてむしろ天井部に付随するものではなからうか。

〔左側（北側）壁面〕こちらも壁の中央上位でむしろ天井部と一連で描かれた可能性が高い。その現すものはまったく掴みがたいが、僅かに既述したAのような部分をあげるのみである。

〔天井部〕左右両壁面とはほぼ同じ並びに収まる。構成としては横方向（つまり横穴の軸に直交する方向）で描かれており、左壁面上位とは同じ流れのなかで描かれたと思われる。ここは線刻そのものが太く、深さもある。

〔奥壁〕奥壁にはその中央上位に一部重複するかたちで楕円及び半円の明瞭な線刻があり、右側のものは目と口らしきものが認められた。人物頭部を表象したものであろうか。

なお、壁面の整形は丸鋸状の工具による。

遺物出土状況 遺物は1点の小さな土師器片のみであった。それも棺台下の僅かな覆土上の上のっている状態であった。横穴が開いていた点とも併せて考えると、遺物そのものがあつたとしても当初の状態が保持されなかった可能性が高い。

出土遺物 土師器杯の口縁部小片である。口縁部にヨコナデを施し、胴部をヘラケズリとする7世紀代の所産ではなからうか（実測図・写真省略）。

2 ST002（第6・7図、図版9・10）

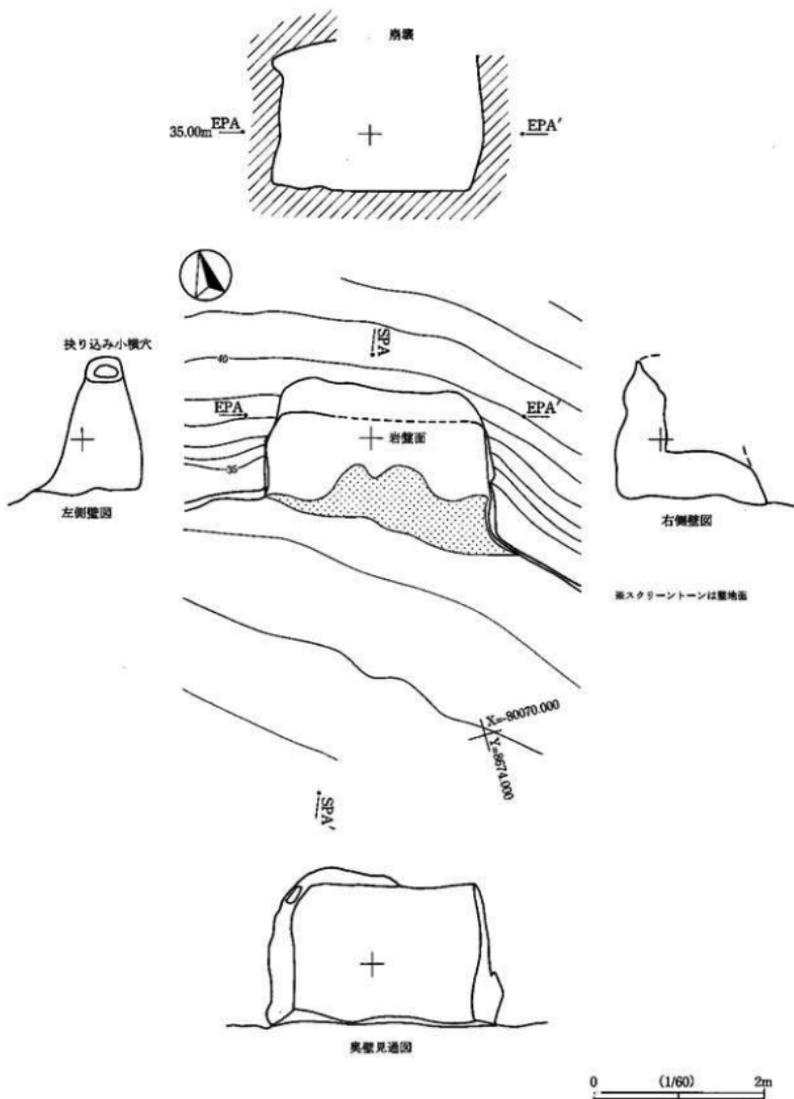
立地 ST002はST001から小さな谷を隔てた北側丘陵先端部にある。横穴中心部の標高は大体35m前後で、前面の谷（水田跡）との比高差は数mにすぎない。地質はシルト質の軟質泥岩で天井部から数m上で砂層となる。

旧状と遺構確認状況 横穴の並ぶ山裾は岩肌が露出した状態であり、しかも垂直にカットしたような形状であった。とりわけST002の付近は傾斜が急で、多少内側に湾曲した位置にある。その状況からしてある程度の崩落ないし開削は予想されたが、前面の谷まで長く延ばした確認トレンチ、及び周囲の拡張結果からおよその旧状は把握できた。次にその事項を箇条書きにする。

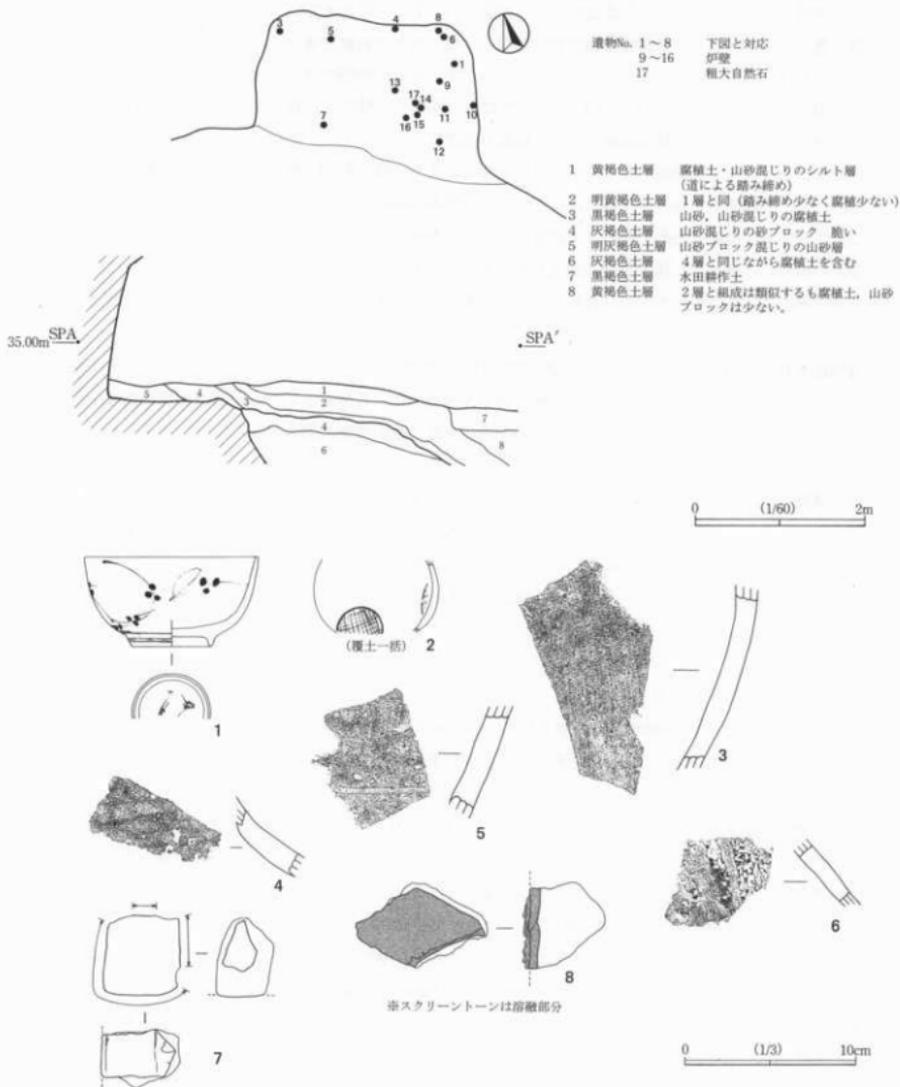
- ①表土下の岩盤面は法面と符号するように傾いている。
- ②遺構床面と同レベルで前面に整地土層が確認された。
- ③整地土層の上に厚さ20cm程の堆積土を積み、山裾に沿って幅約2m弱（1間）の道の踏み締め面と屑部の土留め用材を検出した。

以上の結果を総合すると、天井部や壁は開削・崩壊があつたとしても軽微であつた反面、前面には横穴掘削に伴う土砂を整地して約2m程の平場を造成しており、内部に納骨坑も見られないことなど、中・近世岩窟遺構の一類型と見なされよう。

埋積状況 横穴内部～前面にかけては軟質泥岩片を多く含む土砂が堆積していたが、これは工事に伴う上からの流れ込みを含め、比較的新しい所産であると判断されたので、まずそれらを排除した結果が第7図の覆土上面に相当する。この層の上位、それも岩窟内側のみから遺物が集中して出土したことから、意図的にそこに投棄した結果と思われる。遺物の内で最も新しいものは近世後期の磁器片であることから、少なくとも近世後期には埋没環境にあつた、つまり放棄されていたと推測される。また、前面を廻る道については、それに隣接して一段下がるかたちで水田の耕作土が確認されたことから、恐らく、谷部が水田



第6図 山高原二町横穴群ST002



第7図 山高原二町横穴群ST002遺物出土状況・出土遺物

として開発されたのに合わせて作業道路として確保されたものと推測する。

構造 既述した通り、当遺構は横穴墓ではなく、中・近世の岩窟遺構（その名称を含めた考察はまとも参照の事）と思われることから、各部の名称についても独自の判断で行った。

その規模は縦1.5m×横2.5m×高さ1.5m、形態は多少外開きの横に長い長方形である。床面はフラットながら特別丁寧に整形した様子は窺えない。壁面は垂直に立ち上がるも、奥壁を除いて天井部との接点は丸みを帯びる。このため断面形態はカマゴコ形となる。また、壁の掘削・整形痕は尖った丸棒状の工具による。なお、左側壁奥のコーナー部には径20cm一寸の凹みがみられる。対応する位置に同様な凹みがないので、これのみで機能したのであろう。灯り採りの穴であらうか。

横穴の前には既述した通り整地面が見られたが、それも規格性のあるものではなく、掘削時に出た土砂を横穴前面に均等に敷いたといった程度である。第6図の前面コンター図はこの整地面上面を測量した成果である。

遺物出土状況 遺物は底面から10cm～20cm程度浮いた状態でその総てが出土した。内訳は、常滑甍片4、磁器片2、砥石片1、炉壁ブロック（壁の砂岩片含む）10、自然石1である。常滑や磁器茶碗が奥壁寄りに集中する一方、炉壁は右半分に偏る傾向が見られる。その時間的開きは少ないとはいえ、投棄の時期差を示すものであろうか。

出土遺物 1は肥前産磁器碗半個体分で、18世紀前半の製品であらう。2は同じく肥前産磁器小瓶胴部破片（？）であり、18世紀後半の製品であらう。3～6は常滑大甍の胴部片である。色調・胎土から中世の所産であらう。7は凝灰岩製の砥石の破片である。8は鍛冶炉の炉壁片である。軟質の砂岩を削り抜いた炉と思われ、断面は直線的で、恐らく炉上部片と思われる。なお、このような炉壁片はほかに9～10点ほどある。

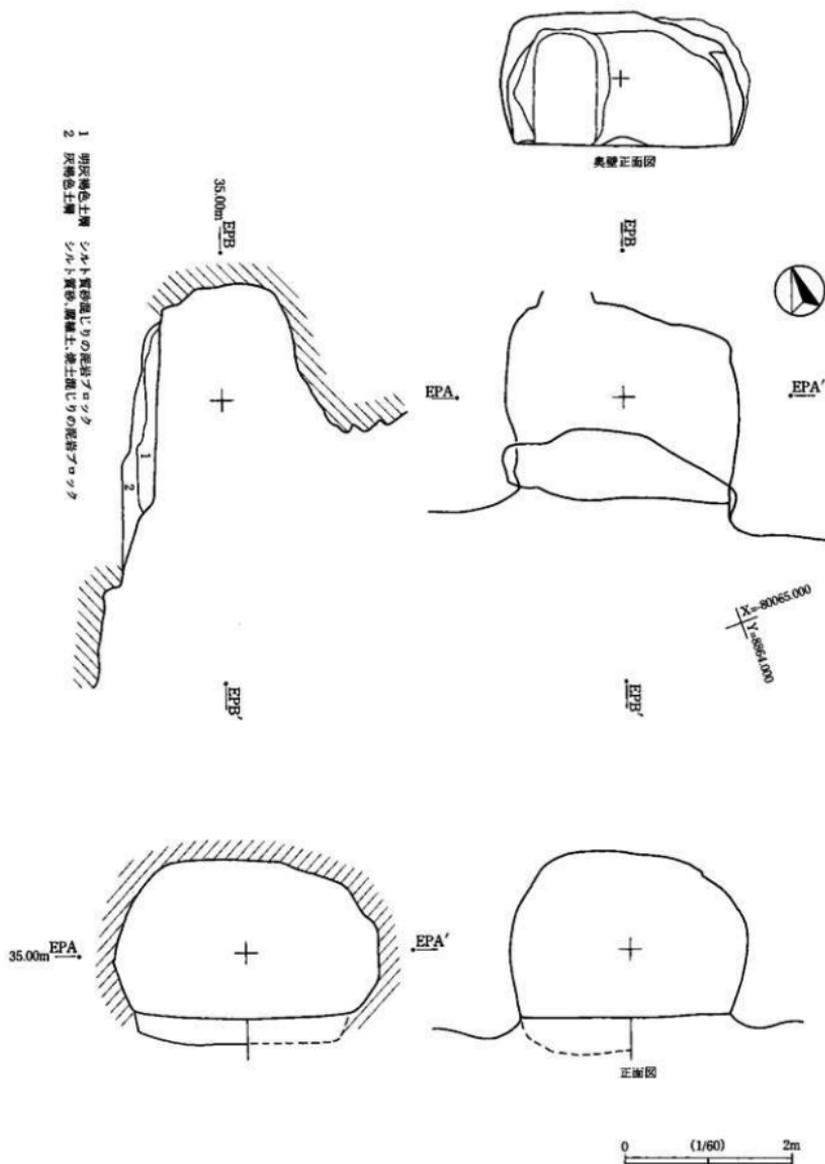
3 ST003（第8図、図版11）

立地 ST003はST002の西側約12mの崖並びにある。横穴中心部の標高は35m前後で、前面は谷の出口に当たっていることもあり、ST002と比較すると多少の下り勾配となる。地質は軟質泥岩というよりシルト質の砂であり、ST002より脆い。

旧状と遺構確認状況 踏査時に埋没なく開口した状態であり、奥壁の向こうには更に横穴らしきものが確認された。内部は農業用のビニールや腐食した材木が確認されたので、まずこれら除去した。その過程で、堆積した土砂は比較的新しく、その量も僅かであることがわかったので、精査も兼ねて床面を出し、むしろ前面の遺構の確認に主眼を置いた。

その結果、横穴墓に特徴的な遺構は確認できず、こどもST002と同様、中・近世の所産と判断されたが、呼称としては横穴状の掘り込みであることから、単に横穴とする。なお、奥壁先の遺構については、第8図に見られるような出入口を有し、その奥にST003と同規模であり、且つ、平面横長の長方形で人がかろうじて入れる程の高さの平天井となる横穴があったが、内部は切殻を厚く敷き詰め、その整形状況など、近代以降の貯蔵庫と思われたので、あえて調査は行なわなかった。

埋積状況 内部に堆積した本来の埋没土砂は僅かであり、しかも壁の剥落に伴う所産と判断された。これは横穴自体の当初の目的はともかく、その後ある時期から物置として使われた結果、埋没を免れたものと推測される。遺物の出土がみられないのも、そのためではなからうか。



第8図 山高原二町横穴群ST003

構造 既述した通り、当遺構は横穴墓ではなく、中・近世の横穴と思われることから、各部の名称についても独自に判断した。

その規模は縦2.2m×横2.8m×高さ1.7m、形態は多少胴膨らみの横長長方形となる。床面はフラットであるが、床面下を現状から30cm内外の深さまで一旦掘り込んだ後、埋め戻している。湿気上の対策であろうか。壁面は奥壁を除いて外側に湾曲するも、これは人為的というより、剥落した結果の可能性が高いとみる。壁の掘削・整形痕はそのためか不明瞭であった。天井部は出入口付近を大きく欠いているものの、これは落盤によるのであろう。

前面は表土下20cm過ぎで地山の泥岩層に当たったが、焼土や炭化物を含んでいたために精査したところ、方形の区画らしき痕跡が窺えた。しかし、区画そのものは方向や広がり等、横穴との関連は薄いと判断されるものであった。

遺物出土状況 遺物は既述した状況故か、近代の所産は別として、中・近世に属するものはまったく出土しなかった。

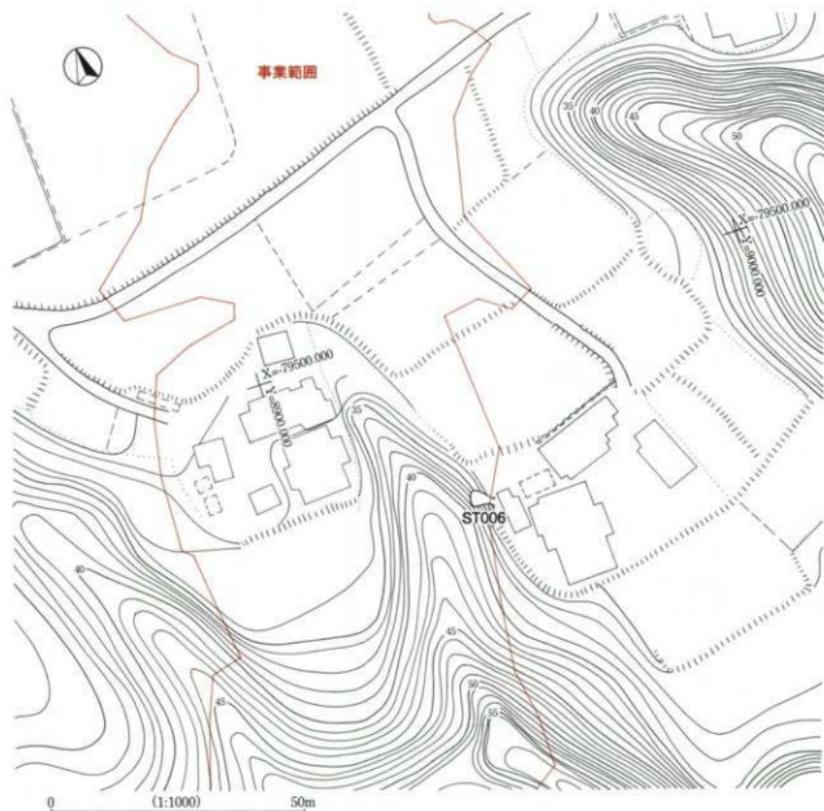
出土遺物 特になし。

第3章 宝泉寺横穴群

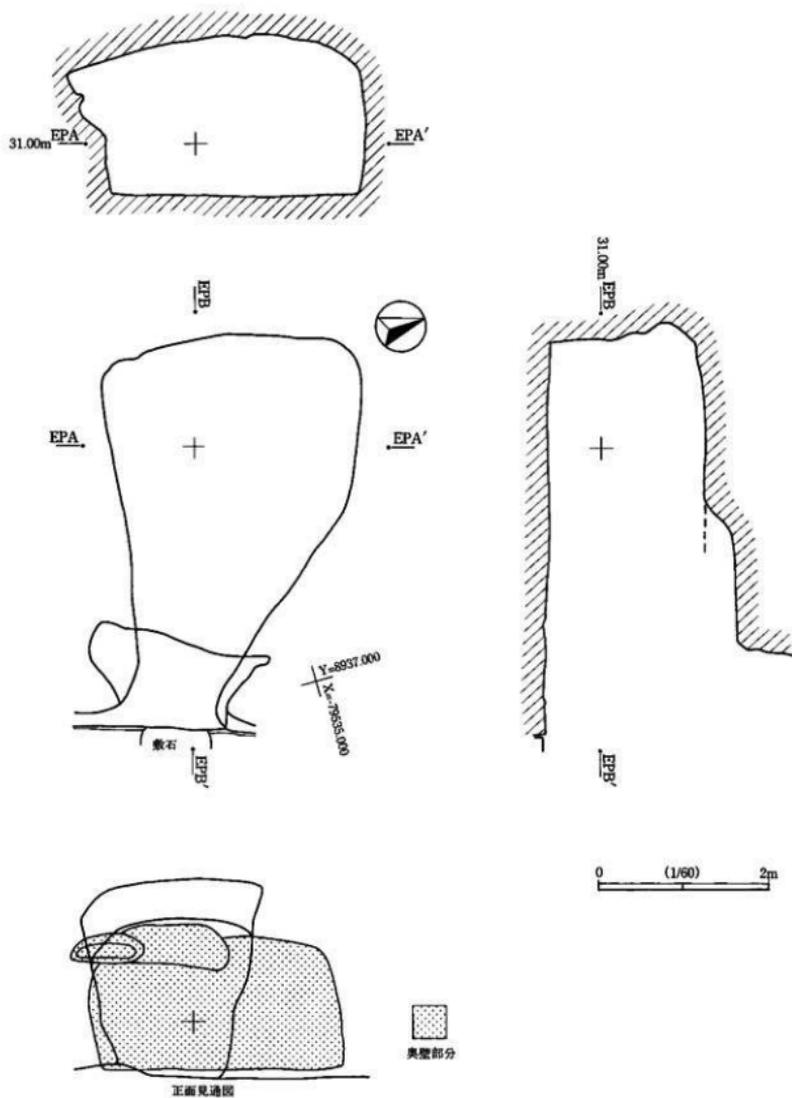
第1節 調査の概要

1 調査の方法

宝泉寺横穴群は北西尾根伝い末端の群から離れて単独に所在する1基が調査対象である。こども山高原と同様、周辺とりわけ背後の地形が工事によって大きく改変されてはいたが、開口する崖面は旧状のまま遺されていた。しかし、出入口の周囲は家屋や池が隙間無く空間を占めている状況であり、崖そのものも種々の事情から登攀もかなわず、結果として地形測量は断念し、横穴本体と出入口前面の僅かな部分のみ調査対象とした。



第9図 宝泉寺横穴群ST006の位置



第10図 宝泉寺横穴群ST006

調査区の設定は、山高原二町横穴群と同様、縦軸に沿って中心線を設定し、玄室の中心部付近に直交線を求め、これを基本にして発掘・実測した。また、公共座標との整合については、前面に設けた座標点から算出した。

なお、番号については、既に宝泉寺横穴群として5基が確認され、遺跡台帳にも記載されていることから今回の報告においては、ST006として扱った。

2 調査の経過

民家裏手の建物間の狭い空間に開口していたが、地権者の協力によって通路の確保と排土の搬出が可能となった。内部はかつて物置として活用され、最近は刳殻を厚く敷き詰め、イモ類の貯蔵所として使っていたようである。刳殻と若干の堆積土を除去し、精査したが伴う遺物は見られなかった。また、壁面も清掃し、整形痕や線刻の確認に努めたが、横穴に通有の丸鋸状の痕跡もなく、線刻等も見出せず、その形状・整形手法等、むしろ中・近世の様相を示すものであった。

第2節 遺構と遺物

ST006 (第9・10図、図版12)

立地 ST006は北側から延びる丘陵末端近くにあり、東側に開口する。横穴中心部の標高は31m前後で、前面は現在民家宅地となっている。底面は宅地とほぼ同じレベルにあるが、聞き取りによれば盛土整地して宅地を造成したというから、地形を考慮すると横穴前面は多少の下り勾配となっていたのであろう。地質はシルト質の軟質泥岩であるが、左側は一部砂層となる。

旧状と遺構確認状況 塚越家裏手の釜屋後ろに相当し、崖面下に入口が開口した状態であった。内部には刳殻が充填しており、イモの貯蔵等に利用していたが、最近はほとんど使っていないということであった。約60cm程の厚さの刳殻を取り除くと、薄い黒色の粘質土(厚さ5cm~10cm)に当たり、その下に泥岩の床面が現れた。入口から見ると、一段下って中に入るかたちとなるが、崖下は上からの土砂の崩落によってかなり埋没しているので、本来はほぼ同じレベルで出入りしていたものと思われる。

なお、入口前面部分は制約上僅かな調査範囲にすぎないが、崖に沿って10cm~20cm程の深さで切り揃えており、その中央には泥岩の切石が認められた。恐らく排水用の溝と出入口のための敷石ではないだろう。

埋積状況 刳殻はともかく、黒色土の上面にトタン板やビニールが見られる反面、その下からはこれといったものは出土しなかった。近代以前の堆積層ではあろうが、その具体的な堆積年代についての手掛かりは得られなかった。

構造 形態・構造等から横穴と呼称する。横穴の規模は縦5.7m×横3.1(最大幅)m×高さ1.9m、平面形態は出入口が左側に偏るイチジク形となる。床面はフラットで泥岩層が露出する。壁面はほぼ垂直であるが、左側は少なからず軟質の砂層に当たっているためか傾いた状態である。また、壁の掘削・整形痕は尖った丸棒状の工具による。天井部は平らながら縦方向に多少湾曲する。出入口は幅1.1m、高さ2.25m(現状)の逆台形状であり、その前面に幅80cmの敷石を置く。なお、この高さについては、地震のために天井が崩れたということなので(地主談)、天井部がそのまま出入口に続いたとすれば1.8mとなる。

遺物出土状況 遺物は近代の所産は別として、中・近世に属するものはまったく出土しなかった。

第4章 大山野横畑横穴

第1節 調査の概要

1 調査の方法

横穴北側の標高約80mの峰から南へ派生する丘陵末端近くに所在する。こも山高原や宝泉寺と同様、前面の谷が工事によって大きく改変されてはいたが、横穴自体は周辺を含め工事による影響は軽微であった。とはいえ、背後が急斜面であることに加え、前面は後世の畑地化に伴うらしい削平が認められたので、地形測量は断念した。

調査区の設定は、玄室の縦軸に沿って中心線を設定し、その中央付近に中心点を求める方法は同じであるが、結果としてとりわけ墓前城の向きとは結構ずれることになった。そのため、これを基本にして調査したが、実測はともかく、覆土の断面図は中心から左側寄りに片寄ってしまった。公共座標との整合については、前面に設けた座標点から算出した。

なお、当横穴は単独であることから、群とはせずに横穴としたが、峰続きに横穴の存在する可能性も否定できない、それゆえ、一応ST001として報告する。

2 調査の経過

当初は小規模な横穴が開口しているのみであったが、一応、羨道・墓前城の存在も考慮してその前面を広く機械力を用いて排土した。覆土は約1m近くの厚みがあり、しかもそのかなりの部分は少なくとも近世以降の人為的所産であることが確認されたので、少なくともこの層までは機械力で排除し、以下は人力で排土した。

調査の進捗に伴い、横穴墓とは異なる円形の落ち込みも2か所確認した。いずれも中程から縁に近い部分であり、中世～近世にわたる時代にそこが墓地となっていたことが判明した。

羨道と墓前城を確認し、底面を精査すると墓前城において一對のピットが検出された。その性格を考えると貴重な遺構と思われることから、さらに精査したがほぼこの2点に限られた。

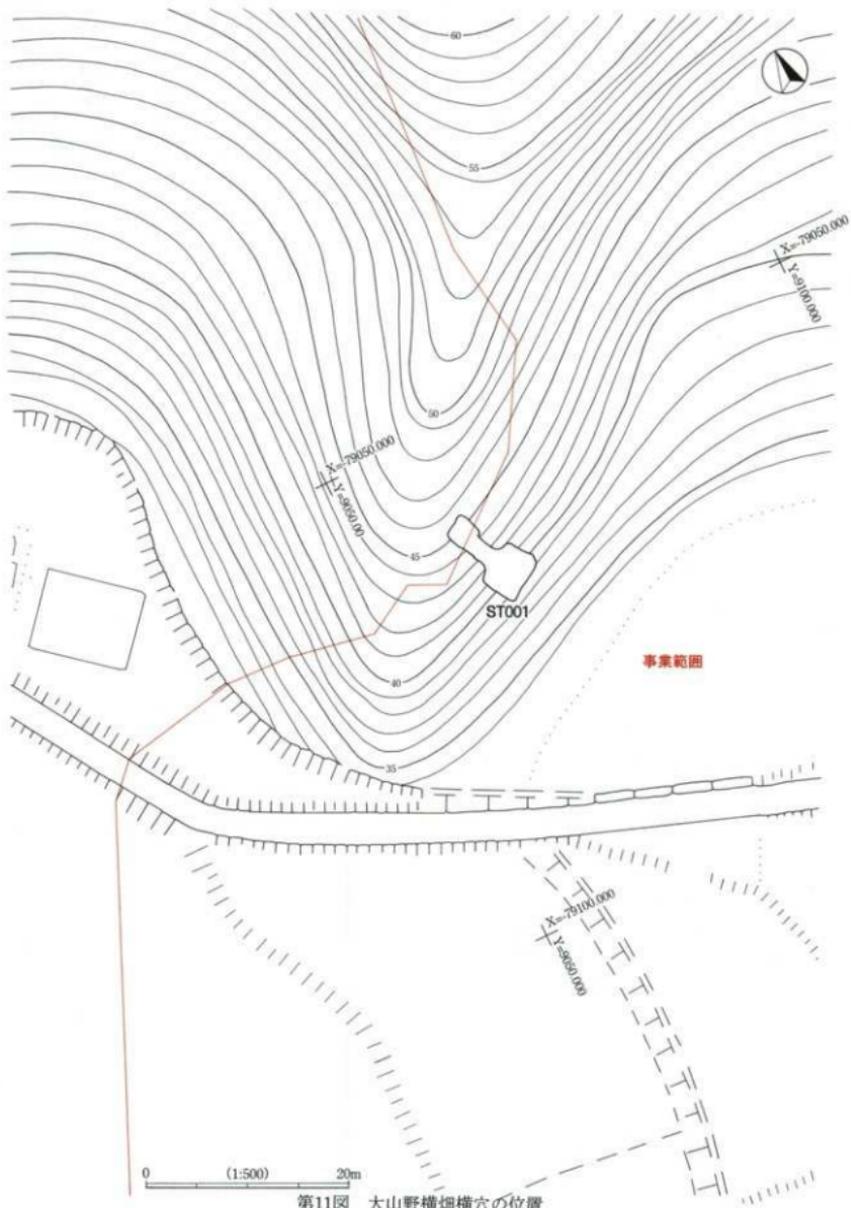
最後に実測は簡易遣り方を採用し、写真撮影を行って調査を終了した。ほぼ1月の期間である。

第2節 遺構と遺物

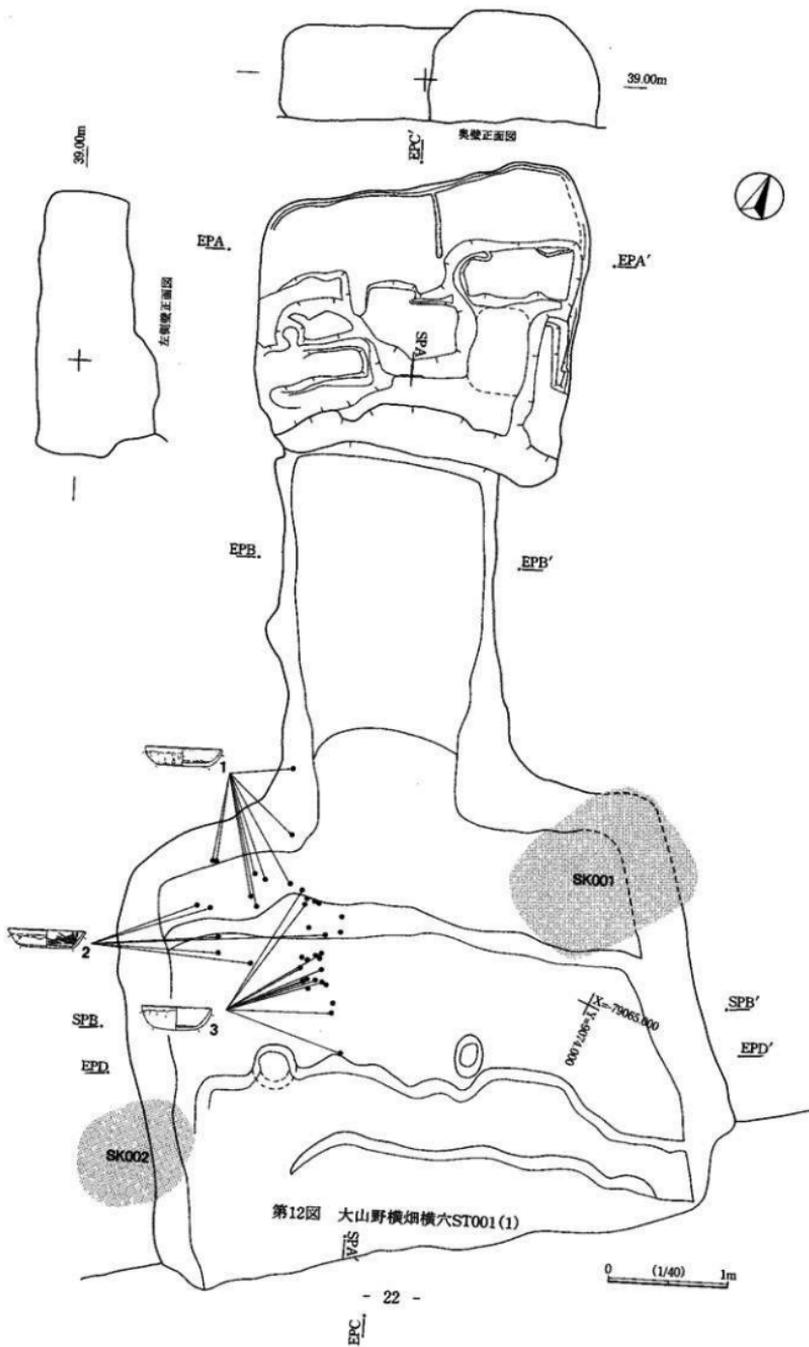
1 ST001 (第11～15図、図版13～16・18)

立地 ST001は北側から延びる丘陵末端近くにあり、東側に開口する。標高はおおよそ36m～41mの間にあり、現状は横穴を含め背後が山林、前面の狭い平地が荒地であった。この荒地であるが、かつては畑地であり、崖に沿って山道が通っていたという。

旧状と遺構確認状況 調査の経過でも説明したが、横穴内部とりわけ床面は後世に改変されたことが明らかであり、聞き取りによれば耕作に伴う農具等の物置の役割も果たしていたようである。前面は玄室床面とほぼ同じレベルで幅約5mの平地があり、それは北東方向の中段平場と一連のものらしいことも予想された。つまり、遺構のみならず周囲の地形の改変もなされたと思われる点から、羨道部の有無を含めその存在を確認した結果、厚い覆土の下から羨道と広い墓前城が現れた。



第11図 大山野横畑畑横穴の位置



出土遺物と土層断面との検討、また、中・近世の土坑墓との関係から、覆土の2～3ないし4層までは近代始め頃の盛土であることが確認出来た。つまり、明治期のある時点で横穴墓の裾を削って前面に押し出し、狭い平地を作り出したのである。これが畑地の造成であったと思われる。まさに小字の横畑である。また、羨道それも隔壁寄りに集中して地山の軟質泥岩大ブロックが混入しており、これは玄室天井部前面が落盤した結果であろう。

つまり、玄室の前面は人為的に削られ、それに落盤も加わったため、旧状を損ねていることは確かである。しかし、その構造からして前壁があった可能性は少ないと思われる。

土積状況 玄室内部はほとんど土砂はなく、わずかにビニールの破片が見られた。羨道から墓前域については、表土を除き3ないし4層までが近代の盛土層で、6層～8層が近世～古墳時代に相当する。近代始めの盛土層が畑地化に伴うものであることは既述したとおりであり、それ以下は自然堆積ながら崖端に近く土坑墓が営まれたのは土質の相違（山側が泥岩層となるため）によるのであろう。

構造 玄室の規模は縦2.1m～2.2m×横2.2m×高さ0.9m～1.2m、形態は多少歪な横長の長方形である。棺座は明瞭でなく、わずかに奥壁から右側壁にかけて周溝がめぐっている。この玄室右奥は奥に多少挟り込む形状であり、その工具痕は先の尖った円棒状の痕跡が確認された。これに対して、天井部や左側壁は明瞭ではないが、横穴に特徴的な円鋸状の工具痕であり、周溝の掘削痕やめぐり方もこの部分は不自然であった。だが、奥壁中央やや右寄りから直交するように延びる細い溝については、横穴に伴う可能性大である。壁面の線刻については天井を含め観察したが確認できなかった。

玄室の5～6か所の落ち込みないし段差については、子細に検討してみたが、いずれも玄室の前半分集中し、高さ的にも本来の玄室面の下にあり、しかも棺座・棺床としても整形痕そのものが新しく且つ形態的にも合理的に解釈できるものがない点から、後世の所産と判断したが、一応図示した。なお、天井部の形態はドーム形であるが、全体に剥落が認められる。

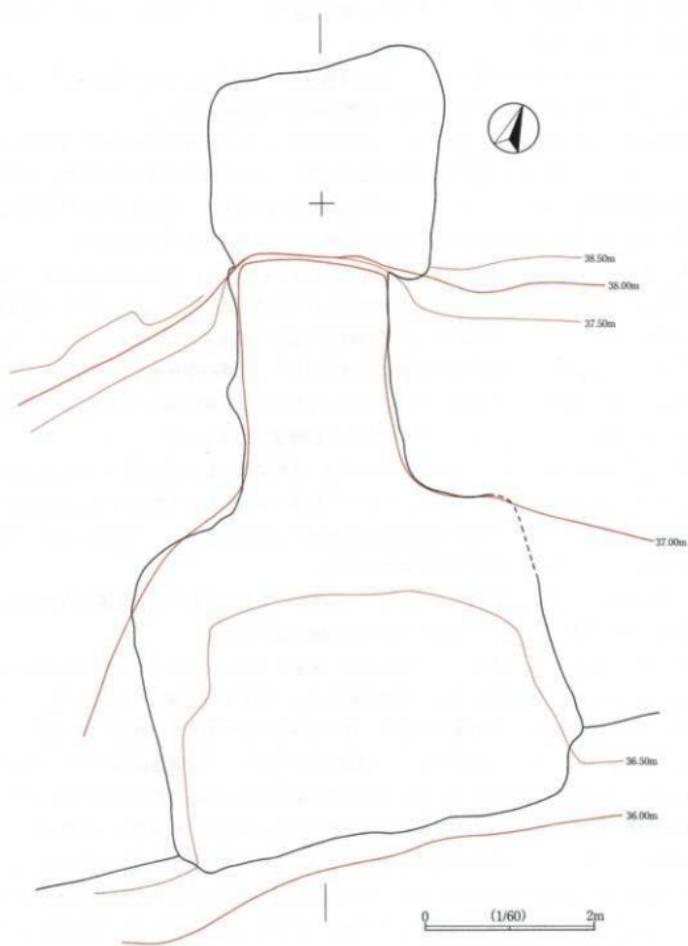
羨道は上幅1.8m、高さは隔壁部1.8m弱となり、高壇としてよいであろう。底面自体はほぼ水平ながら地形が前方に下り傾斜となるので、墓前域付近では50cmに満たない。

墓前域は玄室－羨道ラインと明らかにずれている（約10° 向かって左）。その規模は、横4.8m、縦4m程で、深さはおよそ30cm～60cm程である。中央横軸に沿って相対する2本のピットが確認された。ピットは径20数cm、深さ墓前域底面より10数cmであり、柱穴とみるべきであろう（ただし、柱痕らしきものは明瞭ではない）。そうだとすると、羨道に向かって幅1.7mの門柱のような構造になろうか。なお、墓前域の前面は崖となっていたが、これはたぶんその下の水田造成に伴って崩された結果と思われる。

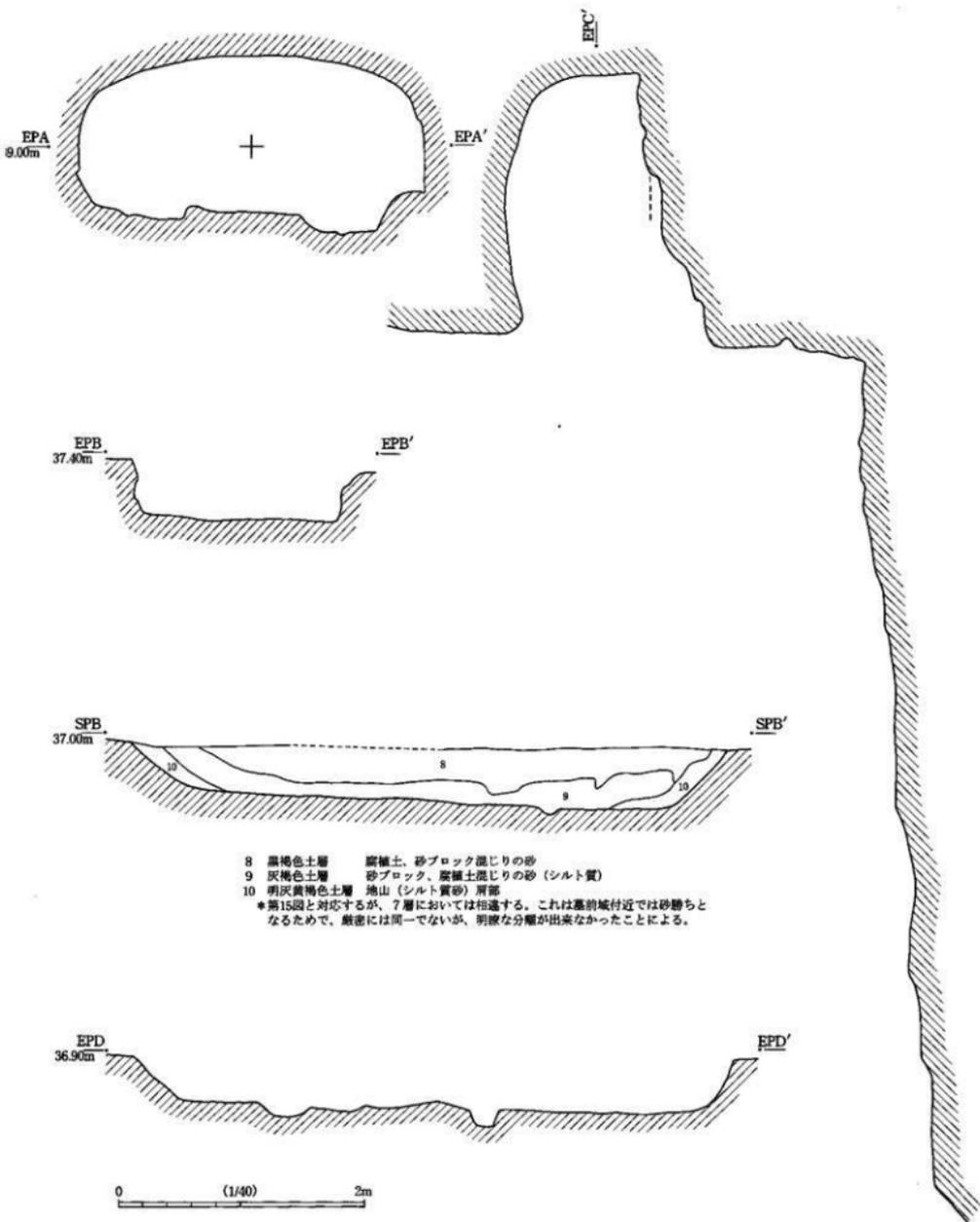
遺物出土状況 遺物は土師器片が墓前域左肩部分で、肩口では高く、中央寄りでは低いレベルで出土した。覆土が凹レンズ状の堆積であることや、遺物の年代が奈良時代に属することを考えると、これは墓前域の窪みに投棄された結果であろうか。恐らく何らかの祭祀に伴い用いた器を割って投げ捨てたものかもしれない。復元された土師器は復元可能なもの3個体、不可能なもの1ないし2個体である。なお、ほかに同種の壊らしき1点（接合底部のみ）が確認された。

また、須恵器長頸壺は墓前域外（SK001の東約1m）の近世以前の層位中より出土した。わずか1点のみの出土であり、果たして横穴墓に伴うものかどうか不明ではあるが一応報告する。

出土遺物 1～3は土師器坏（いわゆる上総型坏）である。1は土師器坏約2/3個体を復元実測した。表面は全体に風化が顕著ながら、内面に暗文の痕跡がわずかに認められる。2も土師器坏でほぼ完存品で

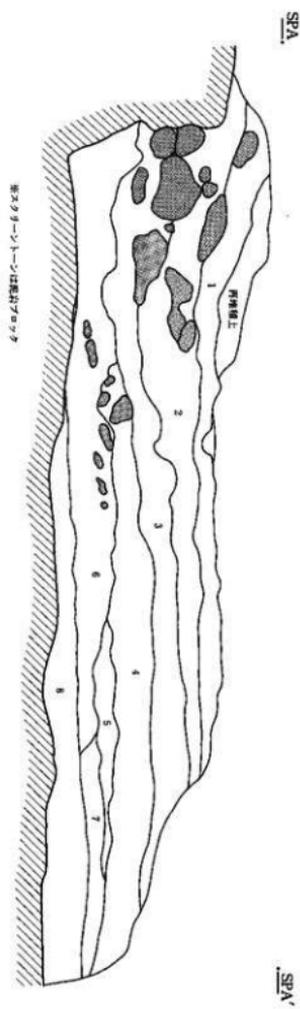


第13図 大山野横畑横穴ST001(2)



第14図 大山野横畑横穴ST001(3)

EPD
36.00m

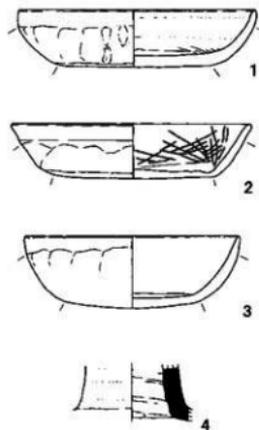
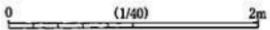


4.50m 埋藏部から1.5m-1.6mの深さ

灰褐色土層

SPA

SPA



- 1 黒褐色土層 表土層
- 2 灰黄褐色土層 泥岩、砂ブロック、腐植土混じりの砂（シルト質）
- 3 黄褐色土層 同上ながら腐植土は見られない
- 4 灰黄色土層 泥岩混じりの砂（シルト質）
- 5 明灰黒色土層 腐植土混じりの砂（シルト質）
- 6 黒褐色土層 泥岩、砂ブロック混じりの腐植土（粘質）
- 7 黒色土層 砂・砂ブロック混じりの腐植土
- 8 灰褐色土層 砂ブロック、腐植土混じりの砂（シルト質）

第15図 大山野横畑横穴ST001覆土セクション・出土遺物

3 SK002 (第16図、図版17)

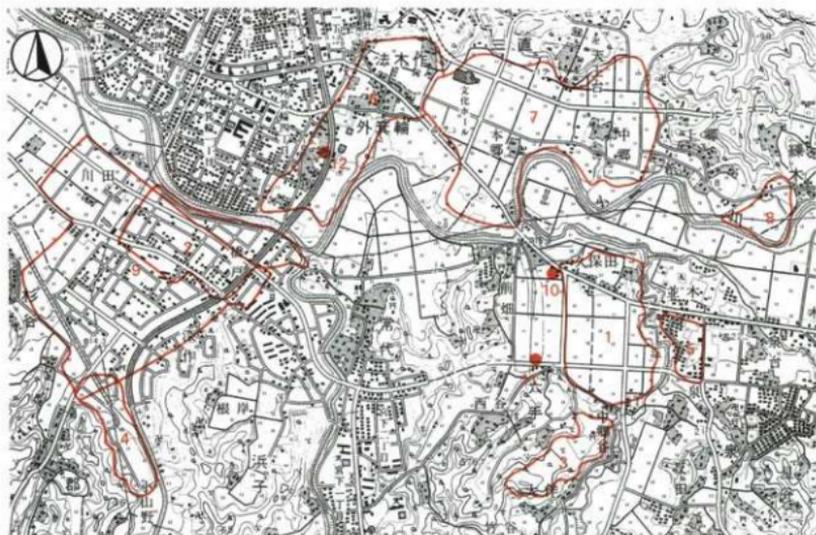
SK002はST001の墓前域南西端に重複するかたちで営まれている。形状は隅丸の長方形で、規模は長径1.05m、短径0.85m、深さ確認面から約0.5mである。遺物は出土しなかったが、SK001と形状などが類似し、覆土が人為的埋土であること、また、土層断面に盛土らしき厚さ10cm程の高まりが確認できた（その上部が調査範囲との境界に当たったため）ことなどから、同様土坑墓と思われる。

第5章 姥田遺跡

第1節 遺跡の位置と周辺の歴史的環境

小糸川中流域には低位段丘面が幅約1kmにわたって広く展開しており、姥田遺跡はその左岸に位置する。近年に至って周辺での発掘調査例が増加し、この低地における遺跡のあり方が漸く明らかになりつつある。現在のところ常代遺跡の縄文晩期の土坑群を最古とする¹⁾が、この段階ではいまだ不安定な土地であったようで、人々の本格的な働きかけは弥生時代中期以降に求められる。常代遺跡の大規模な墓跡（方形周溝墓群）は有名であるが、墓跡に対応する集落は検出されておらず、主に溝内から遺物の出土する古墳時代前期も同様である。恐らく、未だ台地上に集落が占地していた結果であろうか。この点、姥田遺跡南の鹿島台遺跡における該期の集落跡の存在は示唆的である²⁾。

これに対して、常代遺跡それに続く郡遺跡³⁾、また、姥田遺跡の東側に隣接する泉遺跡⁴⁾では古墳時代後期の集落跡や掘立柱建物跡群が検出されており、数としては少ないが古墳もこの段丘低位面に存在する⁵⁾。水田や畠等も当然伴っていたであろう⁶⁾。低地の開発という意味ではこの古墳時代中期が一つの転機をなすものといえる。姥田遺跡では該期の土師器・須恵器片のほかに埴輪片がまとめて出土しており、それが遺構に伴うものでないとしてもやはり一連の流れとして理解すべきであろう。



第17図 姥田遺跡と周辺の遺跡 国土地理院1:25,000 鹿野山

- 1 姥田遺跡 2 常代遺跡 3 鹿島台遺跡 4 郡遺跡 5 泉遺跡 6 外箕輪遺跡 7 三直中郷遺跡 8 寺崎遺跡
9 郡条里遺跡 10 神裏塚古墳 11 熊野前古墳 12 八幡神社古墳

奈良時代以降は古墳時代の延長として捉えられるが、低地という観点で重要なのは(11世紀末～)12世紀以降の様相である。というのは、古代末～中世にかけての条里地割のなかに居館を中心に屋敷地が展開するとした外笈輪遺跡⁷⁾のように、従来きわめて雑ばくな知見のみであった該期の景観復元に、かなり具体的なかたちでのアプローチが可能となったことである。加えて、より上流の泉遺跡、郡遺跡で同時期以降の遺物が出土し、また、姥田遺跡対岸の三直中郷遺跡⁸⁾では少し遅れて13世紀末～14世紀以降の掘立柱建物跡群や井戸などからなる中世集落が検出されている。一昔前の農村景観の原型がこの時期に形作られたといつてよいかもしれない。

註

- 財団法人君津郡市文化財センター 1996『常代遺跡群』第4分冊
- ここで検出された掘立柱建物跡群については、須意国造にかかわる「豪族居館」かとされている。
財団法人君津郡市文化財センター 1996『郡遺跡群発掘調査報告書』
- その一部の調査結果はすでに報告されている。
財団法人千葉県教育振興財団 2006『東関東自動車道(木更津・富津線)埋蔵文化財調査報告書5]—君津市鹿島台遺跡A区・D区—
- 2次にわたる調査報告書が刊行済み。
財団法人君津郡市文化財センター 1996『泉遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
財団法人君津郡市文化財センター 1996『泉遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
- 姥田遺跡の西側の小河川に面して存在する神裏塚古墳や熊野前古墳であるが、後者はわずかな高まり程度であり、古墳かどうかは明確でない。なお、小規模で幅の狭い溝を廻らす遺構も姥田遺跡ほかでしばしば検出されており、それについては円墳ではなく円形周溝遺構として報告され、一部には建物としての見解もある。
財団法人君津郡市文化財センター 1998『姥田遺跡発掘調査報告書』
- 郡遺跡(①)では古墳時代の水田跡、常代遺跡(②)では古墳時代後期末～奈良時代以降に継続するかという畠跡が検出されている。また、当遺跡南東部(君津郡市文化財センター1977年調査)でも弥生時代かと推測されている水田畦畔2面が検出されている(註4文献)。
①財団法人君津郡市文化財センター 1991『君津市郡遺跡発掘調査報告書』
②註5文献に同じ。
- 果・地区文化財センターによって大きく3ブロックの調査が行われている。
財団法人千葉県文化財センター 1989『君津市外笈輪遺跡・八幡神社古墳発掘調査報告書』
財団法人君津郡市文化財センター 1994『外笈輪遺跡発掘調査報告書』
財団法人君津郡市文化財センター 1997『外笈輪遺跡Ⅱ』
財団法人君津郡市文化財センター 1997『外笈輪遺跡Ⅲ』
- 財団法人千葉県文化財センター 2005『三直中郷遺跡発掘調査報告書』

第2節 調査の概要

1 調査の方法

調査対象地は東西方向に区画（短冊形）されるほぼ平坦な水田面であった。それ故、幅の広い南半部については水田の区画に沿って、長さ10m×幅4mのグリッドを基本とし、幅の狭い北側については任意のトレンチを設定して確認調査を実施した。なお、一部は耕作等諸事情により確認調査を実施できなかった範囲もある。

確認調査の結果に基づく本調査範囲は、北側と中央部～南側にかけての2か所であり、それぞれA区、B区と呼称した。

調査区の設定はB地区のみ公共座標に沿って20m方眼網を設定し、東西方向はアルファベット（A～F）、南北方向は算用数字（1～8）を付し、更にその北西を基点に2mの小グリッドで細分した。

2 調査の経過（第18～20図）

確認調査はグリッド内を機械力を併用しながら表土除去した後、内法に湧水対策用の溝を切って、人力で薄く剥ぎながら遺構確認を行った。その結果、調査区北側の複数のトレンチで灰白～灰黄色土層上に数条の溝跡が、また、中央南寄りの何か所かのグリッドでもほぼ同じ面で並列する溝跡が確認された。遺構の確認されないトレンチ、グリッドについては、更に掘り下げたが、凡そ1m未満で泥炭層となることから、灰白～灰黄色土層中の遺構の集中する範囲を本調査区とした。

本調査はA区とB区を並行して行い、それぞれ確認した溝跡の検出に努めた。A区ではその過程で井戸や土坑及びピット群が検出され、B区では当初自然流路かと判断した蛇行する溝が弥生時代以降に機能した溝であることも判明した。なお、遺物のなかには若干の縄文時代～古墳時代初めの遺物もみられたが、対応する遺構は検出されず、生産跡（水田跡等）も同様であった。

第3節 遺構と遺物

1 A地区

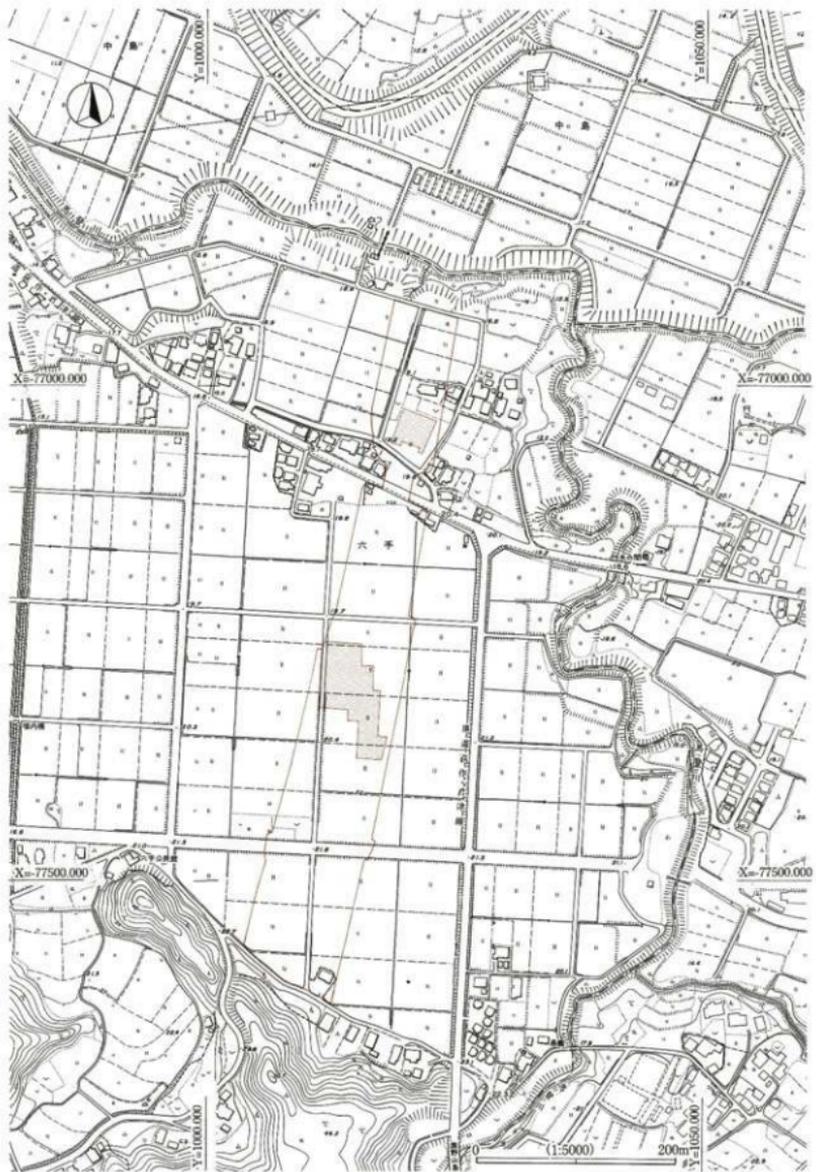
SD002～SD012（第21図、図版21）

南北また東西方向に並列する溝群であることから、以下方向ごとにまとめて概説する。SD002～SD007は南北方向に走る溝群である。これらは大きく3つのグループに分けられる。①南北方向に並走する細い溝（SD002～SD007）、②東西方向に単独で走る溝（SD008）、③それらと交差しながら東西方向に並列する幾分広い溝（SD009・SD010）、④それ以外（SD011、SD012）である。

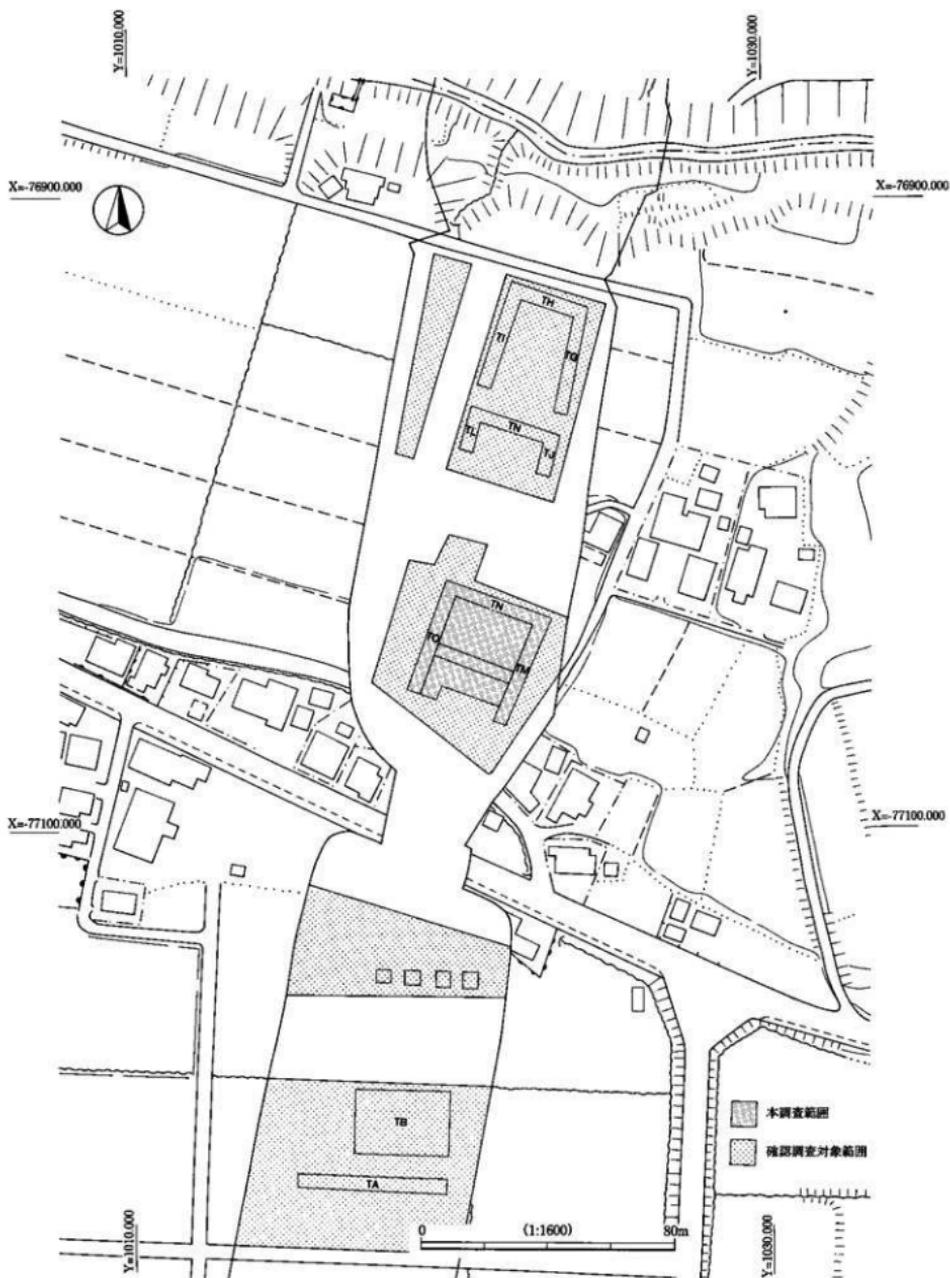
①については切合い関係を追えなかったために各溝の前後関係は不明ながら、SD002とSD004、SD005とSD007はその向きがほぼ等しいことから同時期に存在した可能性が高い。また、SD005はその北側にSD003と接続する可能性もある。

②は溝の規模や平面形状としては①と同様ながら、クロスするように単独で存在する。

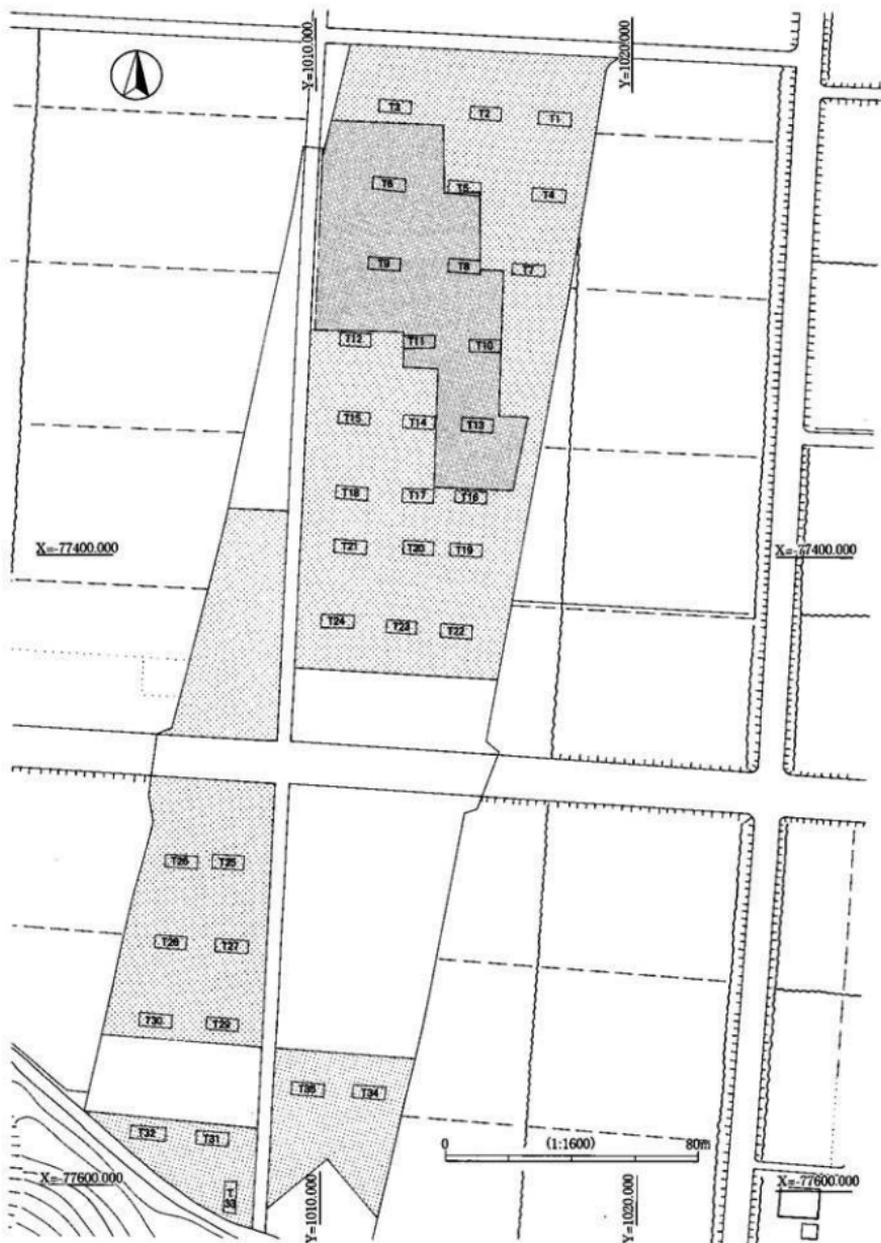
③は現在の水田区画の東西方向にほぼ等しく並走するもので、いわば段丘面の地形に沿って走り、①のタイプより古い時期の所産である。この点、その南に並走する④のSD011も同じ仲間とみることもできよう。一方、SD012は近接するも走向が異なる。



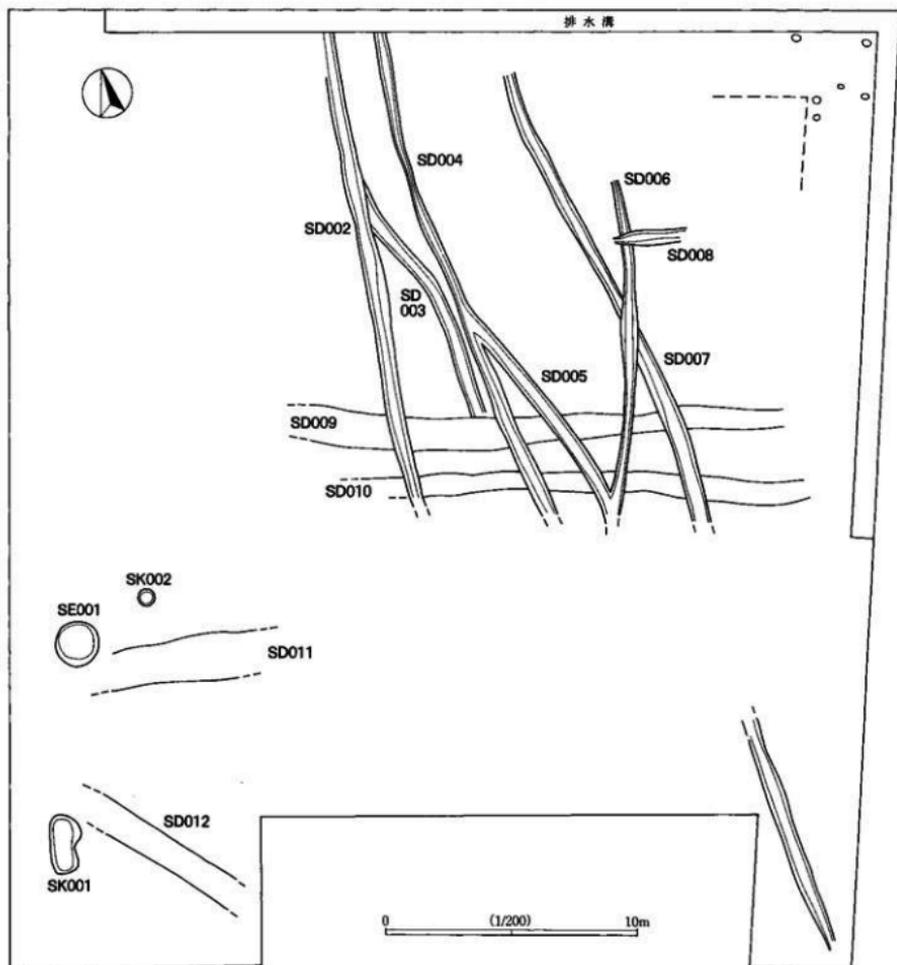
第18図 姥田遺跡調査範囲(網線内は本調査範囲)



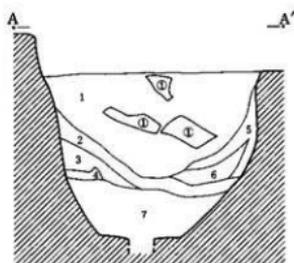
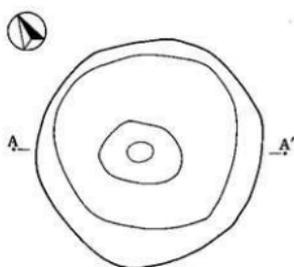
第19図 北側調査区確認トレンチ・本調査範囲



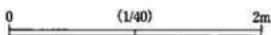
第20図 南側調査区確認トレンチ・本調査範囲



第21図 北側本調査A区全体図



- | | | |
|---|-------|-------------|
| 1 | 黒色土層 | ①黄褐色粘質土ブロック |
| 2 | 黒褐色土層 | |
| 3 | 暗褐色土層 | |
| 4 | 黄褐色土層 | |
| 5 | 黒褐色土層 | 砂質土 |
| 6 | 黒褐色土層 | |
| 7 | 褐色土層 | |



第22図 SE001

次にその断面形状であるが、①・②が浅い碗形（これは該種の類例に合致しないが、遺存部が少ない結果かと考えられる）、③・④が箱形（といっても丸みを帯びた）である。また、覆土は何れも灰色（ないし暗灰色）の粘土であるが、これは遺構がⅢ層つまり暗灰色粘土層から掘りこまれたためと思われる。所属時期については、多分に推測の面もあるが①・②が古墳時代後期、③はそれに先んずるも後期の枠内、④もほぼ同時期かと考えられる。

SE001（第22図、図版22）

A地区南西部において検出された井戸跡である。形状は円形で、大きさは径約1.8mである。1.7m程掘り下げたが、湧水が激しくその時点で調査を断念した。覆土は黒色～暗褐色土であり、自然堆積と思われる。なお、出土遺物はないものの、所属時期については諸条件から中世に比定される。

SK001（第21図、図版22）

A地区南西部のSE001南に検出された土坑である。平面形状は歪んだ長方形であり、規模は長径2.4m、短径1.7mである。出土遺物はないものの、所属時期についてはSE001と同様、中世に比定される。

SK002（第21図、図版22）

A地区南西部のSE001北東に近接して検出された土坑である。平面形状は円形であり、規模は径1.8mである。出土遺物はないものの、所属時期についてはSE001と同様、中世に比定される。

溝・ピット群 (第21図)

小糸川に程近い調査区北端に設けた確認トレンチ内で検出された遺構群 (の一部) については、調査時の判断では近世以降の所産として本調査の対象から外している。しかし、記録された遺構上場の確認ラインを検討するとその形状、位置や走向等、A地区の遺構群との類似性も窺える。それ故、参考程度ながら、その確認面での形状を図示しておく。もし、A地区と関連するとすれば溝は川岸近くまで延びていたことになる。

2 B地区

SD001、SD013～SD024 (第23～29図、図版23～26)

B地区において検出された遺構は南北また東西方向に並列する溝群と蛇行する小河川状の溝である。以下両者に大別して概説する。

溝群は5条が一単位となって、北北西～南南東の走向で本調査範囲内に延びているが、そのまま完結するのではなく途中で横にスライドし、しかもその北端が共に屈曲するという特徴を有する。もちろんこれも大まかなプランであって、北側の溝群は途中でその半分が分岐し方形の区画を形成したり、またそれとは別に単独で枝分かれした溝もみられる。次に各溝群について記す。

北側の溝群 (第23～27図、図版23～26)

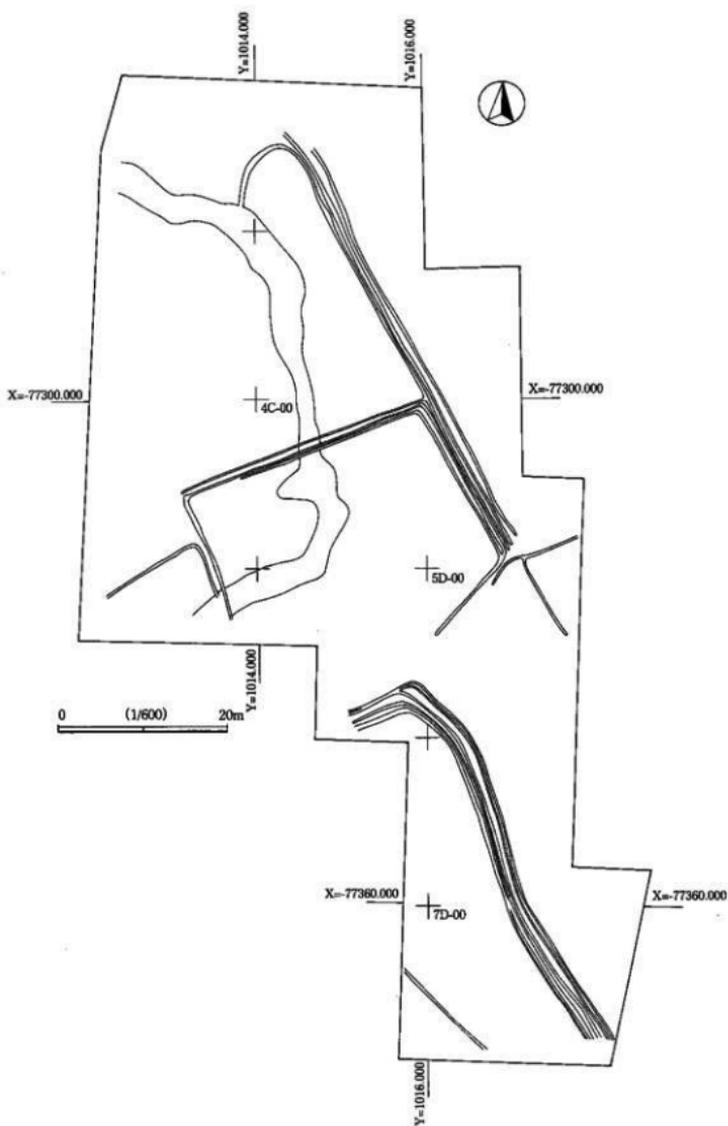
溝は5条 (SD013～SD017) がほぼ等間隔に並走し、概ね幅30cm前後で、深さは溝によって10cm～40cmと一定しない。断面形状はU字形、覆土は灰～灰黒色の粘土である。この覆土については、本来表土下のⅡ層中から掘り込まれたために黒みを帯び、結果として遺構確認面であるⅢ層 (黄灰色のシルト層) 上面との識別を容易にした。

溝の廻り方については、その半分が分岐し、ほぼ直角に左折する。直進する3本のうち、2本は恐らくそのまま本調査範囲外に延びるのであろうが、1本はUターンして小川へと重複するもその終末は不明となる。一方、左折した3本のうち1本は途中で消滅し、2本は丁度30m行ったところで1本となり、残り1本はそこで南へ直角に折れ、更に15m行って小川と重複する。この最後の1本については、辿っていくと「コ」の字形区画の南を斜めに区画する1本に行き当たり、あるいは、結合するものかもしれない。その場合は、「コ」の字形ではなく、五角形のような形状になる可能性もある。なお、溝が途中で消滅する点については、浅くなって灰色シルト層に掘り込まれなかったという解釈もあろうが、遺された範囲では途中で消滅した溝が一番深く、単純にそうとも言い難い。

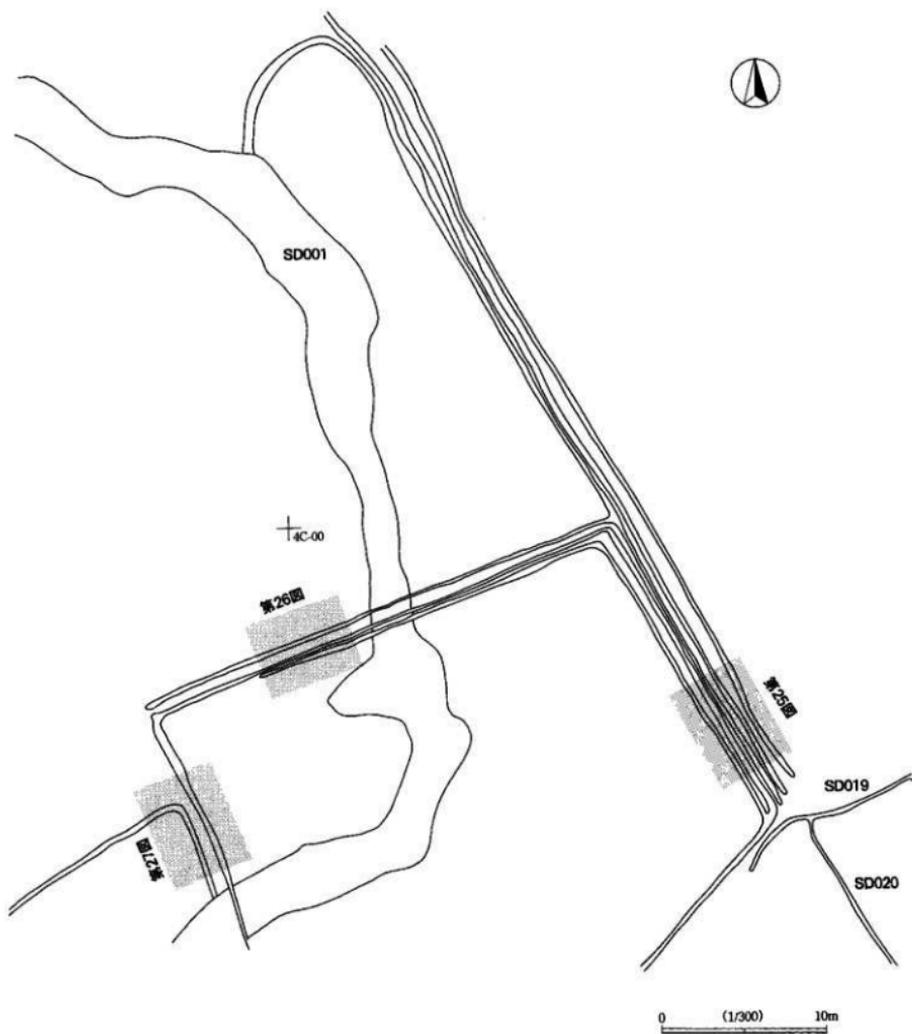
この「コ」の字ないし五角形の区画の西側には更に並列する1本の溝があり、その途中からまた左折する。左折した先は調査範囲外に当たり追えなかったが、あるいはもう一面の区画でもあったかもしれない。この点、南東の2条の溝 (SD018・SD019) も同様である。

溝間には明瞭な切り合いはなく、その意味では同時に存在した可能性もなくはないが、右から2本目は途中で途切れることなく直進、また左から2本目も途中から左折して最後まで区画を廻っていることから、恐らく最初に掘られたものであろう。残りの溝は埋没等何らかの事情から時期を遅くして掘られた (追加されたとも考えられる) とみたほうが妥当ではなかろうか。なお、SD001と当遺構との関係であるが、SD001を切っていることからその前後関係は明らかである。

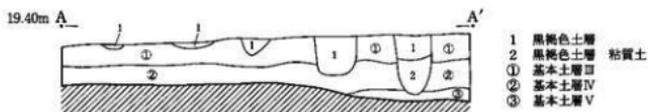
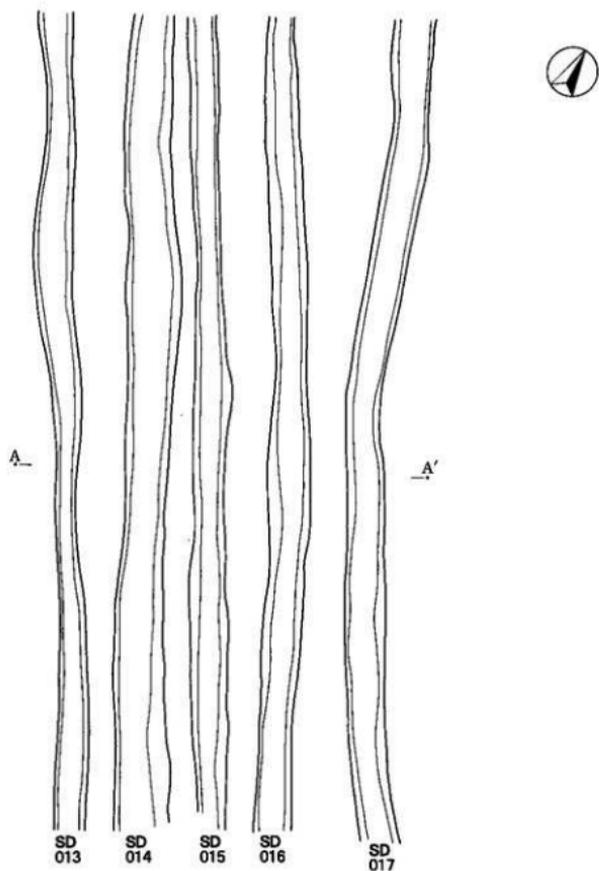
出土遺物は僅か数点の土器細片に過ぎず、何れも予想される溝の年代 (古墳時代後期) を遡るもの (縄



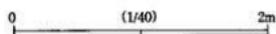
第23图 南侧本調査B区全体图



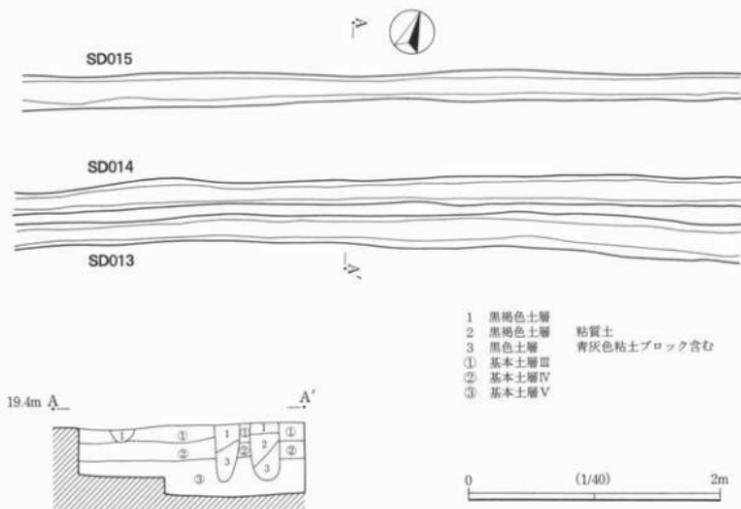
第24図 B区北側(網線内は第25図～第27図に対応)



※横セクション層形は任意の箇所を示す(以下同)



第25図 溝群詳細図(1)

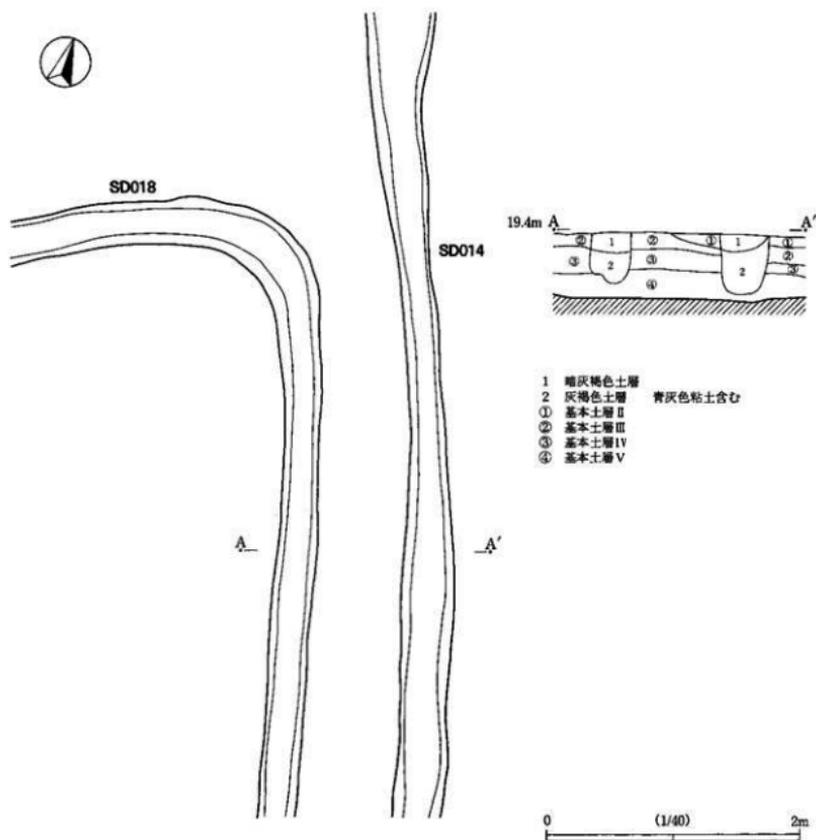


第26図 溝群詳細図(2)



B区溝群調査状況

細く且つ深く掘り込まれており、いわゆる小糸川タイプの溝の特徴を示すものである。隣接して何回かの掘り直しがあり、初めのうちは深い、新しいものほど浅くなったと考えられる。なお、覆土下部に黒褐色土を含む例が多い。



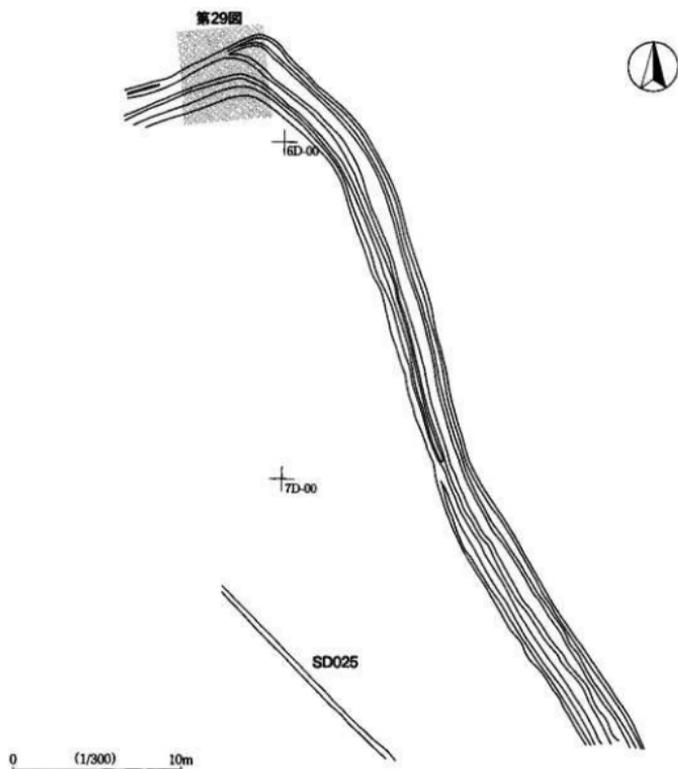
第27図 溝群詳細図(3)

文土器、古墳前期の土器)である。

南側溝群 (第28・29図、図版23・24)

北側溝群南端からその走向に並行して、丁度20m程西側へスライドしたような溝群を南側溝群とした。但し、その北端は西側へ直角に左折するかたちとなるので、両者の間に直接の関連はない。

溝は北側と同様、5条 (SD020～SD024) がほぼ等間隔に並走し、概ね幅30cm前後ながら50cmに及ぶ部分もある。なお、深さは溝により10cm～70cmと一定しない。その断面形状は掘り込みの深いものでは明瞭なU字形を呈し、恐らく浅いものも同様の形状を有したと思われる。覆土は灰～灰黒色の粘土であり、その由来は北側溝と同様である。



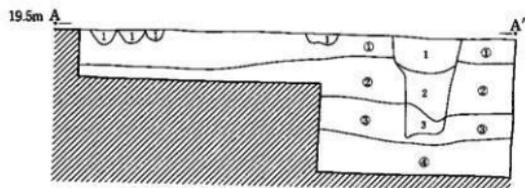
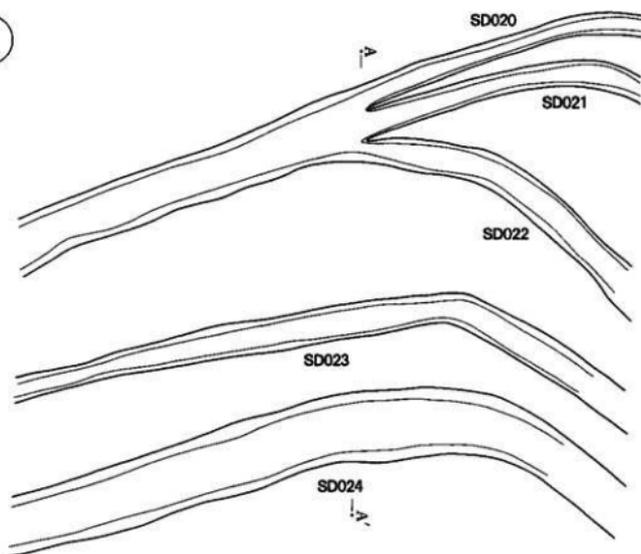
第28図 B区南側(網線内は第29図に対応)

溝の廻り方については、既述したようにその北端が左折し、南端は更に延びているものの、共に調査範囲外に当たることからその全容は捉えがたい。但し、北側溝群のあり方からすればあるいは同様の区画が存在する可能性はあろう。なお、1本、西側に並走する溝 (SD025) があるがこれについては同様の事情からその関連について言及しえない。

溝間には切り合いというより切断や連結と呼称したほうが適切な箇所がある。北側溝群と同様、各溝は時期を違えて掘られたとみられるが、お互いに関連を保ちながら追加されていったと判断される。また、出土遺物はみられなかった。

SD001 (第24図、図版23)

大凡南北方向に蛇行する小川である。その幅は2m～3m前後、断面形状は浅い皿形であり、深さは中央部で30cm～50cm程である。その走向からして東側に屈曲した部分が調査範囲内で検出されたとみてよい

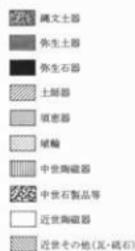
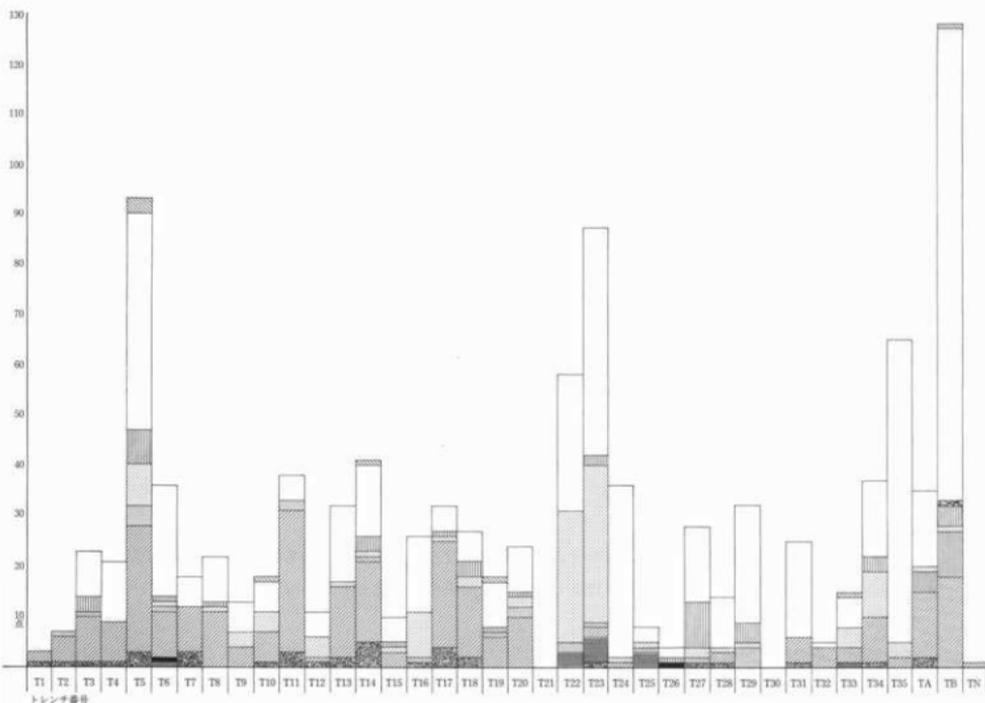


- | | | |
|---|--------|----------|
| 1 | 黒褐色土層 | |
| 2 | 黒灰色土層 | 青灰色砂含む |
| 3 | 黒灰色土層 | 青灰色砂多く含む |
| ① | 基本土層Ⅲ | |
| ② | 基本土層Ⅳ | |
| ③ | 基本土層Ⅴ | |
| ④ | 基本土層Ⅴ' | |

0 (1/40) 2m

第29図 溝群詳細図(4)

が、そうすると館山道路線の西側に主体があるということになる。北側溝群に切られていることからそれより以前の小川ということになるが、出土遺物が弥生後期土器細片のみであることから、弥生時代後期以降～古墳時代の間に比定される。



埴田遺跡基本土層 (1/20)

第30図 確認トレンチ時期別出土遺物及び基本土層

第4節 遺構に伴わない遺物

縄文時代（第31図、図版27）

1～10は土器である。1は中期の曾利系深鉢形土器口縁部片である。外面には竹管状工具による荒い条痕を施し、口唇部内面に突起を廻らす。色調は明灰褐色である。2は中期後半の深鉢形土器胴部片である。縦位の沈線内は交互に擦り消している。胎土は砂粒を含み、色調は褐色である。3は後期堀之内式土器の深鉢形土器把手部である。胎土に石英粒ほかの砂粒を含み、色調は明るい黄褐色である。4は中期ないし後期の深鉢形土器胴部片である。外面に太粒のR Lの縄文を施す。胎土は微砂粒を含み、色調は明黄褐色である。5以降は後期加曾利B式土器である。5・6は共に所謂粗製深鉢形土器口縁部片である。口唇外側の隆帯上に指頭圧痕列、同内側に一条の沈線を施し、外面は荒い条痕で埋めている。胎土は共に微砂粒を含み、色調は5が明黄灰色、6が灰黒色である。7・8は口縁が直立ないし多少内傾する深鉢形土器口縁部片である。共に肥厚させた口縁部外面に沈線区画の刺突文を廻らす。胎土・色調は共に砂粒を多く含み、黒色また赤褐色である。9は鉢形土器胴部片である。外面括れ部に沈線、突出部に刻目を廻らし、下位は荒い条線で充たす。胎土・色調は7・8に準ずる。10は鉢形土器底部片（約1/2強）色調・胎土は6に準ずる。

11～13は石器ないしは未製品である。11は頁岩製のスクレーパーである。左右共に片面から調整剥離を行っている。12は頁岩製の凸形石鏃である。13は自然面を一部遺す頁岩の薄片に両面から一部調整剥離を施したもので、石鏃未製品になろうか。

縄文土器の全体量は約40点である。遺跡そのものが沖積段丘上にあり、何れも細片で、その出土状況には特別の偏りもない。単純に南側台地（鹿島台遺跡）に由来する遺物とも言えないが、多分にその可能性はあろう。

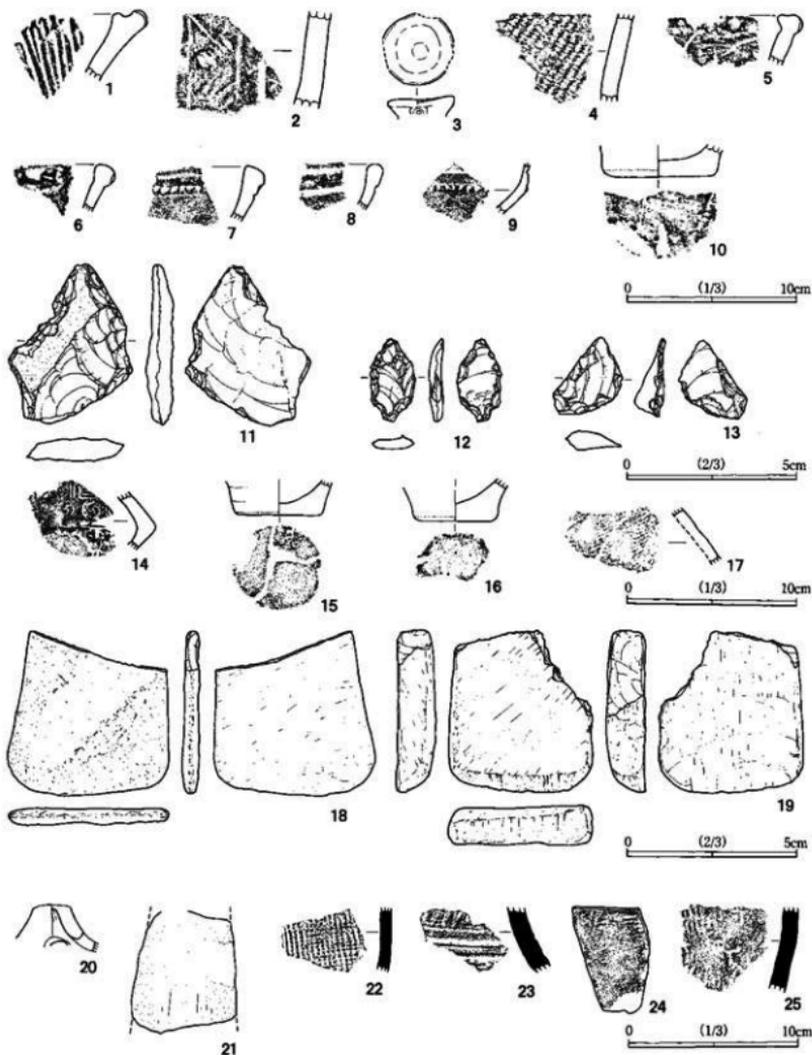
弥生時代（第31図、図版27）

14は中期宮ノ台式土器の壺形土器口縁部片である。受口状口辺外面に渦巻文ほかの文様を施し、内外面をベンガラで彩色する。胎土に砂粒を含み、色調は明黄褐色である。15・16は中期宮ノ台式土器底部である（16は約1/2弱）。胎土は共にやや軟質で、色調は15が明灰褐色、16が黄褐色である。17は後期前半の壺形土器上胴部片である。横位の縄文帯上に鋸歯文を施し、交互に区画内を擦り消しベンガラで彩色する。なお、その下部は数単位の結節文で区画する。胎土は石英ほかの荒い砂粒を多く含み、色調は明黄褐色である。弥生土器の全体量は僅か10数点に過ぎず、その出土位置も南側中央部に偏っている。

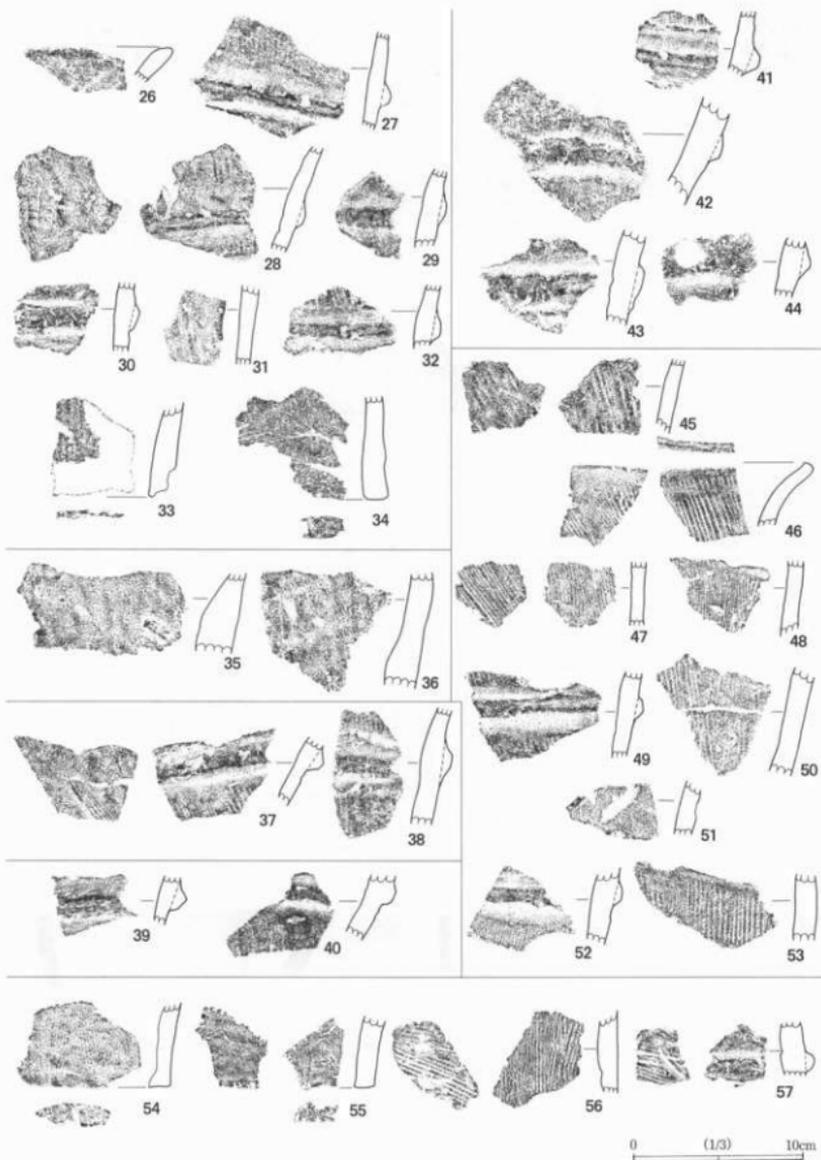
18・19は砥石である。18は砂岩製であり、本来薄手の自然礫を使い込んだものと思われる（現状破損品）。19は凝灰岩製であり、側縁も使用している。なお、一端は斜めに磨り減っている。これら2点のうち、19については必ずしも弥生時代に限定できないが、ここで扱っておく。

古墳時代（第31・32図、図版27・28）

20は前期の器台形土器脚部括れ部（透穴は3か所）である。胎土は多少軟質（赤色スコリア混入）、色調は黄褐色である。21は土製支脚破損品である。22～25は須恵器胴部片である。20は外面に叩き目を施し、内面には青海波文がみられる。胎土は黒色粒を含み、色調は外面が暗黒色、内面が青灰色である。23は須恵器大甕の頸部～上胴部に至る破片であり、2本の沈線が認められる。胎土は長石粒を多く含み、色調は灰色（胎土内側は暗赤褐色）である。24は多少軟質の須恵器（湖西産か）であり、縁辺2面に砥石と



第31圖 埴田遺跡出土遺物(1)



第32図 姥田遺跡出土遺物(2)

して再利用したような擦り面が確認される。色調は明青灰色である。25は外面に叩き目を施し、胎土は砂粒を含み、色調は暗灰色である。土師器の全体量は260点と多いが、何れも細片であり、時期的には後期の所産が多くを占めるかと思われる。なお、須恵器は30数点で土師器に対応するものであろう。その出土状況は南側本調査B区一帯と台地寄りに偏りがある。

26～57は円筒埴輪片である。これらは整形手法や胎土・色調等から二大別される。

①(26～44)作りが粗雑(凸帯は突起状)で、胎土は軟質、刷毛目はないか部分的に見られ、色調は明褐色(内部は黒色)ないし赤褐色である。

②(45～57)前者よりは作りが良く、胎土は微砂粒を多く含み、外面は刷毛目、内面も一部刷毛目が見られ、色調は灰黄色(一部黄褐色)である。

①は更に、①-1(26～34)赤色スコリアを含むもの、①-2(35・36)厚手のもの、①-3(37・38)荒い砂粒を含むもの、①-4(39・40)比較的凸帯が明瞭のもの、①-5(41～44)赤褐色で荒い砂粒を含むもの、に分けられる。②も同様、②-1(45～53)砂粒が表面に浮き出た感じのもの、②-2(54)刷毛目の条の細かいもの、②-3(55)色調・胎土は②に入るが刷毛目の見られないもの、②-4(56・57)赤褐色でやや厚手の作りの良いもの、に分けられる。もちろん、子細に見れば更に分け得ようが、何れにせよ透孔の全形や凸帯間の幅が窺える資料もないなど、限界がある。

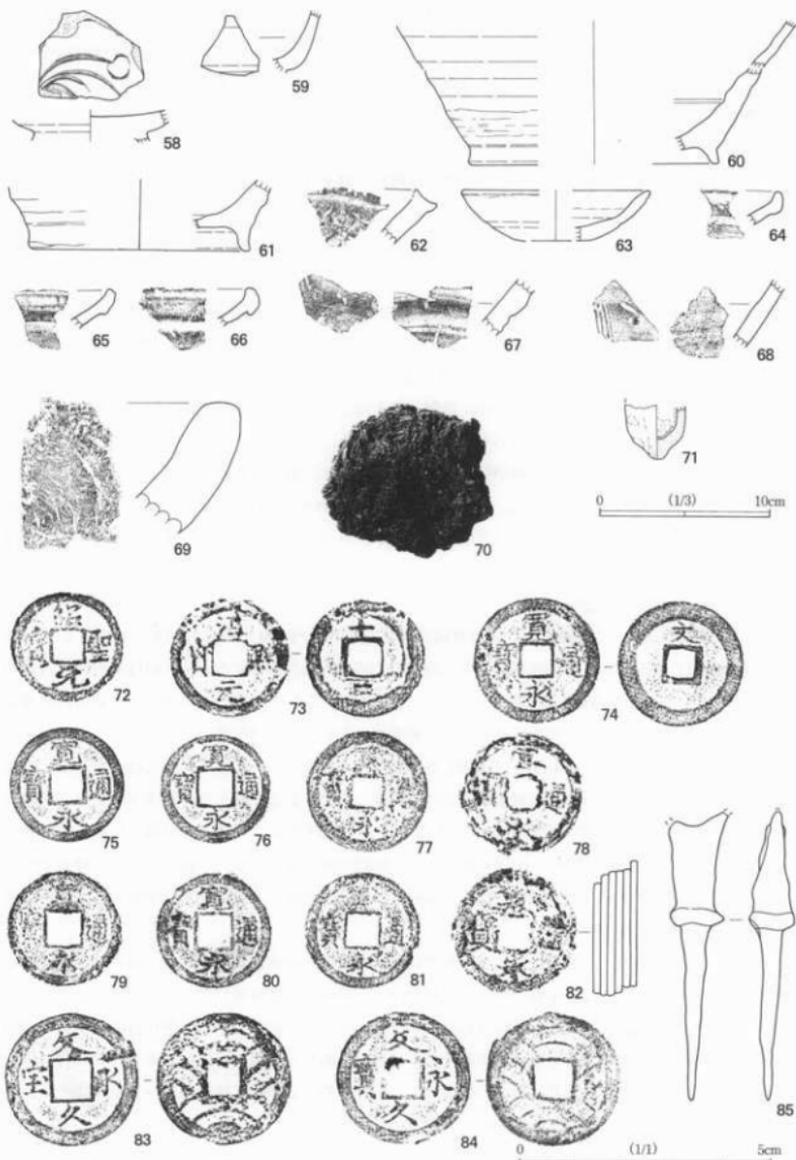
なお、この他に形象埴輪片らしき1点と赤採片が2点確認された。以上を含め、埴輪片は全部で約150点にのぼり、調査区南側で幾つかの集中地点が見られるが、とりわけT22・T23にまとまっている。隣接する東側未調査区に古墳でもあったのだろうか。

中・近世(第33・34図、図版29・30)

初めに中世陶磁器について概説する。58は青磁碗底部であり、内面見込みに片切彫りの花文が描かれる。釉は薄い緑色である。59も青磁碗底部片で、釉はやや暗い灰緑色を呈する。60・61は高台付常滑片口底部片(約1/4)である。体部下位に回転ヘラケズリ痕が明瞭であり、対応する内面には輪積みと運動する凹み線がみられる。内面の使用痕跡はそれほど顕著ではない。胎土は灰色で、荒い石英・長石粒を多く含み、色調は灰白色である。61も60とほぼ同じ特徴を示すものながら、高台の形態に違いがある。62は平底の常滑片口縁部片で、口唇部が前後に張り出す時期の所産である。胎土は砂粒を多く含み、色調は橙赤色である。63は瀬戸・美濃の緑釉小皿(約1/3)で、口縁内外面にのみ灰赤が施される。64～68は瀬戸・美濃の鐏鉢片で、このうち64～66は口縁部、67・68は体部に相当する。口縁部は外側に縁帯を有するもので、66は多少下部が張り出す形態となる。体部片は撞目が明瞭で、68は使用痕が窺える。これら撞鉢は何れも内外面鉄釉(鬼板)を施す。

図化しなかった中世陶磁器(40数点)にもふれておく。青磁はこの他に細片が2点、報告した常滑片口と同類の破片は他に2点、また、平底で胎土が灰褐色ないし赤褐色の常滑片口が3点、古瀬戸三筋壺らしき破片が1点、瀬戸・美濃皿1点、同鐏鉢3点などで、他は常滑甕の破片である。年代は磁器が12～13世紀、陶器は常滑高台付片口鉢が13世紀、同平底片口が15世紀、瀬戸・美濃が15世紀終末～16世紀代に比定(67については近世か)され、残りは常滑の甕がほとんどを占め、その年代は概ね14～15世紀代と思われる。点数としては少ないが、瀬戸・美濃製品も同様である。

近世陶磁器は約600点ながら、その多くは細片である。近世初めの瀬戸・美濃製品(志野丸皿、鉄軸撞鉢など)に始まり、以後も瀬戸・美濃日常雑器製品が圧倒するが、17世紀後半以降は肥前製品も一定の割



第33図 姥田遺跡出土遺物(3)

合（2割程度）を占めている。また、一部に備前播鉢なども確認される。

次に、陶磁器以外の遺物について概観する。69は安山岩製の石鍋片である。口唇部と外面は平滑に仕上げている。70は炉底である。71は埴壇であり、溶けた銅が付着する。なお、鍛冶関係の遺物は小塊を含め12点である。その出土状況には特別の偏りもみられない。

銭は全部で18点である。内訳は2点が中国銭（北宋銭、南宋銭）、残りは日本銭（寛永通寶、文久永寶）である。

| 挿図番号 | 銭種 | 出土トレンチ |
|-------|---------------------------|-----------------|
| 72 | 紹聖元寶（行書 北宋初鑄年1094年） | T 5 |
| 73 | 淳熙元寶（真書 南宋初鑄年1127年、背文字十二） | T 4 |
| 74 | 寛永通寶（文銭） | T31 |
| 75～77 | 寛永通寶（新寛永） | T10、T12、T34 |
| 78～82 | 寛永通寶（鉄銭）*82は6枚付着、何れも鉄銭 | T B（3点）、T16、T12 |
| 83・84 | 文久永寶 | T24、T B |

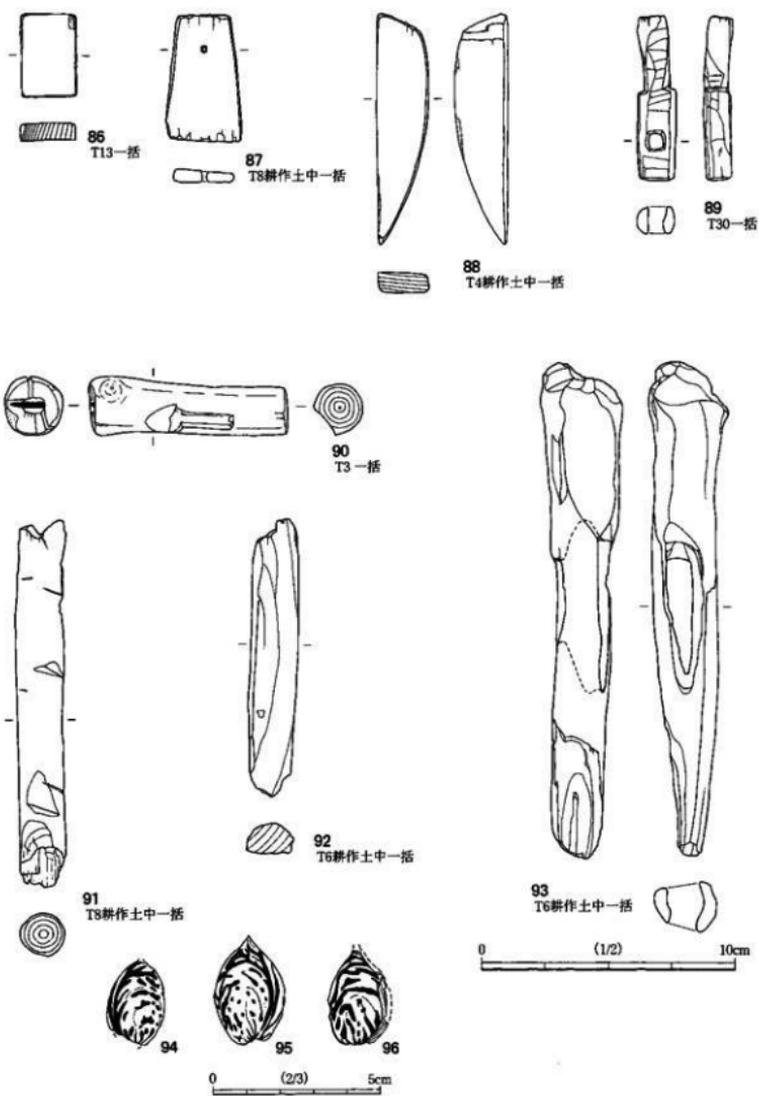
銭については、中国北宋銭と南宋銭が各1点の他は寛永銭それも新寛永銭以降がその主体を占める。また、82の6枚付着銭はその枚数からして六道銭の可能性のあるものの、確認トレンチ内の一括遺物であり、その性格については不明と言わざるを得ない。

鎌は1点のみ出土した。鉄製の雁又鎌（85）である。その形状等からして（古代～）中世の所産であろうか。

第34図は木製品他を一括した。木製品は明らかな人工遺物ないし整形痕の見られるものを報告する。86は長方形の小さな板材であり、各面は木口を含め丁寧に整形されている。87は楕円形をした小さな板材であり、上位に細い穿孔が認められる。各面の整形は比較的雑である。88は恐らく板材を連結した円形の蓋の端材であろう。89は種類が不明である。面取は刀子、穿孔はノミによる。90は刀子の柄であり、茎の部分が遺存する。91は小枝をそのまま使用したもので、所々に浅い刻みが見られる。皮を剥いだときの痕跡であろうか。92は細長い板材の片側を長軸に沿って山なりに整えたもので、何を意図した製品かは不明である。93は枝の付け根から約30cm程の部材中央を平面V字形に穿孔したものである。用途不明ながら自在鉤の横木であろうか。面取は概して荒い。これら木製品の樹種については89が広葉樹、それ以外は針葉樹である。なお、後者の樹種はスギと思われる。所属時期については、遡っても中・近世から下限は近代まで入ると思われる。

種子やその他の鉄製品もここで扱う。種子（94～96）は大形で且つ目に付いたものを採集したにすぎず所属時期は不明である。炭化は見られず何れもモモの種子と思われる。3点共に南側確認トレンチ内一括遺物である。

この他に図示しなかったが、煙管の金属部分が9点、鉄釘9点、鉄鏝片3点がある。煙管はともかく、鉄釘と一部の鏝については古墳時代まで視野には入るが、出土状況や遺存状況から割愛した。



第34図 姥田遺跡出土遺物(4)

第6章 まとめ

第1節 横穴墓について

今回調査対象となったのは3遺跡計5基であったが、そのうちの3基は中・近世に下る所産と思われることから、都合2基が横穴墓となる。

何れも小糸川の支流である宮下川の中～上流域に単独で立地し、丘陵の支尾根先端近くに占地する共通点がある。その構造は、山高原二町が玄室部縦長アーチ形で左側に一つの棺台（いわゆる造付石棺といってもよいが）を有し片袖となるも羨道部は不明のもの、また大山野横畑が玄室部方形ドーム形で棺座は不明ながら高壇で長い羨道と墓前城を有するものであった。規模は何れも長径が3mないしそれに満たない小形でありながら、後者はそれに比して大きな墓前城が付属するものであった。遺物は山高原二町が1片の土師器片のみであったのに比べて、大山野横畑は墓前城の覆土内から土師器がまとめて出土した。時期的には8世紀代に入るものであるが、出土状況（覆土中位）からして追葬等に伴う遺物かと思われる。なお、壁面には山高原二町において線刻画がみられたが、これについては別途ふれる。

さて、この2基の年代と位置付けであるが、主に構造面の相対的な編年観から見て、山高原二町横穴は7世紀前半に、大山野横畑横穴が7世紀後半代に位すると思われる。次に構造面では、片側に棺台を有する片袖構造の横穴は主流ではないが、西上総では7世紀代に一定数見られるものである。その一方、明らかな高壇型式の横穴は東上総それも長生地域で7世紀代に盛行するが、西上総の君津・富津地域では壇はあっても高さに欠け（1m前後）¹⁾ しかも客体である。その意味で前者が単独で存在することにさして違和感はないが、問題は後者をどう解するかである。

その点、長生と君津の中間に位置する市原南部の様相は示唆を与えてくれる。棺座・棺台を欠く方形の玄室プランの大和田横穴群²⁾、全体に羽子板形を呈し玄室・前室・羨道構造を採る西国吉横穴群³⁾、同じく方形の玄室プランながら明瞭な棺台と長い羨道を有するものが多くを占める岩横穴群⁴⁾、とバラエティに富む。時期的には、大和田横穴群の一部を最古に（6世紀末～）、岩・西国吉（7世紀代）と続くが、前者が上総東部の一般的な傾向に沿うのに対し、岩例は一部に相模東部の影響を認め⁵⁾、西国吉例となると相模でも鶴見川流域の様相を色濃く示す⁶⁾ もので占められる。3遺跡とも比較的近接した位置にありながらこのような複雑な様相を示しているのである。そして、大和田横穴群の33号横穴ほか、岩横穴群の8号横穴のように、それらに混じって大山野横畑横穴と極めて類似する横穴が存在するのである。

つまり、市原南部は南武蔵や相模の影響化にある西上総とそれとは別の歩みを見せる上総東部の様々な系統の横穴が混在する様相を呈している可能性が高く、山を越えた木更津・君津の山間部も程度こそあれその延長にあるとみるべきで、その一つの例証として大山野横畑横穴が考えられるのではなからうか。そう考えると大山野横畑横穴も含めそれはむしろ当地のノーマルなあり方といえるかもしれない。

第2節 山高原二町横穴群ST001線刻画について

ST001ではアーチ形をなす左右側壁から天井部までと奥壁に線刻画が遺されていた。そのあり方は図示したとおりだが、それが何を意味するのかについて類例と比較・検討する。

県内でのこの種線刻画の検出例は比較的多い。その一覧を次に示す。

| 遺跡名(註文献) | 所在地 | 壁画の内容 |
|------------------------------|-----------|---------------------------------|
| 1丸山16号 ⁷¹ | 八日市場市大寺 | 「船か鳥」 |
| 2千代丸・力丸 ⁹¹ 6号墓 | 長柄町千代丸・力丸 | 家屋2、記号? 1 |
| " 12号墓 | " " | 人物3(全身)、鳥1 |
| " 13号墓 | " " | 家屋? 1 |
| " 14号墓 | " " | 人物4(全身1、頭部3)、家屋? 1、不明1 |
| " 25号墓 | " " | 馬2、人物5(全身4、頭部1)、鞆1、弓と矢1、弓2、騎1ほか |
| " 26号墓 | " " | 人物頭部? 1 |
| " 27号墓 | " " | 鳥1、その他1 |
| " 28号墓 | " " | 人物(全身)1 |
| " 30号墓 | " " | 家屋1 |
| " 31号墓 | " " | 動物3、人物1(半身)、船? 1、不明1 |
| " 32号墓 | " " | 人物?(鳥)1、不明1 |
| 3長柄 ⁹¹ 6号 | 長柄町徳増 | 人物4(全身2、半身? 1、頭部1) |
| " 7号 | " " | 弓を引く人4(うち1は単なる人物か)、人物3(頭部) |
| " 13号 | " " | 人物5、家1、鳥9?、船1、弓?、三重塔1、五重塔1ほか |
| " 14号 | " " | 「木の葉状の線刻」 |
| " 30号 | " " | 鳥、家 |
| 4瑞谷東部1-11 ¹⁰⁰ | 長柄町瑞谷 | 人物と馬1、鳥2、獣1 |
| 5報恩寺1号 ¹¹¹ | 長南町報恩寺 | 「天井中央に円形の線刻」 |
| 6豊原B1号 ¹²⁰ | " 豊原 | 「天井中央に円形の線刻」 |
| 7山崎第10号墓 ¹²⁵ | 茂原市山崎 | 人物2(全身1、半身? 1) |
| 8押日 ¹⁴⁰ | 茂原市押日 | 人物? 1、その他1 |
| 9栗木谷 ¹⁶⁰ 2号 | 柳町椎木 | 「顔・建物か」 |
| " 6号 | " " | 人物3(全身2、頭部1) |
| " 7号 | " " | 人物(頭部7)ほか |
| 栗木谷西2号 | " " | 「顔・建物か」 |
| " 3号 | " " | 「建物か」 |
| 栗木谷Ⅱ3号 | " " | 「図柄不明」 |
| 栗木谷東6号 | " " | " |
| 10根方4号 ¹⁶⁰ | いすみ市深谷 | 人物4、鳥1、船1、弓矢1 |
| 10外部田谷 ¹⁷⁰ | 市原市外部田 | 人物5(頭部2、全身3)、馬1、魚1、鳥1 |
| 11大和田 ¹⁸⁰ | " 大和田 | 人物2(上半身) |
| 12池和田 ¹⁸⁰ | " 池和田 | 家? 1、不明1 |
| 13石神第3号墓 ²⁰⁰ | 木更津市中尾 | 船7、人物(頭部)1、魚2 |
| 14西入第1号 ²⁰⁰ | " " | 「鳥帽子を被った人物」 |
| 15山高原二町 ²²⁰ ST001 | 君津市山高原 | 人物1(頭部)、建物(船を乗せた墳屋?)ほか |
| 16胡摩伝 ²³⁰ 1号 | " 浜子 | 「人物」 |
| " 2号 | " " | 「船」 |
| 17宝泉寺4号 ²⁴⁰ | " 放泉寺 | 刀を振りかざした人物、ほかに人物像1 |
| 18鹿島第8号墳 ²⁵⁰ | 富津市西大和田 | 船1、牛ないし馬1、その他2 |
| " 57号 | " " | 「人物・魚他」 |
| 19大満 ²⁶⁰ Ⅰ-1号 | " 岩坂 | 船4 |
| " Ⅰ-2号 | " " | 船1 |
| " Ⅲ-3号 | " " | 馬1 |
| 20水神A号横穴群 ²⁷⁰ | " " | 船1、馬1、人物(頭部)1 |
| 21障子ヶ谷18号 ²⁸⁰ | " 相野谷 | 船、鳥 |
| 22表 ²⁹⁰ 3号 | " " | 「船他」 |
| " 8号 | " " | 「線刻」 |
| 23北根谷 ³⁰⁰ 1号 | " " | 「家・馬・人物」・鳥 |
| 24寺谷 ³¹⁰ | " 岩瀬 | 「線刻面」 |
| 25大作 ³²⁰ | " 龜田 | 人物、馬、船 |
| 26鬼ヶ谷1号 ³³⁰ | " 中 | 「馬具・船他」 |

もちろん、横穴の特性からしてこれが総てではありえないが、ある程度の傾向は見出せるだろう。これらが多いものからあげていくと、人物が60例を越え約40%と最も多く、次いで、船（約20例・12%）、鳥（約20例）、家屋（約10例）、馬（7例）、弓ないし弓と矢・弓を引く人（8例）、魚（4例）と続き、特定は出来ないが動物（5例）、その他（鞍（ゆき）や鞍（さしば）等）である。その人物については、丸ないし楕円の内部に線と点の目鼻を付け、胴部以下は省くか二本線のみという例が多い。その意味で、山高原二町の奥壁の人物、またそのあり方は当地の一般的な傾向に沿ったものといえる。

その一方、左右の側壁及び天井はどうかというと、こちらは類例に欠く。そもそも、横穴全体に線刻を施した例は千代丸・力丸25号墓、長柄13号、石神3号、外部田谷、鹿島第8号と限られており、それも3面つまり奥壁と両側壁のみ認められ、しかも各壁毎に完結する内容である（外部田谷はその点不明瞭）。もちろん、これは玄室構造（障壁のないアーチ形）の差にも起因するのであろう。

その意味で、当例はこの種類例のなかでは希な事例といってよいだろう。この点、千代丸・力丸25号墓のように、死者の生前の身分や地位（貴人ないし武人）を示唆するような例もあるが、一般的に船にしろ鳥にしろそれは葬送にも関係する乗物であり、動物である。また、それ以外も何らかの関連をもって刻まれたと推測する。既に事実記載でもふれているが、右側壁が船を乗せた殯屋であったとしたら、「A」の字状を始めとして、類似する「記号」も同様にみとれるが、としたらそれは具体的に何を表すのだろうか。概してこの種の「絵画」は稚拙と片付けられがちであるが、それはあくまでも現代人の感覚であり、古墳時代における文化的な表象とみればその意義付けも変わってこよう。当例を含め更なる検討を要する。

第3節 中・近世の横穴・岩窟遺構について

山高原二町で2基、宝泉寺で1基の中・近世横穴・岩窟遺構が検出されている。何れもその規模はともかく、形態や構造はそれぞれ異なるものであり、その性格について一概に律し得ない。この点は軟質泥岩の分布する富津市域で多少共通する現象でもあり、民俗調査の成果も含め類型化の待たれるところでもある²⁰。ここでは取りあえず現時点でのまとめとする。

山高原二町のST002は陶磁器、炉壁片が覆土下位からまとまって出土した。完形になるものではなく、また、時期的にも中世常滑甕片から近世18世紀代の肥前磁器までの幅がある。おそらくこの岩窟が約10cm前後埋まった時点での上投棄を示すものであろう。ということは、下限の磁器の年代を遡る17世紀代以降、18世紀代まで活用されていた可能性大と考えられる。ところがその後、前面の谷が開田され、山裾に沿って道が作られるのに伴い、前方部が破壊されたと思われることは既に記したところである。おそらく、その時点ではこの岩窟のものが意味を失っていた結果ではなかろうか。とするとそれは民間信仰を体現した祠としての岩窟そのものではなかったかと推測する。

次に、ST003はシルト質の砂の崖面に加え、底面を大きく掘り下げて後に再度埋め戻し叩き締めて床面を作っているなど、横穴墓またはぐらは無論、祠とも相違する。とって近代の貯蔵用ないし物置代わりの横穴とも違うようであり、その意味では近世の横穴の類型の一つとみておくべきか。

一方、宝泉寺は明瞭な横穴構造であるが、奥に広い左右非対称で、平天井且つ荒い壁面整形を施すものであった。横穴前面の塚越家は、明治期になって下の谷から現在地へ上がってきたといい、その時点で既にこの横穴があったようであるから、少なくとも近代以前の所産ということになるだろう。とはいえ、石塔・

石仏はもちろん、納骨穴も無い。これも山高原二町のST003と同様に解しておくべきか。

第4節 姥田遺跡とその周辺

姥田遺跡の範囲は分布地図に拠れば、南北は今回の調査範囲に一致し（馬登川縁から鹿島台下まで）、東西は大凡馬登川と低地の熊野前古墳―神裏塚古墳を結ぶ範囲とされている。そのことからすれば、調査区域はまさに遺跡の真ん中の南北約60m～100mの幅に相当することとなる。調査結果はその中央やや南側において溝群が、北側の小糸川に近いところで同じく溝群と井戸、土坑若干が検出されたのみで、その調査面積からすれば遺構密度は希薄といってよいものであった。とはいえ、溝群は従来指摘されている小糸川タイプの溝²⁰としてよいものであり、この種の類型としてはその廻り方を含め広範囲に検出された事例として特筆される²⁰。従来、その性格はしばしば排水に求められているが、多くは流水痕跡がなくしかも当遺跡のように途中で切れている場合など、その断面形状（U字形）とも併せむしる区画を意図した棚列状の遺構かとも想定される²⁰。また、北側で検出された井戸跡や土坑については恐らくその西側に展開する中世集落の外縁部に当たっていたためではなかろうか。

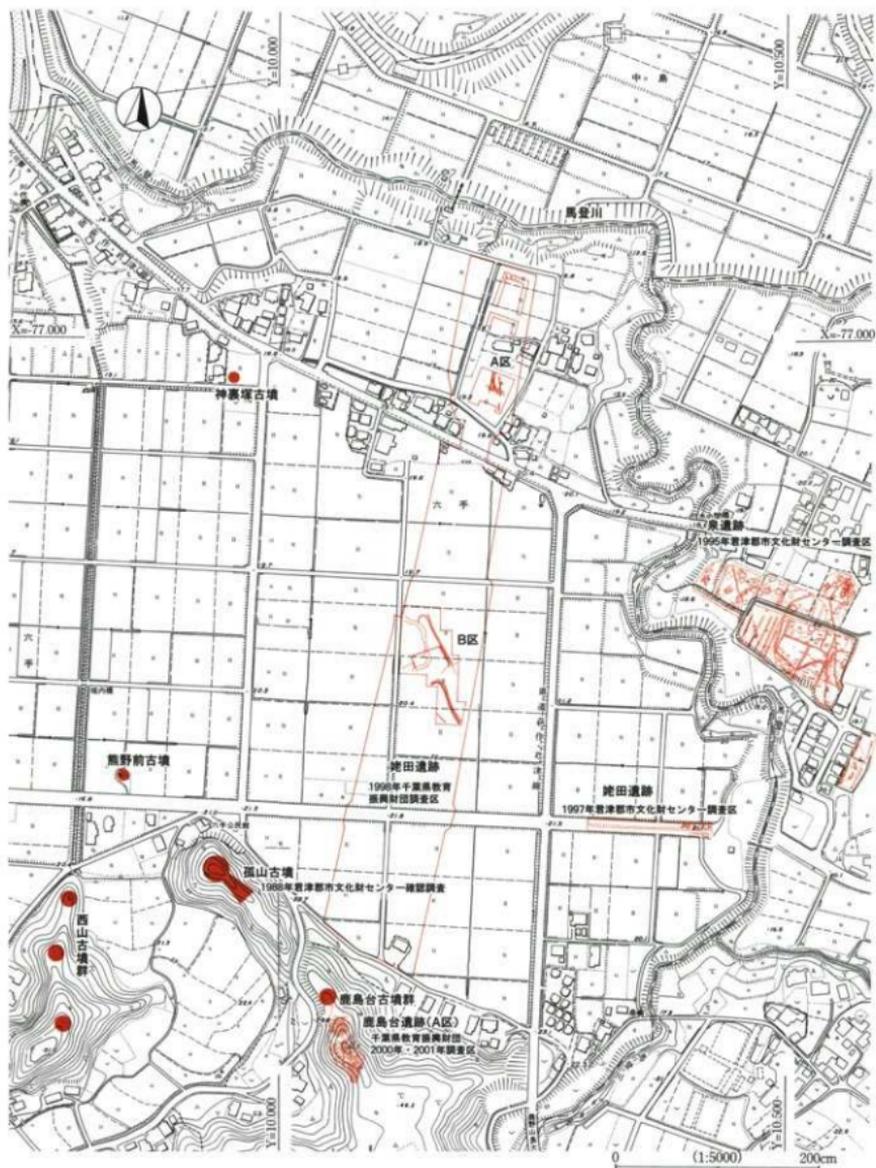
しかし、これがそのままこの遺跡ないし周辺の実態かといえそうではなく、以前行われた君津都市文化財センターによる姥田遺跡の調査²⁰（遺跡南東の馬登川縁の地、1997年に調査されたことから姥田1997と略称）を始め、馬登川対岸の泉遺跡²⁰、更には南側台地上の鹿島台遺跡の稠密な遺構のあり方（当財団調査）からして明らかである。また、遺跡に接するように熊野前古墳や神裏塚古墳も所在する。そうすると、今回の調査結果はどのように理解したらよいのだろうか。

ひとつは、姥田1997の様相（時期にもよるが馬登川縁で溝や円形周溝遺構などが集中する反面、中央部へ行くに従い水田跡のみとなる）が示しているように、その縁辺が集落や墓域となる反面、中央部は耕地として利用されたという図式である。もちろんその場合も相対的に小高い地（馬登川の氾濫原）が選ばれたようで、既調査区は無論、泉遺跡もそうである。

しかし、それだけではない。姥田1997ではⅢ層上面及びそれ以下の数面にわたって（当調査地区Ⅲ層以下に対応）で畦畔が確認されているが、その西端部では湿地に変化し、水田跡は不明確となったという。その延長線上に今回の調査区が存在する点を考慮すると、あっても検出できないということも考えざるを得ないのである。

これに、近代以降の耕地整理による地形の改変が加わる。姥田遺跡の空中写真（図版19）と現在の耕地地割を比較すれば一目瞭然であるが、熊野前古墳―神裏塚古墳を結ぶ西側には小糸川が蛇行しながら小糸川へ至っており、それに合わせてその東西は広く階段状の棚田となっていた。耕地整理時にこの棚田を埋めて現在の均質な水田が作られたとすれば、棚田に隣接する今回の調査区は表土以下を含めある程度削平された可能性があるといえよう。というのは、既述した空中写真によれば遺跡内は条里地割に起因するかと思われる概ね1町四方の基盤目状の区画が確認されるが、だとすれば古代～中世面が遺されていた可能性が高い。しかし、調査区内ではそれも確認し得なかった。

以上、要するに今回の調査結果は姥田遺跡それも中央部の旧状をある程度代弁しているにすぎないと考える。今後の調査に当たっては、Ⅱ層の遺存状況や地形条件を考慮した調査手順や方法が要求されるが、そのことを指摘して今回の成果にかえたい。



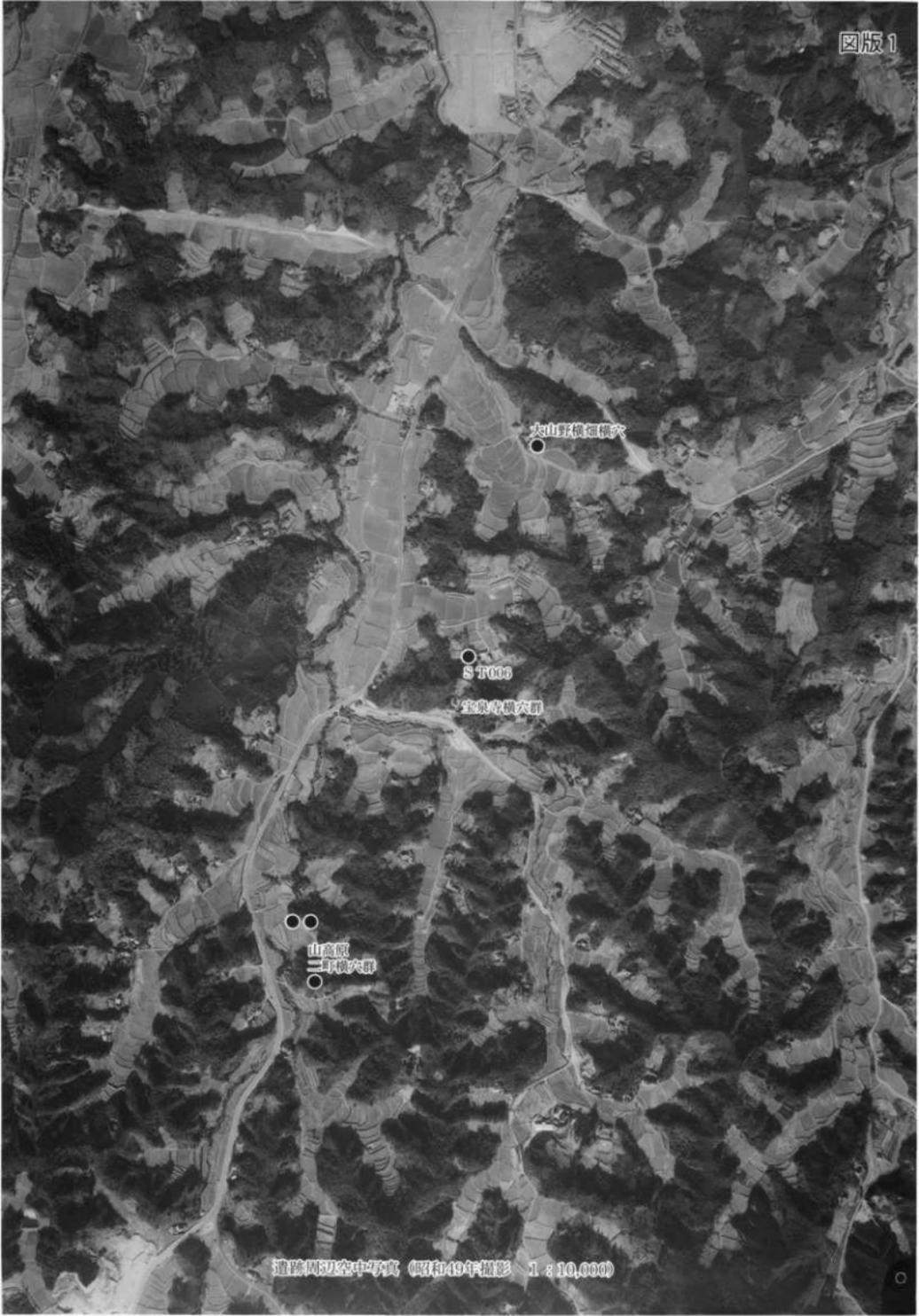
第35図 姥田遺跡とその周辺

註

- 1 例えば大満横穴群など。
相山林経ほか 1973『大満横穴群調査報告』富津市教育委員会
- 2 財団法人市原市文化財センター 1988『大和田遺跡』
- 3 相山晋作ほか 1972『西国吉横穴群』西国吉横穴群発掘調査団
- 4 野中 徹氏ほかの報告①を指すが、付近一帯の横穴群(戦前に遡る調査報告②、③、④)と一連のものである。
①野中 徹ほか 1977『岩横穴群発掘調査報告書』岩横穴群発掘調査団
②千葉県 1915『高滝村外部田横穴』『大和田ノ横穴』『池和田ノ横穴』『史跡名勝天然記念物調査』
第6輯
③内藤政光 1929『下総国外部田の横穴に就きて』『考古学雑誌』19-2
④谷木光之助 1929『上総に於ける刻線壁畫を有する横穴』『武蔵野』五・六月号 武蔵野会編
- 5 高橋座を有する1号横穴など。なお、このような横穴は湘南地域で類例が多い。
- 6 次の2編を参考とした。
①田村良照 2002『南武蔵の横穴墓—横浜・川崎地域—』『考古論叢 神奈河』第10集 神奈川考古学会
②財団法人かながわ考古学財団古墳時代プロジェクトチーム 2002『横穴墓の研究(8)—形態・構造面からの検討を中心に—』財団法人かながわ考古学財団
- 7 財団法人千葉県文化財センター 2003『千葉県所在洞穴遺跡・横穴墓群細分布調査報告書』
- 8 開口していたことから、「後世の落書とも考えられる」と報告する。
財団法人長生群市文化財センター 1991『千代丸・力丸横穴群』
- 9 長柄横穴群については、その一部(小字源六谷)について①高橋報告では「源六谷横穴群」(斉藤報告の5～12号に該当)、②斉藤報告では「徳増・源六谷横穴群」、③県教委調査報告では、「長柄町横穴群徳増支群」とする。本書では県教委が行った分布調査報告(註7文献)に従い長柄横穴群とした。なお、6号(斉藤報告の7号)については高橋報告から引用し、7号(高橋報告の6号)については高橋、斉藤両報告で重複して報告されているが、ここでは両者の報告内容を勘案して実数とした。また、13号については、県教委調査報告による。14、30号については同様註7文献の記載による。
①高橋三男 1958『東上総源六谷横穴群について』『古代』第27号
②斉藤 忠 1977『長柄横穴群』小宮山出版
③千葉県教育委員会 1994『長柄町横穴群徳増支群発掘調査報告書』
- 10 前掲9-2に同じ。
- 11 註7文献に同じ。
- 12 同上
- 13 財団法人茂原市文化財センター 1988『山崎横穴群』
- 14 三木文雄 1936『上総國長生郡二宮本郷村押日横穴群の研究(二)』『考古学雑誌』第26巻第1号
- 15 註7文献に同じ。
- 16 加藤晋平 2002『考古編』『夷隅町史 資料集』夷隅町
- 17 註文献4-②～④に同じ。なお、実数は千葉県および谷木報告を勘案したが、内藤報告では「甚だ見分けにくく、尚又拓本を取るに當つては僅か人物畫の二個及馬の個を一得る事が出来る位であった」という

ように慎重である。

- 18 千葉県 1915「大和田ノ横穴」『史跡名勝天然記念物調査』第6輯
- 19 千葉県 1915「池和田ノ横穴」『史跡名勝天然記念物調査』第6輯
- 20 次の文献。なお、報告者は4号の船について、舷側に垣立構造を有するとして近世以降の作ではないかとするが、筆者は絵をみるかぎりそこまでは読み取れないと考える。
- 財団法人君津都市文化財センター 1996『石神横穴群・石神古墳群・石神遺跡』
- 21 註7文献に同じ。
- 22 当報告
- 23 註7文献に同じ。
- 24 当報告
- 25 内田横穴群とも呼称。なお、文献としては次の①および註7文献があるが、両報告の番号は対応しない。ここでは、①報告の8号を註7文献の5号と考えた。
- ①板詰秀一 1956「千葉県君津郡鹿島に於ける原始絵画を有する横穴概報」『考古学雑誌』第41巻第1号
- 26 註1文献に加えて、註26-1文献にも記載あり。
- 27 内容については次の①文献に従ったが、番号は②文献から採用した。
- ①野中 徹 1983「第四章第四節 横穴」『富津市史 通史』富津市
- ②財団法人千葉県文化財センター 2000「千葉県埋蔵文化財文化財分布地図（4）」
- 28 26-2文献では「鳥・船？」とし、註7文献では「船他」とする。
- 29 註7文献に同じ。
- 30 同上ながら、25-1文献では鳥の線刻があるとする。
- 31 27-2文献に同じ。
- 32 27-1文献に同じ、別名亀田横穴群。
- 33 註7文献に同じ。
- 34 中・近世の多様な岩窟遺構については様々なアプローチを要する。より南の東関東路線内で当財団が調査した富津市の例もその一つ。
- 財団法人千葉県教育振興財団 2006「関山やぐら群」『東関東自動車道（木更津・富津線）埋蔵文化財調査報告書8』
- 35 甲斐博幸ほか 1998「第7回東日本埋蔵文化財研究会シンポジウム 治水・利水を考える」
- 36 この種類例が周辺で広範囲に検出された例として、姥田遺跡の他に常代遺跡、郡遺跡、泉遺跡が挙げられる。この中では、段丘面を縦断する広い範囲に調査が及んだ点や、ほぼ一時期の遺構として捉えられる（つまり重複する遺構がほとんどない）ことなど、当遺跡の調査成果はその性格を考えるうえで注目されよう。
- 37 この点、既に水路というより「畑地などの区画溝であった可能性」が指摘されており、しかも、深く開削する理由として「溝の内側の土地を乾燥させるため水抜き用に掘られた溝」とする考えもある（註39-①文献）。
- 38 財団法人君津都市文化財センター 1998『姥田遺跡発掘調査報告書』
- 39 ①財団法人君津都市文化財センター 1996『泉遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
- ②財団法人君津都市文化財センター 1996『泉遺跡発掘調査報告書Ⅱ』



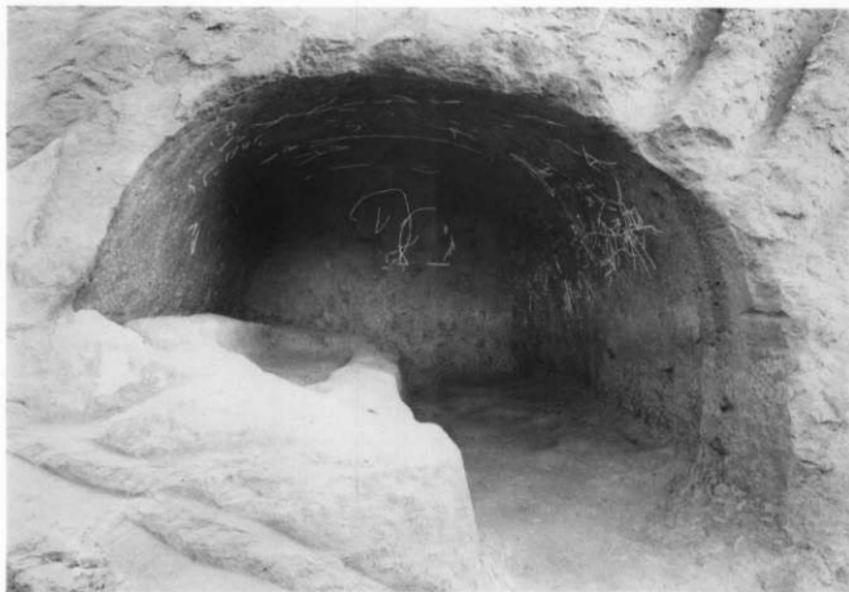


▲ 南西谷部からの遠景

▼ 完了全景



山高原二町横穴群ST001遠景・近景



▲ 奥道先から見た線刻画全景—線刻部分に白色粘土充填—



▲ 奥壁線刻



▲ 奥壁近景



◀ 右側壁線刻

山高原二町横穴群ST001線刻画全景・奥壁近景



▲ 右側壁線刻画全景

▼ 高床建物らしき部分



山高原二町横穴群ST001線刻画（右側壁）



▲ 奥壁線刻画全景



▲ 奥壁線刻画
右側人物部分



▲ 最終近景
(目、口等に白色粘土を充填)

山高原二町横穴群ST001線刻画(奥壁)



▲ 左側壁線刻画全景

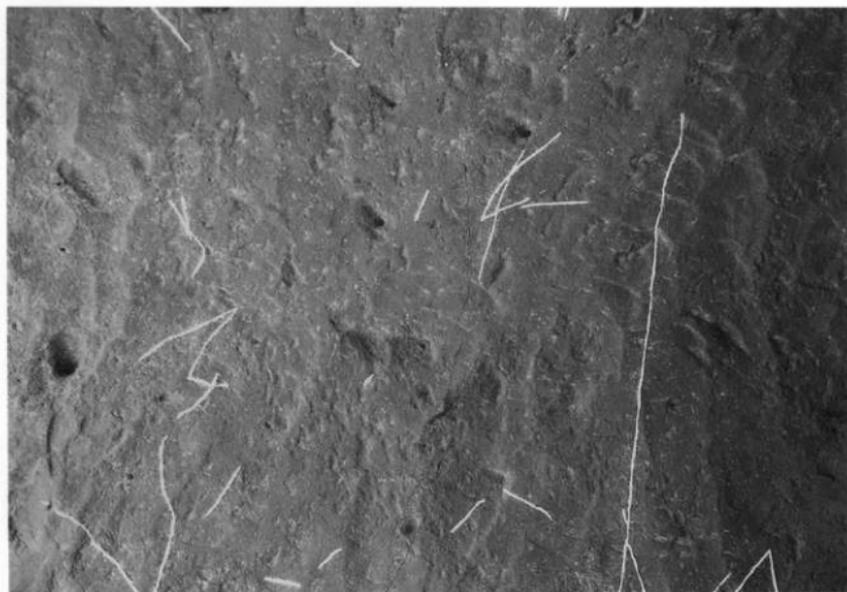
▶ 右側壁線刻画下位部分
(棺台に近い辺り)



山高原二町横穴群ST001線刻画（左側壁）



▲ 玄室中央から見た天井～奥壁



▲ 横方向から見た天井部

- ▶ 壁面整形痕
(U字形痕跡)



- ▶ 羨道から見た外部



- ▶ 羨道から見た南西谷部
(左端山上が岩富寺)





▲ ST002 (右) ・ST003 (左)



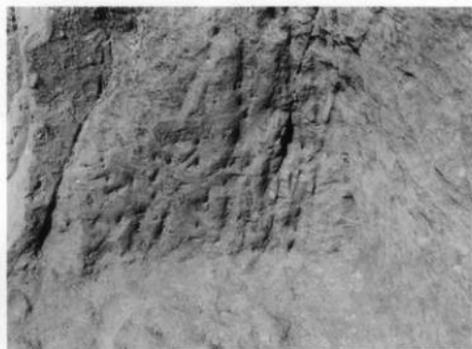
◀ ST002完了全景

山高原二町横穴群ST002・ST003近景、ST002全景

▶ ST002前面
セクション



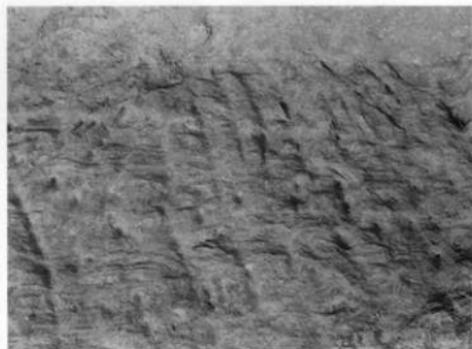
▶ 左側壁下部コーナー

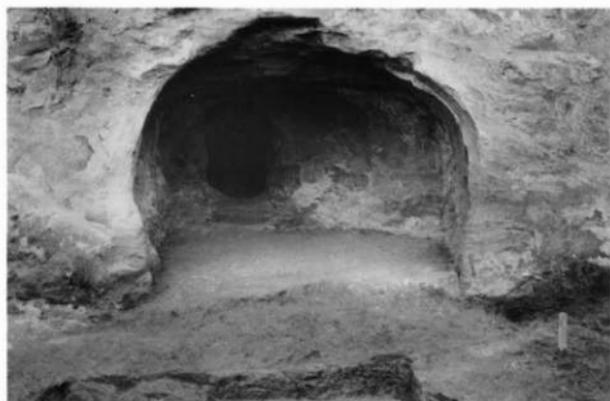


▼ 左側壁上部抉り込み

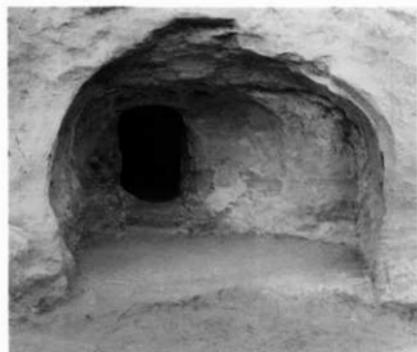


▶ 壁面整形痕





◀ 完了全景



◀ 奥壁



◀ 壁面



▲ 調査前近景

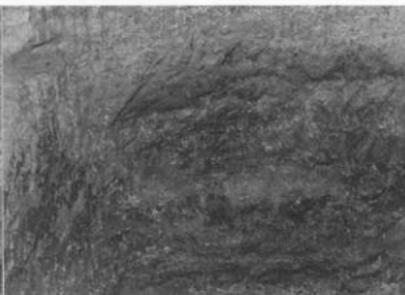


▲ ST006遠景 (矢印)

▶ 内部完了
全景



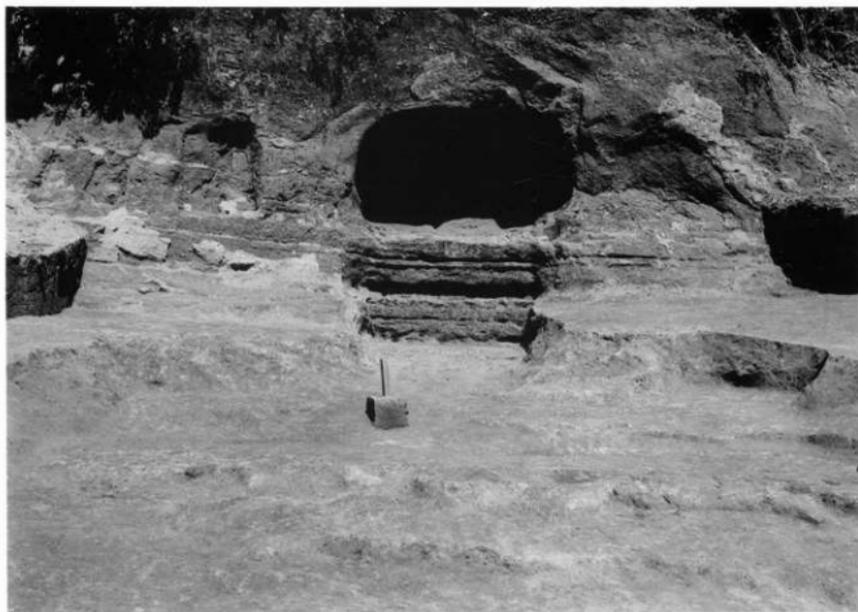
▲ 天井部



▲ 右奥壁～側壁挟り込み部分

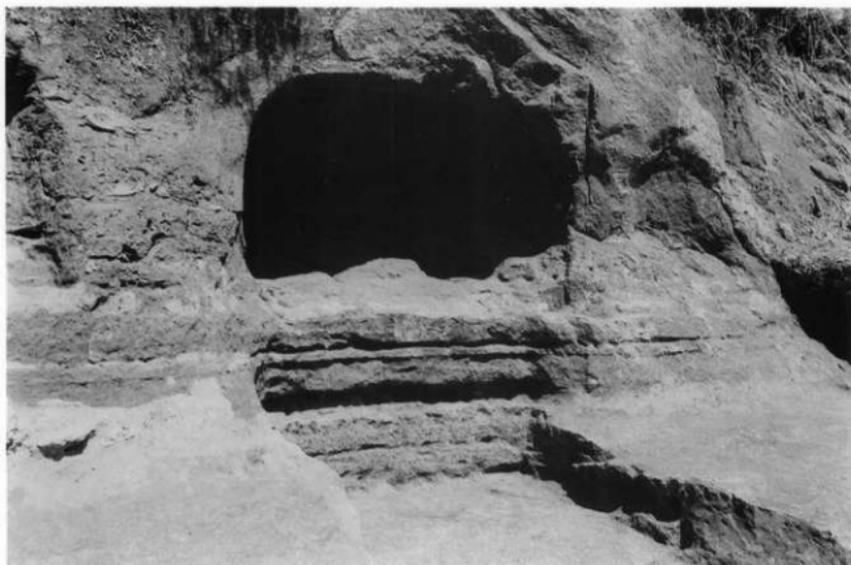


▲ 調査前遠景

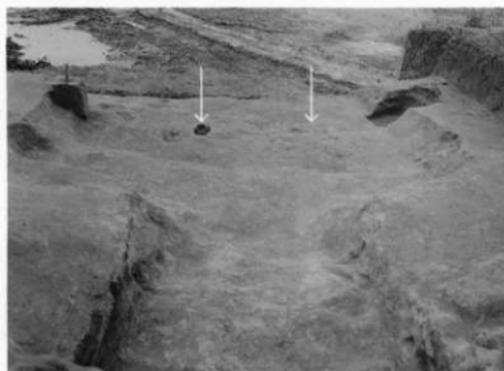


▲ 正面全景

大山野横畑横穴ST001遠景・全景



▲ 玄室・隔壁部



◀ 墓前城
矢印は柱穴位置

▶ 墓前城から南側
丘陵部を見る



大山野横畑横穴ST001近景・墓前城ほか



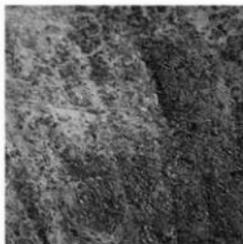
◀ 玄室全景



◀ 右側壁



▲ 左側壁



▲ 左側壁面整形状況

▶ 羨道部セクション

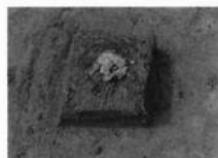
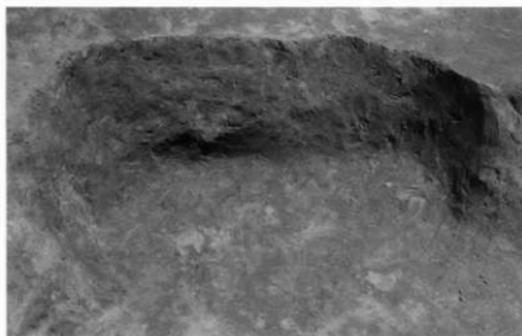


▶ 墓前城遺物出土状況



▶ 墓前城（北東から）





▲ SK001銭出土状況

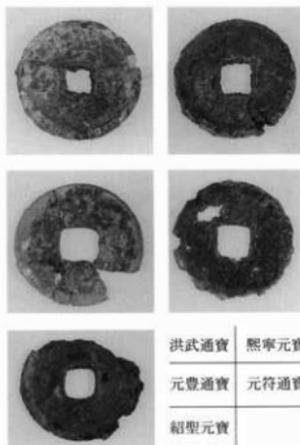


▲ 銭錆着状況
(横方向から)

◀ SK001



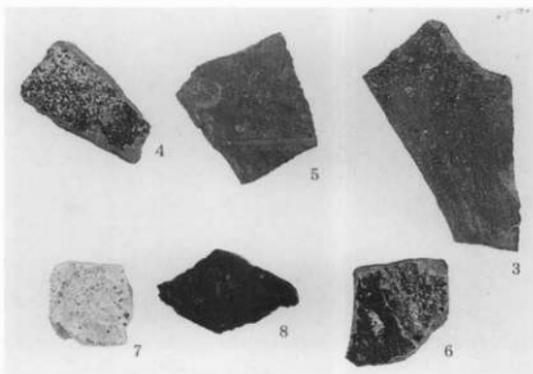
▲ SK002



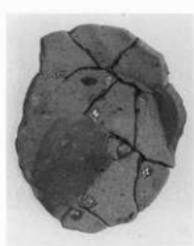
▲ SK001出土銭貨
(洪武通寶に1枚錆着)



◀ SK002セクション
中央セクションラインに現れた
高まりは墓坑の盛り土と思われる



山高原二町横穴群ST002出土遺物 (番号は第7図に対応)



大山野横畑横穴出土遺物
(番号は第5図に対応)

▶ 羨道部覆土
2~3層出土
磁器



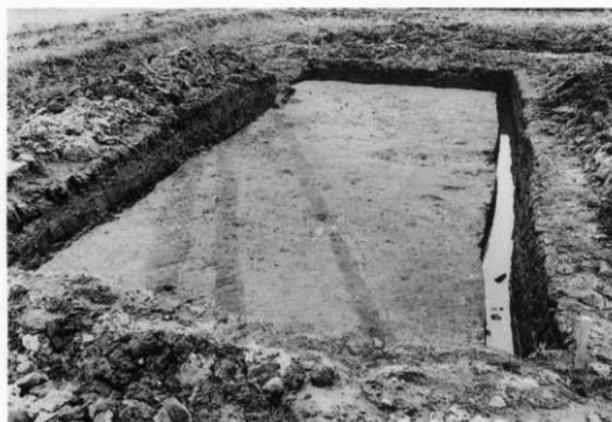
山高原二町横穴群・大山野横畑横穴出土遺物



地面遺跡周辺空中写真 (昭和45年撮影) 約1:10,000



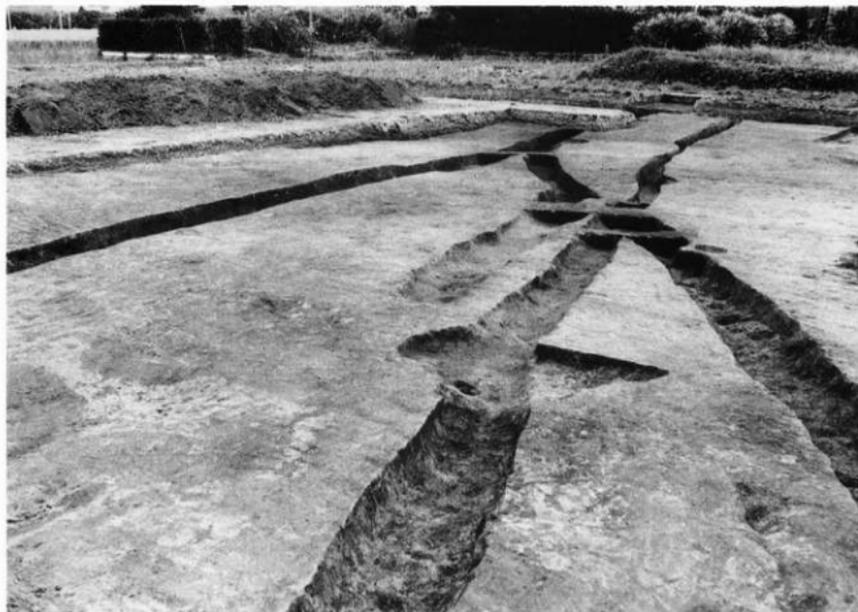
T18畦畔検出状況



T9溝検出状況



T F区完掘状況



A区溝群 西側部分 (南から)



A区溝群 中央～東側部分
(南から)

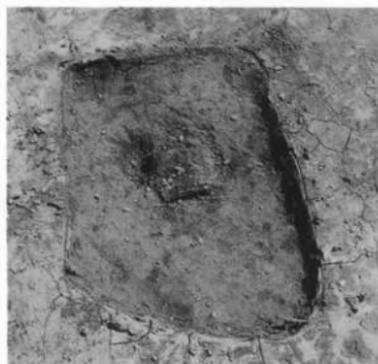
姥田遺跡A区溝群各景



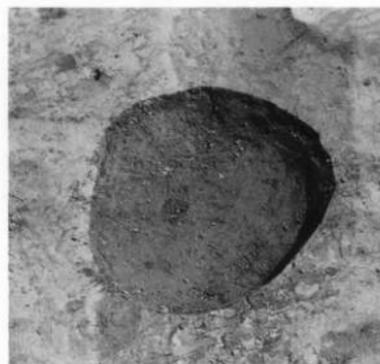
SE001



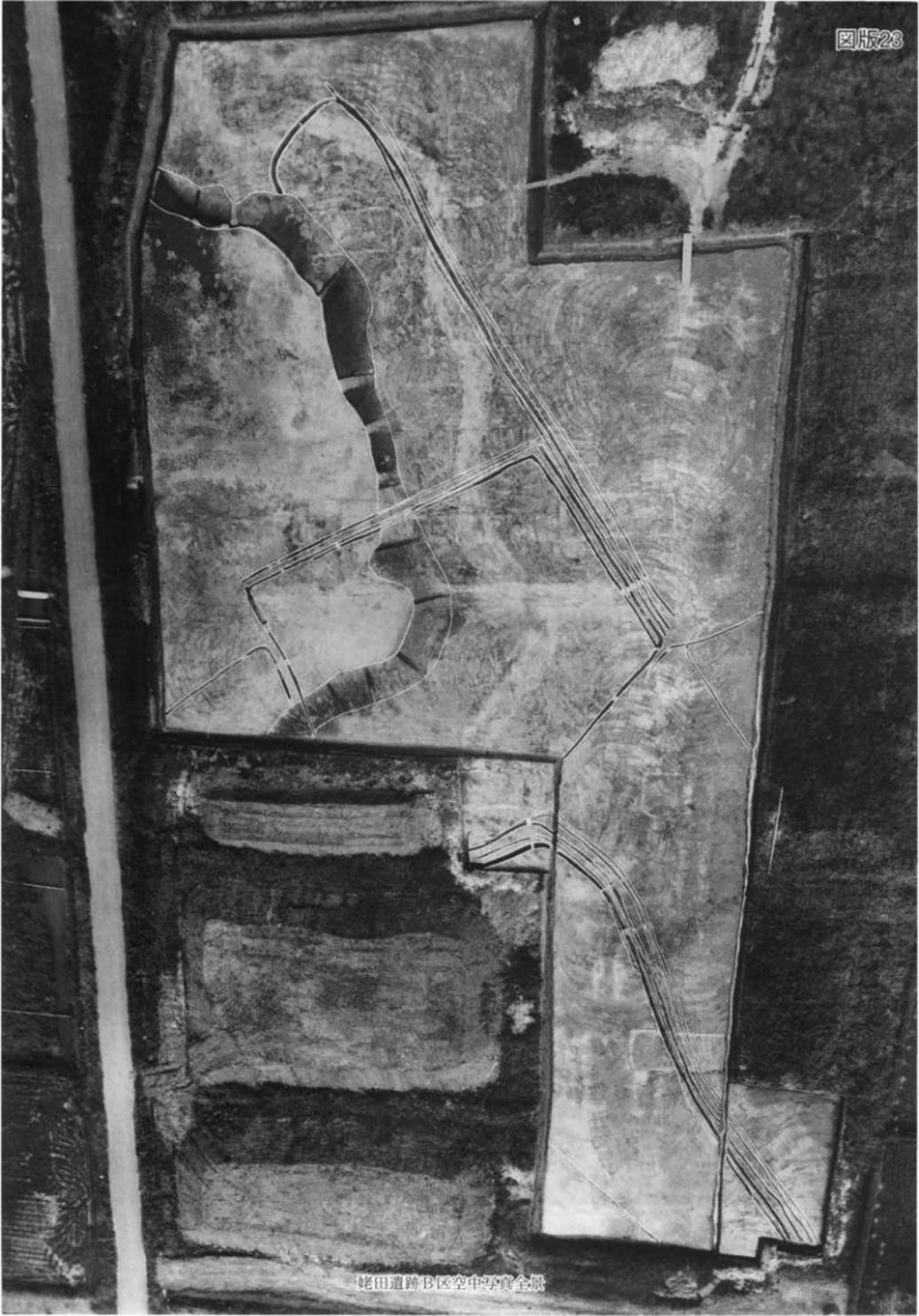
SE001
土層断面



SK001



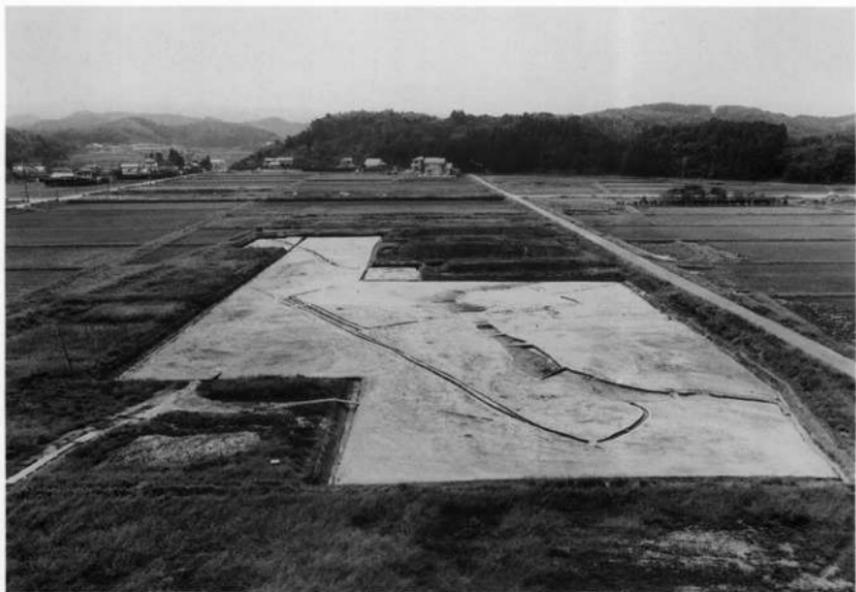
SK002



姥田遺跡B区空中写真全景



B区空中写真（南から）



B区空中写真（北から）

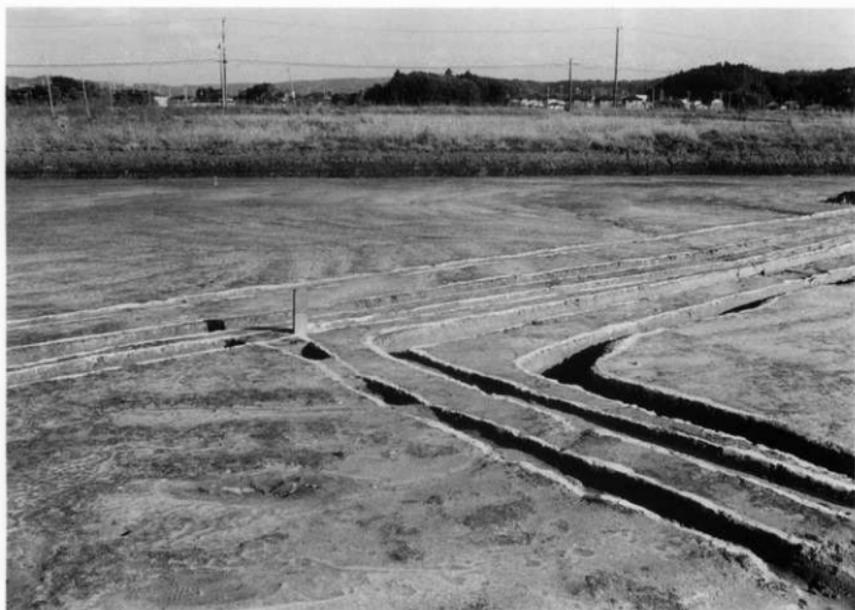
姥田遺跡B区空中写真各景



B区 溝群断面



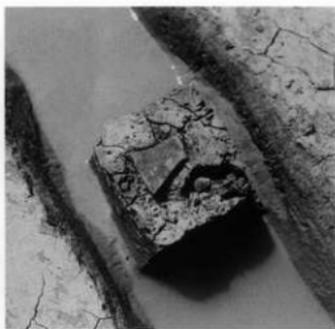
B区 溝群（北側）



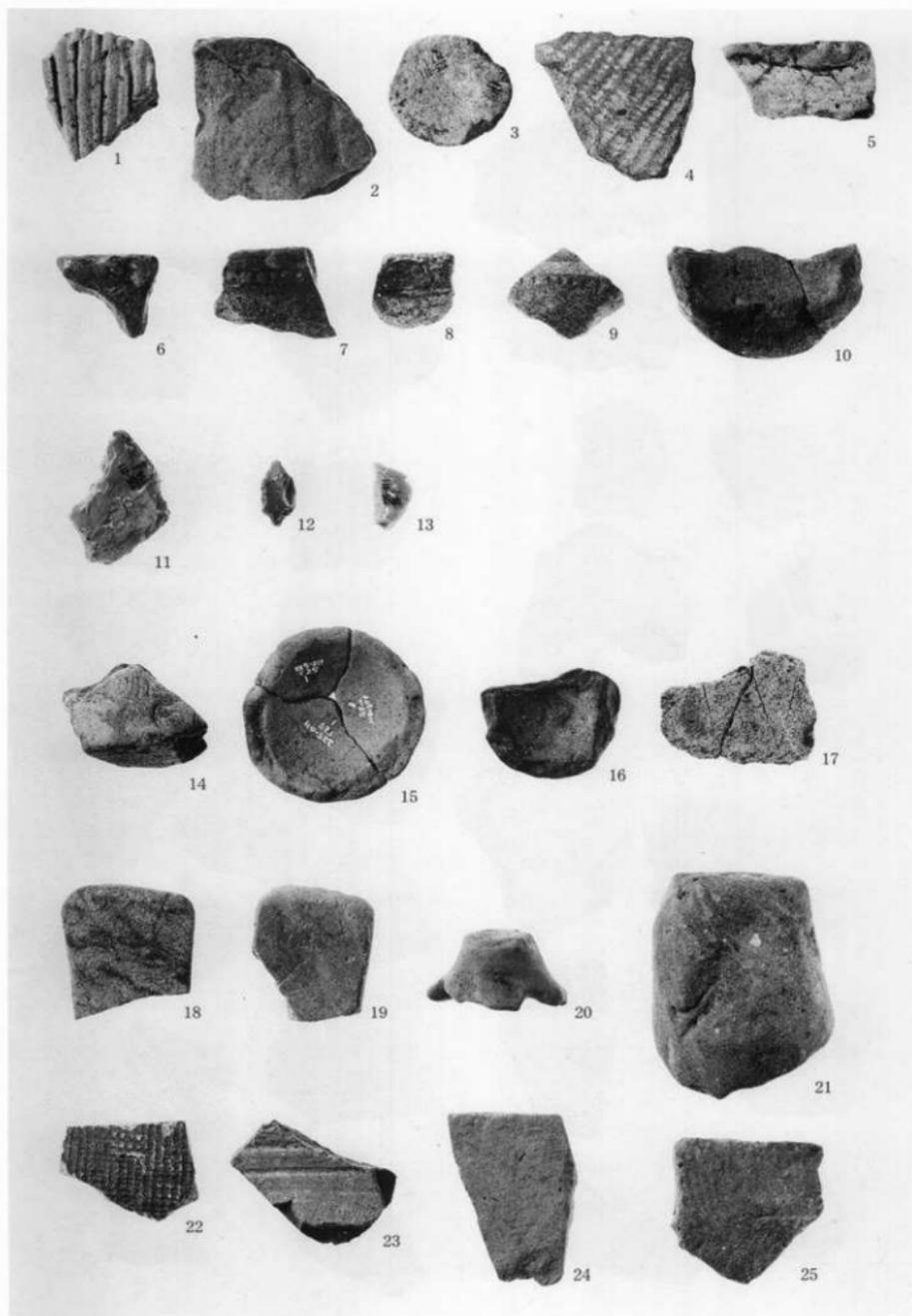
B区溝群（分岐部分）



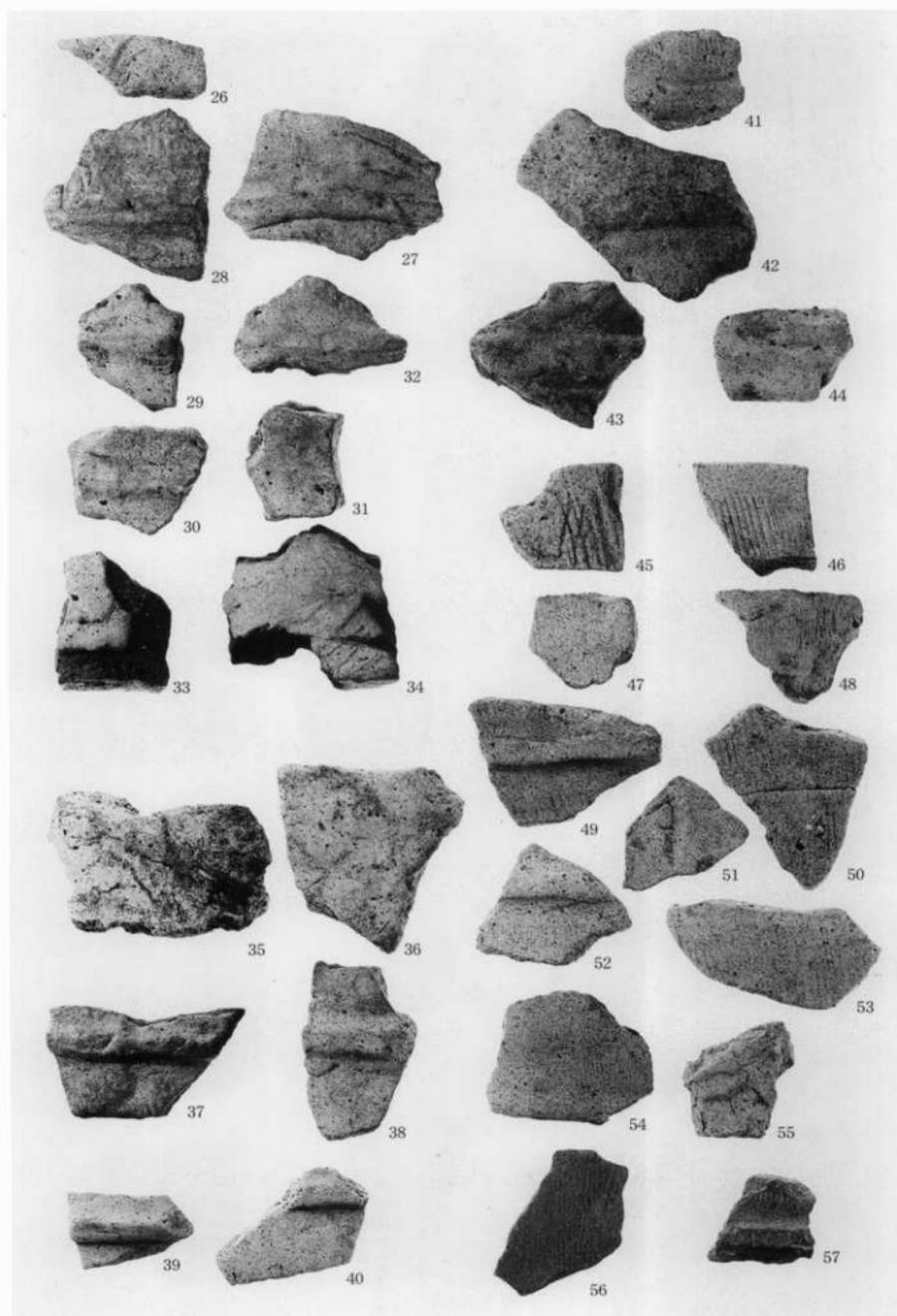
B区北側先端部分



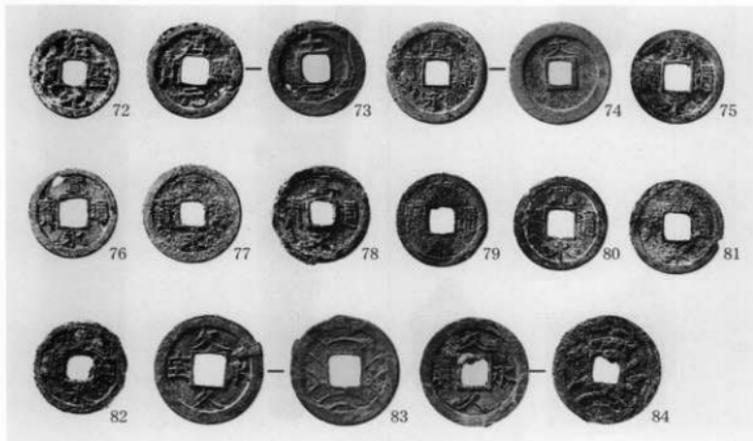
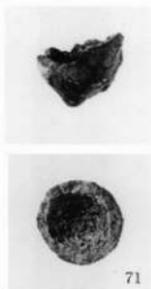
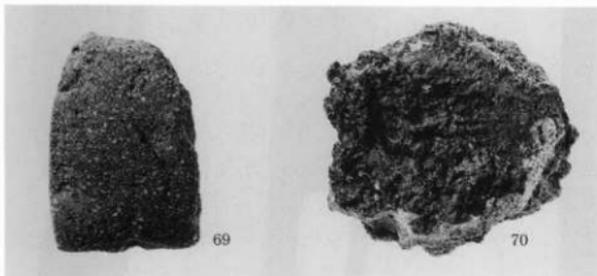
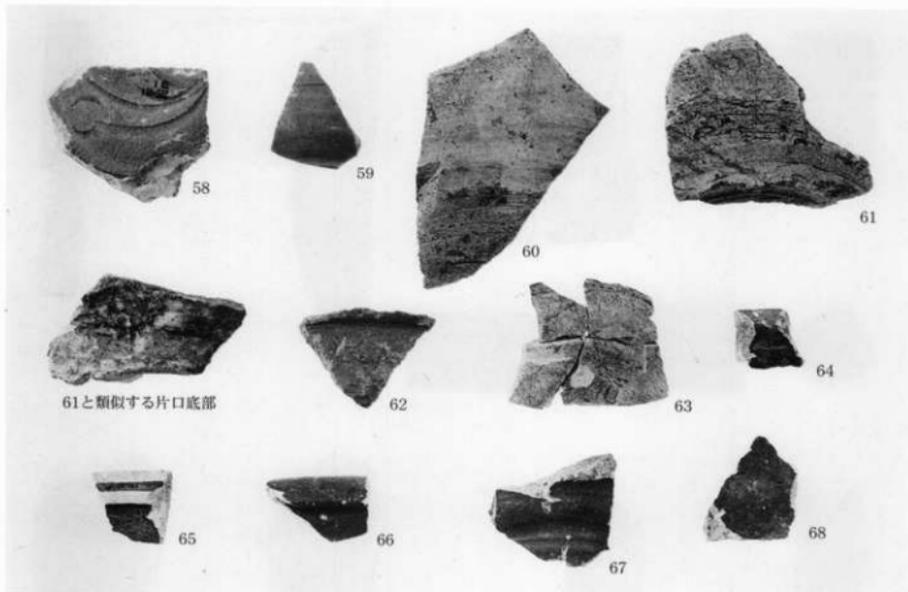
B区溝内遺物出土状況



姥田遺跡出土遺物（1）※以下番号は挿図に対応



姥田遺跡出土遺物（2）



姥田遺跡出土遺物（3）



姥田遺跡出土遺物(4)

報告書抄録

| | |
|--------|---|
| ふりがな | ひがしかんとうじどうしゃどう(きさらづ・ふつつせん)まいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ |
| 書名 | 東関東自動車道(木更津・富津線)埋蔵文化財調査報告書 |
| 副書名 | 君津市山高原二町横穴群・宝泉寺横穴群・大山野横畑横穴・姥田遺跡 |
| 巻次 | 10 |
| シリーズ名 | 千葉県教育振興財団調査報告 |
| シリーズ番号 | 第578集 |
| 編著者名 | 小高春雄 |
| 編集機関 | 財団法人千葉県教育振興財団 文化財センター |
| 所在地 | 〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地2 TEL 043-424-4848 |
| 発行年月日 | 西暦 2007年3月20日 |

| 所収遺跡名 | 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|----------|---------------------|-----|------|-------------------|--------------------|-----------------------|---------|------|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| 山高原二町横穴群 | 千葉県君津市大山野字若祭588-4ほか | 225 | 029 | 35度 16分 50秒 | 139度 55分 48秒 | 20050929～ 20051031 | 横穴墓3 | 道路建設 |
| 宝泉寺横穴群 | 千葉県君津市大山野字本越704-6 | 225 | 028 | 35度 17分 11秒 | 139度 55分 42秒 | 20051020～ 20051031 | 横穴墓1 | 同上 |
| 大山野横畑横穴 | 千葉県君津市大山野字横畑218 | 225 | 030 | 35度 17分 26秒 | 139度 55分 48秒 | 20060406～ 20060427 | 横穴墓1 | 同上 |
| 姥田遺跡 | 千葉県君津市六手字神田379ほか | 225 | 011 | 35度 18分 25秒 | 139度 56分 43秒 | 19980401～ 19980930 | 52,300㎡ | 同上 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|----------|-----|----------|--------|--------------------|--------------------------------------|
| 山高原二町横穴群 | 横穴墓 | 古墳時代中・近世 | 横穴墓1ほか | 常滑甕、中・近世陶磁器、炉壁片 | 横穴墓全面に古墳時代の可能性がある人物、建物ほかの線刻画が刻まれていた。 |
| 宝泉寺横穴群 | 横穴 | 中・近世 | 横穴1 | | |
| 大山野横畑横穴 | 横穴墓 | 古墳時代中・近世 | 横穴墓1ほか | 土師器、銭貨 | 君津地域南部では珍しい明瞭な高壇また広い墓前域が検出された。 |
| 姥田遺跡 | 包蔵地 | 古墳時代中世 | 溝群ほか | 須恵器、土師器、埴輪、中・近世陶磁器 | 君津地域に特徴的な古墳時代の溝群が検出された。 |

千葉県教育振興財団調査報告第578集

東関東自動車道(木更津・富津線)埋蔵文化財調査報告書10
—君津市山高原二町横穴群・宝泉寺横穴群・大山野横畑横穴・姥田遺跡—

平成19年3月20日発行

編 集 財団法人 千葉県教育振興財団
文化財センター

発 行 東日本高速道路株式会社
関東支社
東京都台東区上野1丁目10番14号
財団法人 千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡809番地の2

印 刷 三 陽 工 業 株 式 会 社
市原市五井5510-1